明治学院歴史資料館資料集

第5集

―戦前・戦中・戦後の明治学院―

明治学院歴史資料館

戦前・戦中の明治学院事情座談会　2006年11月11日開催

左側より　大澤哲夫氏、菊地義雄氏、現影昭夫氏

左側より　南精一氏、大河原忠蔵先生

戦後の明治学院事情座談会　2007年10月31日開催

左側より　中村弘氏、副島秀夫氏、藤本美彦氏

左側より　国見博氏、石田豪司氏、後藤進先生

明治学院歴史資料館資料集　第五集

明治学院歴史資料館

序文

明治学院歴史資料館館長　久山　道彦

『明治学院歴史資料館資料集』第五集をお届けします。この度の第五集は、二〇〇六年十一月十一日（土）午後に行われた「戦前・戦中の明治学院事情座談会」と、二〇〇七年十月三十一日（水）午後に行われた「戦後の明治学院事情座談会」のそれぞれを、録音したテープから原稿を起こしたものです。また、座談会に出席された方々から御提供いただいた貴重な資料および『明治学院同窓会報』等に掲載された記事も転載いたしました。以下、これまでの編集経緯について、簡潔に申し上げたく存じます。

さて、二〇〇五年に『明治学院歴史資料館資料集』第二集として「『明治学院九十年史』のための回想録」を刊行しました折に、戦前・戦中・戦後の明治学院事情の回想録が極めて不十分であることに気づき、残念に思っておりました。その後、当時の明治学院に在籍しておられた卒業生の方々から、大変な時代を生き抜いた学院の実情を、その場にいた人間しか知らない教師たちの様子や学生たちの本音を、はっきりと記録して残しておくべきではないかという声があり、何らかの企画の必要性を痛感いたしました。

そうこうするうちに、二〇一三年に『明治学院百五十年史』を刊行する予定がタイム・スケジュールに

のぼり、二〇〇六年十一月には『明治学院百五十年史』編集委員会が発足いたしました。そして、明治学院歴史資料館は、『明治学院百五十年史』編纂事業の事務局として、『明治学院百五十年史』編集委員会をサポートする役割を担うことになりました。

そのような記念事業の計画過程において、明治学院歴史資料館として、戦前・戦中・戦後の卒業生の方々に集まっていただき、座談会を開き、懸案であった戦前・戦中・戦後の明治学院事情についての記録を残すことが、運営委員会において決定されました。このような座談会の意図を御理解下さり、御多忙の中、出席を御快諾下さったのみならず、当時の日記や写真など、様々な資料を周到に御準備下さり、また惜しげもなく御寄贈下さった出席者の方々に、心から御礼申し上げる次第です。

また、資料として、この時期の明治学院に関する様々な声を、若干の訂正を加えて転載したり、新たに付け加えました。個々人の考えや月旦評は多様であり、自らの経験を相対化する充分な歴史的吟味を経ていないと思われるものもありますが、それも明治学院の歴史の一部でありましょう。

今年二〇〇八年は、明治学院の発足点にあたるヘボン塾創設の一八六三年（文久三年）から一四五年目になります。今回の資料集に収録された二つの座談会によって、昭和十年代から昭和二十年代までの明治学院事情が、当事者の肉声として明らかになり、二〇一三年に刊行予定の『明治学院百五十年史』にとっての有益な基礎資料となることを願っております。

また、本文中には、現在では差別用語と考えられる記述があります。本歴史資料館は、人権の尊重と差別の撤廃を強く願い、差別の歴史から学ぶために、原文をそのまま歴史資料として収録し、批判と検討に供することとしました。

以上、今回の資料集の内容の編集経緯を少しく申し述べさせていただきました。今後、明治学院歴史資料館としては、昭和三十年代、昭和四十年代、昭和五十年代、昭和六十年代の「明治学院事情座談会」も計画しております。貴重な記録を留める作業への御協力を、何卒宜しく御願い申し上げます。また、新たに入手した極めて歴史的価値の高い資料の展示・公開などにも、併せて努力したく思っております。どうか楽しみにお待ち下さい。

なお、本資料館の案内書およびホーム頁にも書かれておりますように、本学創設以来どの時代のものであれ、明治学院に関する資料がお手元にございましたら、個人的なものも公のものも含め、歴史資料館まで御連絡いただければ幸甚でございます。今後とも関係各位の御支援と御協力を御願い申し上げます。

最後になりましたが、この資料集の発刊に際し、多くの有益な御助言を与えて下さった平林武雄本学名誉教授、『明治学院同窓会報』からの転載を御快諾下さった星靖夫明治学院同窓会会長に心より御礼申し上げます。また、これまで歴史資料館の活動を支えて下さった学院長、運営委員、研究員、研究調査員の方々にも、二年間の館長の任を辞するにあたり、感謝を捧げます。

目次

序　文
戦前・戦中の明治学院事情座談会（二〇〇六年十一月十一日開催）
久山　道彦（館長挨拶）……1
菊地　義雄（昭和十六年中学部・昭和十九年専門学校経営科卒業）……7
大河原忠蔵（昭和十七年中学部卒業・元明治学院高等学校教諭）……12
南　精一（昭和二十一年専門学校英文科・昭和二十九年大学第二部英文学科卒業）……23
大澤　哲夫（昭和十九年中学部・昭和二十三年専門学校経済科卒業）……36
現影　昭夫（昭和二十四年中学・昭和二十六年高等学校・昭和三十年第二部経済学科卒業）……45
座談会
原　豊（司会・昭和三十七年中学・昭和四十年高等学校・昭和四十四年大学フランス文学科卒業・明治学院歴史資料館職員）……56
資料
都留仙次先生のご遺徳をしのぶ（内山兼演）……71
平林武雄先生訪問記……75
第二部の思い出（竹中治郎）……102
社会科のつぶれなかったこと（大竹新助）……108
［戦前・戦中の明治学院中学部の頃］（向原　茂）……111
［戦時中のこと］（加藤　新）……122

〝あの頃〟（藤本美彦）……123
戦時の学院生活（繁尾　久）……125
戦争末期の学院生活（峯岸久三郎）……127
昭和十九年四月明治学院中学部入学生徒の戦中メモ（現影昭夫）……129
戦後の明治学院事情座談会（二〇〇七年十月三十一日開催）
久山　道彦（館長挨拶）……143
後藤　　進（昭和十七年中学部卒業・元明治学院高等学校教諭）……149
藤本　美彦（昭和二十三年中学部・昭和二十四年高等学校・昭和二十八年大学英文学科卒業）……161
副島　秀夫（昭和二十三年中学部・昭和二十四年高等学校・昭和二十八年大学経済学科卒業）……173
望月　克仁（昭和二十四年中学・昭和二十五年高等学校・昭和二十九年大学経済学科卒業）……180
石田　豪司（昭和二十四年中学・昭和二十七年高等学校・昭和三十一年大学社会学科卒業）……184
国見　　博（昭和二十四年中学・昭和二十七年高等学校・昭和三十一年大学経済学科卒業）……194
中村　　弘（昭和二十五年中学・昭和二十八年高等学校・昭和三十二年大学英文学科卒業）……197
座談会
原　　豊（司会・昭和三十七年中学・昭和四十年高等学校・昭和四十四年大学フランス文学科卒業・明治学院歴史資料館特別契約職員）……207
資料
戦中戦後を通じた激動の生徒・学生としての明治学院生活（副島秀夫）……215
戦後野球部史―明治学院大学野球部―昭和二十一年―昭和二十八年（望月克仁）……227
戦後野球部史―明治学院大学野球部―昭和二十九年以降（国見　博）……237

戦前・戦中の明治学院事情座談会（二〇〇六年十一月十一日開催）

久山道彦　それでは、本日の座談会を始めるにあたり、開会のご挨拶を申し述べさせていただきます。私が明治学院歴史資料館の館長をさせていただいております文学部英文学科の久山と申します、よろしくお願いいたします。本日は、天気がすぐれず、足下の具合も悪い中、明治学院のためにお集まりいただき、誠にありがとうございます。今日は、先だって皆様方にお願いいたしましたとおり、戦前・戦中の明治学院の事情について、座談会を催したく存じます。

さて、明治学院歴史資料館は、現在、本学の百五十周年に向けて様々な準備をしております。明治学院は本年、開学以来百四十三年目でございますので、歴史資料館といたしましても、色々な資料の調査・新資料の発掘・これまでの資料の整備、形態変換、展示会や講演会など、多岐にわたる活動をしております。また、その一環として、歴史資料館では、重要と思われる様々な資料を『資料集』として公刊しております。そして、『百年史』を刊行してから、もう三十年近くも経ちますので、新たに『百五十年史』刊行に向けて鋭意努力している次第です。

まず、今回の座談会を企画いたしました経緯につきまして、若干のご説明をしたく存じます。私達が明治学院の歴史を振り返った時に、後世に語り伝えるべき事柄について、まだ見落としている点があるので

はないか、あるいは、一方的な判断や資料に基づく歴史叙述をしていないかということを、歴史資料館の運営委員会では、このところ議論を重ねて参りました。そして、卒業生の皆様方からも様々な声が届きまして、やはり戦前・戦中の資料について、まだ掘り出し足りないところがあるのではないか、聴くべき方々から、まだ貴重なご体験を伺っていないのではないかという疑問が生じました。ですから、その時期に本学でお過ごしになられた、本日お集まりの皆様方や当時の先生方が体験されたこと、そして伝えておきたいことを、できるだけ「生の声」として語っていただき、残しておきたいと思うようになりました。今の若い人たちの中には、戦争のこと、戦前・戦中のことをあまりよく知らないという方が多うございます。それならば、皆様方が体験されたこと、そして当時の明治学院がどのような状況であったのか、教えられていた先生方のご様子、学院で生じた様々な出来事に関して、当事者であられた皆様方は何を思ったのかなど、皆様の「生の声」として聴かせていただきたいと考えました。その声によって、実は、これから明治学院に関わる世代の方々に、再び多くの困難な状況が降りかかって参ります時に、明治学院はどう歩むべきか、また明治学院が歩んできたことを振り返って、本学の歴史から何を学ぶべきかを考えて欲しいと思うに至りました。かような経緯がございまして、運営委員会の方々のご賛同を得まして、本日ここに、戦前・戦中の明治学院のご事情を知る皆様方に集っていただいたのでございます。

従いまして、皆様方の中には様々な背景をお持ちの方がいらっしゃいますし、明治学院で過ごされた時間にも多少の幅がございますが、それぞれに学院のことを大切にお思いくださり、貴重な資料をご持参くださって、その資料をもとにお話しいただけますことを、明治学院として非常に感謝いたしておる次第です。特に、戦前・戦中の本当に難しい時期に、キリスト教を建学の精神とする明治学院はどうであったの

か問われます。明治学院は、お手元にありますように、これまでも『心に刻む』を刊行するなどして、本学の歩みの中で、反省すべき点や過ちと考えられる点などを、学院の良心として取り上げるという地道な取り組みを続けてまいりました。そのことは、国内だけではなく台湾、それから中国、そして朝鮮半島にいる人たちからも、「やはり明治学院は他の大学とは違う」というように受け止められております。当時、本学で過ごされた方々も、明治学院のそのような姿勢を支持してくださり、またさらに、まだ語られていないことも、本学の歴史に留めて欲しいという声もいただいております。ですから、歴史資料館といたしましては、明治学院の足跡のなかで、良かったことも悪かったことも、すべてを歴史のうちに留めて、憶えて、そして、これからの厳しく難しい時代を歩む次世代のために残しておくべきであると考えました。本日はご忌憚のないご意見を、そして実際に体験されたことを、未来の明治学院のためにお話ししていただきたいと思います。

ここで一つ、お願いなのですが、皆様方に差し上げました書面にもお書きしましたように、当時を知る皆様方にお話を伺って、「記憶を残すべく」座談会を開くということでございますので、まずは今日の座談会のテープ録音をどうかお許しいただきたいと思います。また、先にも申し上げましたように、このテープ録音を起こして、この座談会を『資料集』として公刊することを考えております。もちろん皆様方に校正原稿を見ていただくという手続きを経てのことでございます。何卒ご協力をお願い申し上げたく存じます。それから本日お持ちくださいました非常に重要な資料など、ご寄贈いただけますものや、私たちに複写・コピーその他でも結構ですから、いただけますものなどがございましたら、宜しくご協力いただきたいと思います。

あと、お手元にこのようなパンフレットがございますでしょうか。これは十一月一日に開かれました運営委員会に間に合うようにと、原さんと野田さんが本当に奮闘してくださいまして、推敲に推敲を重ねて作ったばかりの「明治学院歴史資料館案内」というパンフでございます。皆様方、ご存知でしょうか。私も初めて聞いたのですが、いま地方の高校から東京に修学旅行に来る学生さんたちは、グループに分かれて「キャンパス・ツアー」をするのだそうです。自分一人で受験しようと思う大学に行くのではなくて、仲間と一緒に東京の色々な大学を見て回って、そのキャンパスの雰囲気を実際に肌で感じ取ってから受験するかどうかを決めるのだそうです。明治学院はそのようなキャンパス・ツアーの中に入っておりまして、今回このパンフレットを作りましたところ、入試センターの方からも、法人課の方からも、こういうものを、旅行会社を通じてキャンパス・ツアーに訪れた高校生に配布するなど、多いに活用して、明治学院がいったいどのような学校であるのかを広く知らせたいと言われております。

このような広報活動もやっておるわけですが、こういう活動すべての基いとして、資料収集がございます。明治学院に関わる色々な資料をご寄贈いただいております。もし皆様方のお手元に貴重な資料とか、当時のもの、どんなものでも、「こんなものどうかな」とお思いでしたら、どうか歴史資料館にお声をおかけくださいませ。明治学院といたしましては、資料収集、特に戦前・戦中のものは、ご存知のとおり戦災がありましたので、焼失したものが多うございます。卒業証明書とか、当時の教科書、校友会の色々な出版刊行物などでも、実は貴重な資料なのです。ご存知のとおり、明治学院は日本のミッション・スクールで一番古い学校でございますから、キリスト教学校教育同盟などでその明治学院を初めとするミッション・スクールの歴史をもう一度再調査などしております時に、本学が所蔵している資料は、本当に日本の

教育史にとっても極めて貴重なものでございます。ですから、どんなものでも、またはお知り合いの方でも、当時のものを所蔵されておられた場合には、どうかお手数をおかけして申し訳ございませんが、そして僭越ではございますが、歴史資料館のことを思い起こしていただき、貴重な資料をご寄贈くだされば非常に助かりますので、そのことを重ね重ねで恐縮ですが、お願いする次第でございます。

最後になりますが、この歴史資料館自体についても、ホーム頁その他でアピールしております。しかし、まだ当館をご存じない方々もたくさんおられますので、明治学院歴史資料館の存在を、そして当館が意欲的に資料収集を行っていることなどを広くお伝えいただけますようお願い申し上げます。これからお食事をしていただき、そして一時から三時半ぐらいまで、お話をしていただきたいと思います。申し訳ございませんが、私は所用がありまして、これから皆様とご一緒に貴重なお話を伺うことができません。歴史資料館スタッフの原さんと野田さんが、皆様方からお話を伺ったり、記録を取ったりさせていただきますので、宜しくお願い申し上げます。それでは、歴史資料館の運営委員会を代表いたしまして、本学の歴史において非常に欠けている戦前・戦中の学院事情を補いたい、そして皆様方が接した先生方の姿、それからご苦労、その辺のことを伺って、本学の記憶に留めたい一心でありますことを、開会にあたり、申し上げました次第です。ご清聴ありがとうございました。

原　私は歴史資料館の原と申します。はっきり申しまして戦後生まれなもので何もわかりません。明治学院中学に昭和三十四年入学ですので、そのあと中、高、大と出ておりますが、戦前のこと、戦中のこと、何にもわかりませんし、戦後のこともよくわかりませんのでよろしくお願いいたします。それでは最初に、

既にそれぞれご存知かとは思いますが、メンバーをご紹介させていただきたいと思います。まずメンバー・リストの千原英之進先生ですが、先程お電話しましたところ、体調があまり良くないので欠席させていただきたいということでした。次の方が菊地義雄さんでございます。

菊地　菊地です。

原　昭和十六年中学部卒、昭和十九年専門学校経営科卒、山本秀煌先生のお孫さんにあたられます。昭和五十四年に卒業されました菊地克之さんのお父様でいらっしゃいます。

菊地　息子と二人で生活しております。男二人で家事を忙しくやっております。私、欠席された千原さんと同じように大正十二年、一九二三年生まれ、八十三歳でございます。

原　一応メンバー紹介をざっとさせていただいて、その後で菊地さんからお話ししていただければと思いますので、よろしいですか？あと、大河原忠蔵先生ですね。

大河原　はい、大河原忠蔵です。

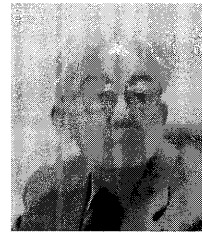
原　元奈良教育大学教授、元明治学院高校国語科教員、昭和十七年の明治学院中学部卒でございます。それから南精一さん。

南　南でございます。

原　昭和二十一年専門学校英文科卒、昭和二十九年大学二部英文科卒、「大戦末期の英語教育」という論文を執筆されております。青山学院から専門学校、明治学院統合になった時の青山学院から明治学院に移られた経験をお持ちの方です。それから大澤哲夫さん、昭和十九年中学部卒、昭和二十三年専門学校経済科卒、三井住友銀行ＯＢでございます。

大澤　大澤です。

原　あと、そちらが現影昭夫さん、昭和十九年に中学部入学で、二十四年中学校卒業、昭和二十六年高等学校卒業、ちょうど旧制から新制に変わる時の経験者でございます。昭和三十年大学の経済学部の卒業でございます。皆さんのお手元にある「昭和十九年四月明治学院中学部入学生徒の戦中メモ」の執筆者でございます。それでは一通りご紹介が終わりましたので、菊地義雄さんの方から十五分ずつ、スピーチをお願いできればと思います。菊地さんは貴重な学徒出陣の経験者でございます。昭和十九年に学徒出陣されたとのことです。では菊地さんの方からよろしくお願いいたします。



菊地　昭和十六年三月明治学院中学部卒業、昭和十九年九月明治学院専門学校経営科卒業、経営科卒業免状は軍隊勤務中に留守宅へ届けられていました。

中学部に入学したとき、入学式のご挨拶をされたのがウィリス・ジー・ホキエ院長事務取扱でした。流暢な日本語で話されたのが印象に残っています。

昭和十四年に彦根高商校長の矢野貫城先生が院長として赴任されました。私が中学部に在学中、矢野先生が一回、経営科在学中（一年半位在学）、やはり一回、チャペルの講壇の上からお叱りになったことがあります。中学部のときは試験で不正行為があって退学処分を受けた者が出たこと、厚生科一年生のとき、二年の佐分某外二名が共産党員であることが発覚し逮捕されたことです。

神社参拝については、団体で学校が引率して神社参拝をした記憶はありません。

御真影は中学部の時、何かの式典の時、チャペルに御真影を飾っていたのを一度見たような気がします。思い違いかも知れません。矢野院長が戦争協力者とは思いません。

厚生科に進んでから勤労奉仕で、今のＪＲの赤羽駅で個人の引越荷のトラックから貨車積作業をしたことを憶えています。

学院の中では、休憩時間になると数人ずつ集まっては「戦争に行くのはいやだなぁ」と話し合ったものです。

軍事教練は査閲のための訓練だったり、厚生科のときは銃剣術ばかり（木銃を使用）。教練は好きではなかったが一応まじめにしたつもりでした。

昭和十八年十二月一日、学徒出陣の一員として、東京湾要塞重砲聯隊の教育隊に入隊した。十二月、一月の二ヶ月間、兵隊の基礎訓練を受けました。場所は神奈川県三浦郡松輪、給与はよかったが、軍隊生活での一番長い日が続きました。はがき、手紙は全部検閲があったので、給与のよいことは母に知らせることも出来ませんでした。朝の点呼など、洗面場の柱にふれて、顔を洗うことなく点呼の列に入るのが精一杯でした。非常呼集で、軍装するのに手間取り、内務班に帰って、出来上がった者順に番号を申告するのにビリの方の番号を言うのが辛かったです。

教育隊が終わって幹部候補生試験があり、甲種に落ちて乙種幹部候補生となり、乙幹ばかりの集合教育を、房総館山近くの見物（ケンモツ）で集合教育を受けました。

昭和十九年に重砲学校に転属となり、給与は一段と悪くなり、朝食を食べ終わってももう一膳欲しいなと思いました。戦況も日に日に悪くなり、家に残した母達は雑炊等で食いつないでいたことは知る由もあ

りませんでした。

中国、台湾、韓国の留学生のことですが、留学生が、中学部のときも、厚生科のときも、韓国の人か台湾の人か中国人かの区別が、余り付き合いがなかったので（韓国人はわかったが）よくわかりませんでした。

学院の構内に都留仙次先生が住まわれて、留学生の面倒をよく見られていたことは何となく知っていました。関東大震災（大正十二年）に朝鮮半島出身の学生を明治学院構内にかくまわれたことは知る由もありませんでした。都留先生はチャペルで、アメリカ人のお話を通訳され、その上手なことに感心して聞いたものでした。

昭和二十年八月十五日、終戦日は、横須賀市馬堀海岸の重砲学校で終戦を迎えました。私は週番下士官で、見習士官の週番将校と学校事務室で玉音放送を聞きました。雑音がひどくて、陛下のお言葉が聞き取れませんでした。その後、学校長が将校を集めて戦争が終わったことを告げられたとのことです。私と一緒に週番をした見習士官の人は十六日に腹を切って自害されました。遺書に「国敗れて何の国体護持ぞ」との文言があったとか。平和な時代がどんなに良いか知らず残念です。

原　後でまとめるとわからなくなってしまうので、この場で何かございますでしょうか？例えば、矢野貫城先生の印象といいますか、何かイメージは？

菊地　矢野先生は真面目な先生だ、これはもう何と言いますかね、謹厳実直で、何も言うことないですわ。

原　おそらく生徒はもう、例えば、礼拝堂の講壇に矢野貫城院長がいて、講話を聞くとかそういうかたち

で、直接触れ合うということはまずほとんどないような…。

菊地　私なんかはおくれもんですから、色々な先生に接触するというのはなかったんですけど。

原　生徒を矢野先生が個人的に名前を覚えていて呼ぶとか、なになに君とか、そういう声を掛けられたことはありますか？

大河原　そういうことはなかったと思うんですよね。矢野先生は一人一人ご存知ないと思う。

原　いや、私は、実は矢野先生の娘さんにお会いして伺ったら、例えば中学部長も最初兼ねていたのですけど、昭和十四年矢野院長就任の時、四月になる前に、生徒の顔写真と名前を一人一人覚えて、声を掛けられるようにしていたっていうことを聞いているものですから、実際そういうふうに声を掛けられた方が生徒さんとしてあったのかと。

大澤　千六百人とか二千人とか、院長先生ではちょっと、余程親しい人でないと。

原　そうですね、矢野先生になってから結局ミッションの援助を断るという理事会決議があって、それで急遽その学校経営のために、財政のために中学部生徒を倍ぐらいに急遽増員して募集しているわけですよ。それでなんとかミッションの援助を受けないで、なんとかいけるようにということで動いているわけです。だからかなりキャンパスは生徒が、中学部生が倍ぐらいに溢れる状態が出てきたのだろうかなと思うのですけれど、大河原先生どうですか、特に昭和十六年ぐらいからですか？

菊地　五十人クラスだったかね？で四つだね、A、B、C、Dまであったし。

大澤　あまり増えた印象はないけどなぁ。何年ごろの話ですか？

原　それは昭和十六年の後ぐらいですかね？

大澤　私は昭和十六年四月にいたけど新入生が増えた記憶はないですね。よくわかりません。

原　記録だと、ミッションの援助を断ったと。

菊地　ミッションの援助を断ったという資料でしたね。それはもうわからないです。

原　他に何か菊地さんに対して聞いておきたいことはありますでしょうか？陪席者の方はいかがですか？

大西　神社参拝について強制されたようなことはなかったですか？

菊地　いや、そういうことではなくて、神社は行きたい人は行くというか、強制的に神社にお参りするというようなことはなかったですね。

原　もう一つ、矢野院長時代に、式典の時は御真影を出していたのでしょうかね？当時の方に聞くと、矢野院長時代にあまり御真影は見かけなかったという方の証言が多いのです。彦根高商の『同窓会報』の生徒の記録・回想録によりますと、矢野院長自身がその彦根高商の校長の時に、庭に御真影を飾る場所があって、そこを生徒が敬礼して挨拶すると、「君、そんなことやったって無駄だからよしなさい」と言われたというエピソードが、彦根高商のその生徒の思い出であるのですね。だから明治学院の院長になっても、御真影を生徒に拝ませることには消極的だったけれど、御真影は大事にしたって、娘さんに伺っているのですよ。空襲で御真影を焼かれてしまうと学校を潰されるというので、空襲があった時に、その度に風呂敷包みに包んで、防空壕に入ったということを娘さんから伺って、大事にしたのはそういうことというか、明治学院が潰されてしまうから、御真影だけは大事にしたということですね。

あと、『心に刻む』で間違っているのは、矢野貫城先生が御真影奉戴等を積極的に推進したみたいなことを書いているのですが、御真影を奉戴したのはホキエ院長事務取扱の時が歴史的事実で、これは完全な

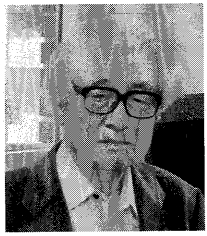
間違いだと思いますね。他にはよろしいですか、菊地さんに対するご質問がありましたら。

菊地　私はとにかく軍国主義の時代に育ったものですから、今でも軍国主義です。

原　この当時は結局、それが当たり前、つまり教育勅語を読んで、軍事教練を受けて国民総一丸になって米英と戦うというのが当たり前で、例えばキリスト者として、明治学院神学部を出て牧師をしている平和主義者の人が、やはり戦争反対的なことを言うと牢屋に入れられてしまった。それで死んだというのを聞いているのです。だから、戦後の人間から見ると、「なんで戦争反対しなかったのだ」とか「なんで平和主義を貫かないのだ」とか簡単に言えるような気がするのですけど、僕だって牢屋に入れられるのはいやですからね。やはりすぐ日和って、体制に従うと思うのですけど。

菊地　だから、富田満理事長など、そのことで随分批判を浴びたようですね。

原　はい、ありがとうございます。それでは次に大河原忠蔵先生の方からお願いいたします。



大河原　レジュメを用意して参りましたので、お手元のそれをご覧になっていただきたいのですが。私は昭和十七年の三月に中学部を卒業いたしました。それから明治学院高校の国語の教師を昭和二十八年から昭和五十四年までいたしました。

私の母方の祖父は磯野信と言いまして、明治二十四年に明治学院を卒業しています。彼は島崎藤村と同期で、藤村がどういう人柄であったかということを、私に親しく教えてくれました。それは今日のテーマではございませんので、今日のことについて申し上げます。

矢野貫城先生の話が出ましたけれども、昭和十九年に東亜科を設立した趣意書［『明治学院九十年史』二二四頁参照］を読みますと、「良き日本人として支那[ママ]人の指導にあたり、以て興亜の大業に貢献する」などとすごいことが書いてありますね。それからアメリカのミッションの援助を断ち切ったとか、そういうようなことも書いてあるわけで、しかも、昭和十九年三月、私が卒業した後になりますけれども、『心に刻む』というのに、これを見ますとそこへ私引用してきましたけれども、結局「我が学院はたたかう。大君の御戦を戦うて邁進する」というようなことを戦争中には書いている。戦後はまた別の見方に立っています。しかし、この矢野さんの指導というのは、中学部の中には、入って来なかったのです。この強力なその指導の警鐘を鳴らすということは全然ないんです。だから矢野先生は置物のように上の方にいて、まあ、立派なお姿を見ていると、我々としてはその程度なのですね。

その当時の中学部で言いますと、軍事教練はやった。習志野あたりまで出かけて行ってやったけれども、みんな面倒くさがったんですね。愛国心に燃えて銃を構えるなんていうのは一人もいないといってもいいぐらいです。戦争ということにはそっぽを向いている友達ばかりでした。

鉄の回収という勤労奉仕で町を歩いたり、宮城前を掃除したり、色々なこともあるにはあったんですけれども、非常に消極的でした。その消極性を叱りつける先生は、中学部の先生にはいないわけです。

関根文之助という先生がおりまして、私のクラス担任になってくれた人です。私たちのクラスは関根文之助先生の指導を一年間受けたんですが、彼は神官でありながら同時にキリスト者であるという、その神官の服を着た写真が『心に刻む』の三十頁に出ているんですが、この写真を見ますと関根文之助はもう神官そのもので、天照大神でやってるんだと、思うかも知れませんけれども、組担任になった時の彼は非常

にてきぱきと事務を処理した有能な組担任であり、私たち一人一人に優しく話しかけてくれた先生だったんです。惟神（かんながら）の道は説きませんでした。だから、どうも一つの公式で明治学院は戦争に協力するために「撃ちてし止まむ」の一辺倒になったなどということは、中学部に関してはありません。

私は中学三年の時に、旧制高校の受験ということを考えました。旧制高校は、東京の一高、二高は仙台、三高は京都、四高は金沢という具合にありました。それで私はたいへん明治学院に申し訳なかったのですけれども、受験指導をしてくれる府立中学へ転校しようと思ったのです。それで組担任の山本彌一郎先生の自宅に相談に行ったところが、彼は「その転校はやめた方がいいね。明治学院のいいところを忘れてはいけないよ。島崎藤村は図書館で自由に本を読んで成長したのだ」ということを言ってくれて、私はその山本先生の揺るがない信念というものに接し、触れて、その場で転校することはやめました。

それから内藤正隆先生という方がいらっしゃったんです。彼は私にとっては大きな存在なんですが、宗教部の顧問教師。いま顧問教師というので、その言い方を使わせていただきますけれども。私は宗教部員だったのです。宗教部というのは当然、明治学院ですからキリスト教の研究をし、部会は礼拝形式でやったわけです。私はある疑問というか問題を持っていたもので、夜この内藤先生のお宅を訪ねたのです。すると内藤先生はたまたま外出中で、奥さんが「ちょっと待ってください」と言って、彼の部屋に通されて、私は待っていたのですが、彼が帰って来た時、私は「人生の目的は何か？生きる意味は？人間が生きる意味は何か？」とこのことを訊いたわけです。すると彼は決して「大君のために戦うんだ、国に命を捧げるのだ」なんてことは勿論言わないです。暫く考えていたけれども、静かに、「大河原君、現在という時ほど不安な時はないね、過去にも未来にも不安はあるが、現在の不安よりは弱いのだ」ということを私に言っ

てくれて、いまだにこれは忘れられないのですね。つまり彼は「人間は何のために生きるか」という問題の根拠を「現在という時間が作り出す得体の知れない不安」の問題で答えたのです。これは哲学的な発想だと思います。その問題として捉えてくれたんです。それで私が行き詰まっていた「人間は何のために生きるかわからない、生きる意味がわからない」という行き詰まりの活路を拓いてくれたわけです。後に内藤先生は山梨英和の学院長になられました。

それから、矢野院長が連れてくる形で漆山清二先生がいたわけです。昭和十六年七月に中学部長になられていますが、漆山先生については、軍国調だというような感じも持たれた方もいるらしいんですけれども、全々違う。我々生徒に対して尽忠報国というような説教はしない。彼は何を言ったかというと「遠くにいる、自分のそばにいない、病める人、病人を祈りをこめて指圧で治す治療をする」とちょっとこれ自体もなかなか不思議な話なんですが、それを教室に来てお話しになる。で、私は旧制の二高へ進みましたが、彼が旧制の二高出身ですから、すぐ、二高に入った時に学院の校内にありました漆山中学部長の家へ行きました。行ったら彼は「ああそうか、仙台には高山樗牛冥想の松というのがあるんだよ。仙台は思索する、物を考えるのにいい静かな町だ」と言ってくれました。軍国調の説教などは一切ないというのが漆山さんなのです。ですから漆山、矢野の両先生に対しては、かなり突っ込んだ人物評価が必要だと思う。

私は、中学の五年の時にドストエフスキーの『罪と罰』を読みました。ゾラの『ナナ』というのも読みました。友達の家に本があって、借りてきて読んだのを忘れません。もちろんクラス・メートです。ですからその友達も読んでいるわけです。それから私の別の友人はイギリスのコナン・ドイルの推理小説をなんと英文で読んでいて、由布保先生という英語の先生が感心して私に「ああ、彼は英文で読んでいたのだ」

と言いました。彼は山登りが大好きで、山に入ると絶対の自分と出会えると、もうかなり少年ですが哲学的です。絶対の自分と出会えると言って、冬の西駒ヶ岳に登ったのです。そして遭難、凍死した。この記事は朝日新聞にも出ました。それではそういうような内向的な少年ばかりかというとそうではない。クラスの中には日劇ダンシング・チームのライン・ダンスをよろこんで見に行っていた人もいた。これも自由を示しています。それで山本彌一郎先生が教室でその生徒に声をかけていました。「おい、ライン・ダンスはどうだ？」と。山本先生はそれを知っていたわけです。

こういう明治学院中学部をどう見るかということですが、レジュメに書きましたのでちょっとご覧ください。「当時の明治学院中学部には、日中戦争のさなか、太平洋戦争の前夜でありながら、自由があったことがわかる。」それで「この自由は、ヘボンが創立した明治学院、島崎藤村が学んだ古い明治学院の伝統から、なにか鳴り物入りではなく、じわりじわりと流れ込んできていたものではなかったか。」それを中学部が受け止めていたのではないか。古いが故に、この中学部の自由は、分析すると色々出てくるんです。したがって、それを私は「古いが故に虚無的な淀みも含んでいたかもしれないが」と。何かしら消極的な面も感じられるが、いま申し上げたような生徒たちだったわけです。「重厚味のある芯の強い自由」だと、私は、いま申し上げますが、体験的に理解できたんです。それで「中学部の生徒は」、ここですね、一番言いたいのは、「軍国少年にならずに済んだ」と、これは実に感謝すべきことだと思うのです。この自由は、視野を広げてみますと、藤村の校歌からも読み取れるわけです。「緑葉は香ひあふれて青年の思ひを伝ふ」という、「思ひ」というのは、「おのがじし道を開かむ」とめいめいが自分の道を開くという思いなのですね、「緑葉の思ひ」は。一つの思想で統一されるという「思ひ」ではないのです。

したがって、私の見方では、戦争への協力を打ち出している、矢野院長の学院運営は、あの時代の文部省向けのものだったんではないかと。明治学院はあれは耶蘇教だとか、あるいはアメリカだとかと言って、もちろん攻撃を受ける。それを矢面に立って防ぎ止めるためのものではなかったか。そうすると、中学部は彼の打った手のカムフラージュによってその自由が守られたと、そういうことですね。その中学部の自由は、大河原そんなこと言うけれども、「ライン・ダンスを見に行けば自由なのかよ」と、「それは不良少年がやったことじゃないか」と、「コナン・ドイルを読んだかも知れないが、それは一種の教養主義じゃないか」とか色々に言う人はいるでしょうが、次に私のその「自由」の理解を体験的に申し上げます。

私は、旧制の二高に入りました。二高は寮生活なんです。一年生は全寮制度で寮に入ったところ、その旧制二高は仙台ですから、東北六県、それから東京や関西までも含めて県立中学のずば抜けてできるエリートが入ってくるんです。そのエリートの特徴をみると、「天皇を現人神」と見るというような見方、その当時の一つの大きな見方ですが、それに疑いを持っていないんです、優等生でありながら。ありながらっていうのはおかしい、このありながらっていうのは明治学院が言わせるんです。二年生は、一年生に風呂場で禊をやらせるんです。それはどうやるかというと、裸になりまして、手を合わせて上下にふり「アマテラスオオミカミ！…」これをやれって言うのですよ、二年生は。そうするとその優等生たちはそれを素直にやるんですよ。私はそれを拒否したんです。私だけではないけれども。そして二年生と衝突しました。

そこで私の中の明治学院が動くわけですが、私は同じ寮にいた三年生の永井陽之助、これは後に政治学者として著名になった人で、東京工大の教授になっています。この人が三年生にいたものだから、私は廊

下で彼を呼び止めて「人生の目的は何ですか？」と聞いたのです。彼はしばらく考えて、重々しい声で「よき日本人になることだ」とこう言うのです。私は納得できませんでした。

寮では、佐藤通次の『皇道哲学』という本が読まれている。私は阿部次郎の『人格主義』を読みたくて机の上に出しておいたら、二年生に怒られました。

私は、寮の集会の時に「ここの寮には自由がない」と批判したんです。そうしたら「大河原来い」と言って二年生から畳の部屋に連れて行かれて、日本刀を突き付けられて、その日本刀をぐさりと畳に突き刺して「これで死ね」と言うのです。「私はいやだ、死ねない」と言うと、今度は別の部屋に連れて行かれて、二年生、一年生も駆り立てられて、私は鉄拳制裁を受けたんです。猛烈に殴られました。そして「大河原、お前は退寮だ」と言われ、退寮処分になったんです。退寮即退校というのが二高の不文律だったんですが、教授会は「それだけの理由で一人の生徒を退学させることはできない」と言って私を守ってくれました。私は学徒兵として出陣し、戦争から帰ってきて、ちゃんと二高を出ました。私の中に自由があったということ、これは明治学院によって育てられた自由であると思っております。私の中の明治学院が戦ってくれたのです。

さらに、広津信二郎先生のある日の授業のことを是非申し上げたい。広津信二郎先生は、私がこの前、記念館に来て原さんとお話しした時に、名簿を見せていただいてちゃんと確認しているのですが、広津信二郎という先生、この人は、皆さんあまり記憶にないと思うんですけれど、漢文を担当していたんです。漢文は、ご存知だと思いますが、送り仮名を付けるのが文語体です。そこで文語文法の説明も彼はやるのです。ある日の授業で広津先生は、教育勅語には文法上問題になる箇所があると言い出したんです。これ

は驚くべきことです。何故かというと、当時、生徒の前で教育勅語を批判するのは怖くてできません。それを言い出した。それはどういうことかと言うと「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ジ、以テ天壌無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ」ここだというのです。お手元にお渡ししたレジュメの一番最後に、教育勅語の全文と島崎藤村の写真を付けておきました。その教育勅語のところに「天壌無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ」という有名な箇所がある。そこの前が「一旦緩急アレバ」、で、この「アレバ」が問題である。「アレバ」というのは「必ず戦争が起きる」という確定の論理になると言うんですね。明治二十三年に教育勅語が出ているが、その時に、将来たくさんの戦争を日本はしましたが、太平洋戦争が最後にあるわけですが、将来戦争が必ず起きるということを断定してかかることができるかどうか。「もし戦争が起きたならば」と言うんだったら、起きたならば「義勇公ニ奉ジ、天壌無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ」、これは「天壌無窮、天とともに、地とともに、窮まりのない天皇陛下のご一家のご繁栄のために生きろ」と言うのです。生きろと言うよりも死ねと言うことですね、戦死ですね。そういう言葉の所に付いている「一旦緩急アレバ」なんですが、将来戦争が必ず起きると決めてかかれるはずがないと、広津先生は言うんですね。もし戦争が起きたならばという意味なら、「アラバ」と仮定条件にすべきだ。「アレバ」と「アラバ」はしっかり文法的に区別すべきだ。これが教育勅語にできていないというのはどういうことだと。こういうことをおっしゃる先生がいたというのは、僕はやはり明治学院の中学部が自由だったからだと思う。これは大事な自由です。これは当時としては、府立の中学だったら言えないです。教育勅語の文章を書いた元田永孚という、これは「ながざね」と読むんだそうです、下に出しておきましたが、これは現在の小学館の『日本国語大辞典』にもきちんとその人物が出ているぐらい有名人なんですね。そういうことを広津先生はすごく研究して知っ

ていた。この人は小学館の『日本国語大辞典』によると、熊本県出身と書いてありますが、地方出身の人でその人の方言が「レ」と「ラ」の区別が曖昧だったと。僕は熊本の方言を知りませんし、熊本だっていろんな地方がある、ここは追求してはおりませんけれども、こういうことも広津先生はおっしゃっているのです。教育勅語といえば拝読すべきものであって、さっきも言いましたけれども、中学生にこういうことを言うべきものではないわけです。恐らく広津先生は明治学院中学部を信じていたんだと思うんです。この話、実はあまり皆さんご存知ない。私は今まで聞いてみて、教育勅語のこの「アラバ」と「アレバ」を知っている人は一人もいませんでした。私はこの話を戦争中に聞くことができたことを誇りに思っています。これは府立の中学では聞けない、明治学院中学部だからこそ聞けたと。この広津先生は後に下関に移り、梅光女学院の院長になられています。

ジョン・スミス先生。彼は宣教師でした。夏休みに、逗子の海岸に泊りがけで修養会に行った時、ジョン・スミス先生もついてきた。スミス先生は、夜、海岸に引上げられた大きな船、漁船のそばに、我々十人ぐらいの生徒が腰をおろすと、先生は立って話しました。彼の話で私が憶えているのは、「電灯も灯らないようなアメリカの田舎で私は育った」と、「そしてイエスと出会い、神と出会った」という話を静かにされるんですね。そして彼の姿の後ろには夜空の月があった、波の音が聞こえていた。これが中学部の宗教部の生きた姿だったのですね。そして我々一人一人と非常に親しくしてくれて、スミス先生と親しくなった私たちは、この明治学院の校庭の宣教師館の三階に、彼は屋根裏部屋に自分の書斎を作っていたんですが、そこへ私たちを連れて行って、また色々話を聞かせてくれました。宣教師と私たちの人間的ふれあいというのは、かなり深いものがあったと私は思います。

最後に申し上げたいのは、島崎藤村を見かけたということです。昭和十五年六月二十六日、井深梶之助先生、名誉総理の葬儀がチャペルで行われましたが、その時、島崎藤村が来ました。藤村は六十八歳で、死ぬ三年前の藤村でした。私は中学部の四年でした。放課後だったので生徒はあまりいなかったが、「藤村が来たぞぉーっ」と誰かが廊下で叫んだのです。私たちは走って校舎の外へ飛び出して、藤村のすぐそばに行った。藤村は校歌碑の近くに立っていた。後で聞いたのですが、校歌碑の面を撫でながら「大分錆びましたね」と言っていたそうです。そばに寄ってじっと顔を見ると、高貴な顔なのです。ノーブルな顔というんですか、非常に高貴な顔で静かでした。それは大変大きな刺激になりました。十五歳の私はそこから無限のものをもらったのでした。だからこれは明治学院でなければ出来ないことだし、明治学院中学部のその時の非常に貴重な我々の体験だったと思います。私たちはすぐ校門に突っ走って、車の中の藤村を校門でもう一度見ました。

これが私の、昭和十七年卒業の、私の明治学院でした。

原　ありがとうございました。

この写真は、井深梶之助先生の葬儀の時に、明治二十四年の六月卒業の時に植えたチャペルの北側の記念樹のそばで撮った写真です。卒業記念の楠の木が大きく育ったのを見て、撫でて、自分の息子にも楠雄という、長男に名前をつけたという由来のある樹でございます。今は枯れてしまって一部だけが歴史資料館の二階に飾ってございます。ありがとうございます。

山本彌一郎先生というのは、英語の先生で、明治学院神学部を出て、アメリカに留学して戻って来て、ただ教員室ではいつも漢籍の『論語』を読んでいた。それで黒板に英語で書く時は、普通は横に書くのに

縦に書いたと。風変わりな先生がいたという風に私も聞いております。縦に英語を書くというのは特技なのですかね。

南　チャペルといえば『明治学院用讃美歌』というのがあって、朝、その『明治学院用讃美歌』で歌う。ですから「母ぎみにまさるともや世にある」あればかり歌わせるんですから。

原　当時の中学部の生徒手帳を見ますと教育勅語というのも印刷されてありますね。こんな小さい生徒手帳が残っております。教育勅語というのをいかに戦前は大事にしていたかと……。

現影　戦後の話ですけれども、昭和二十五年の高校卒業生が私と同期なんですけれども、一時東宝に入りまして、日劇のダンシング・チームの演出をやっている人でした。それで日劇のダンシング・チームは解散になりましたね。松竹のダンシング・チームも解散になって、今年のたしか十月の末に渋谷公会堂でもってこけら落としがありましたね。それで、やめたダンシング・チームの連中が宝塚のOBと、それと松竹のダンシング・チームと、それから日劇のダンシング・チームと、OBたちが集まってライン・ダンスを踊ったんですよ。それの振り付けを全部やったのが、その明治学院高校を昭和二十四年に出た日高仁君。それで彼が、全部演出している。その他に、韓国の古典芸術、それと日本の古典の芸術を合体させた演出、これを全部、韓国と日本の文化交流をやっています。それであの「マツケンサンバ」というのが一時盛んになりましたが、それでダンシング・チームは「まだ六十、七十になっても足が上がりますよ」と、この間の十月末にやったそうです。

それからもう一つ。中学部のお話してましたけれど、私は中学部に昭和十九年に入りまして、それで気が付いたのは、途中でもって六・三・三制になりましたから、新制高校二年に移校生で入ったわけですね。

その時に新制中学校それから新制高校、これらにも全て学籍簿がなかったのです。学籍簿が出来たのが高校二年の時でして。それでは昭和十九年に入って、昭和二十三年の六・三・三制に移行するまでの四年間何だったんだと、確かに居たんだよなと、だけどどこ探しても学籍簿はないんだと。ということで、生きているうちに、四年間やったよという証明書を、ぜひ久世学院長先生に認めて欲しいというので、修了証書をいただきました。だからおっしゃるように、中学部の昭和十八年の卒業生までは名簿にあるのです。途中で直していただきましたけれど、それまでは昭和十八年の卒業生でもって、昭和十九年はどこかにいってしまっているということですよ。ですから声を大にして初めて、四年間居ましたよ、ということを認めていただきました。それで修了証書もいただきました。

原　はい、ありがとうございます。ええ、他にございませんでしたら……。

南　ちょっと言いたいのですけれどね、一番最初にその矢野院長が就任なさった時に、東亜科というのが設立していますね。これが昭和十九年に専門学校になりましたよね。結局英文科が廃止になって、それで東亜科に中国語を専攻する方を大陸分科といって、英文科が東亜科南方分科と、つまり南の方の分科と、こうなって東亜科がいっしょになったのです。それで戦後また分離しましたね。一時、昭和十九年から二十年ですか、昭和二十年の前半はおかしな風になりましたね。

原　ですから、敗戦になってすぐこの東亜科を廃止して、伝統ある英文科に戻そうということで、東亜科を文科と改称、南方分科を英文科、大陸分科を華文科ということで分かれたわけです。それでは、順番から行くと次、南さんなのですが、よろしいですか？

南　レジュメに従って説明させていただきます。私はちょうど昭和十九年に、所謂旧制の専門学校が理科

系として転換されたとき、青山学院と関東学院が工業専門学校になったものだから、青山学院の文学部と高等商業部、関東学院の高等商業部が、明治学院に移籍したわけですね。私は青山学院の文学部だったものだから、英文科二年に編入しまして、その昭和十九年の四月から昭和二十一年の三月まで明治学院にお世話になったんです。同じ同期でも繰上卒業とそうでないのとに分かれるんです。これはあとで、繰上卒業のときに説明します。明治学院には二年間在学したことになります。したがって、矢野院長にはわずか二年間しかお会いしませんので、そのことをここへ書かせてもらったのですが、ほんの一部分に過ぎません。いま大河原先生より中学部のことをお聞きしましたが、勉強になりました。だけど僕は二年間だけで、しかも専門学校だけなものだから、不十分なところもあるかも知れませんがご了承ください。

戦時中に色々な学校が理科系になったり、他の学校と合併になったりしましたけれども、明治学院だけは、文科系に留まって、しかも青山学院と関東学院を統合することが出来たというのは、これは矢野院長の文部省における力が大きかったということが言えると思います。

矢野先生は朝礼の時はいつも学生と宮城遥拝をしました。宮城といいますと、若い人は野球場と言うのですね。だから説明しなくてはわからないのですよ。それで文字で宮城（きゅうじょう）と書くと、宮城県の宮城（みやぎ）と読むのです。昔の宮城は通用しませんので、いまの皇居だと、こう言わないと通用しないのですが、これは毎回やりました、宮城遥拝。今から考えたら天皇崇拝に巻き込まれたと思われるでしょうが、当時の時代背景を考えると、矢野先生にとっては止むを得なかったのかも知れません。矢野先生は特に礼拝を重んじましてね、朝礼が終わると全員チャペルへ入って礼拝を行いました。礼拝を終わって出る時には、学生課の

先生より出席カードが渡され、私たちは名前と学科名を書いて出しました。半強制的なものでした。全員、毎日、授業の始まる前に必ず礼拝に出席しました。

それから戦時中、私たちが勤労動員で三菱造船へ行っていた時ですけど、戦争中、陸軍が成果を上げたとき、矢野先生は学生を連れて、陸軍省にお礼に行ったことがありました。これは矢野先生から直接聞きました。兵隊のご苦労に感謝をする意味で行ったのだと思います。

それから『明治学院百年史』には、「教育勅語」拝読、「明治神宮」、「靖国神社」参拝とありますけれども、私たちの在学中はそうした学校行事はなかった。勤労動員等でそうした余裕がなかったのかも知れない。

矢野先生のもう一つの功績は、昭和二十一年の三月（朝日新聞・昭和二十一年三月七日付）、アメリカの教育使節団がいらっしゃった時に、矢野先生は当時の文部大臣安倍能成とともに、日本を代表する教育顧問として日本の戦後の教育に尽力されたということがございます。

それから余談になりますが、私が目黒区立第四中学校に勤務している時に、矢野先生宅が同校の通学区域で、先生の孫が僕の学校へやって来ましてね、私は孫を担任して教えました。だから矢野先生のご家族ともよく連絡などありまして、ご家族のことをよく存じております。そういう関係がありました。

それから学院の礼拝ですけれども、さきほど言いましたが、毎日朝礼が終わってから行われました。戦後は、こうした礼拝はなくなった。週何回かのアセンブリー・アワーだけになった。

それから御真影と神社参拝ですけども、私たちは戦争末期でみんな勤労動員に行っていますから、そういう経験はありませんでしたね。

それから軍事教練、これは、この『明治学院九十年史』の三五四頁と三五五頁を見ますと、教練は週二時間、体練週二時間となっているのです。ところが明治学院は体練という時間をやらないで、その教練二時間と体練二時間を入れ四時間を教練の時間に当てていたんです。だから普通の正規の時間よりも二時間余計に教練をやっているのです。それで私はいつも思うのですが、教練のとき、配属将校の陸軍大佐は、もう毎時間ですね、「君たち英語を捨てろ、キリスト教を捨てろ。そんな教育を受けて戦争に勝てるか」と教練の時間に言わない時はなかったですね、それが未だに頭に残っているのです。その人は戦後にはもう仕事がなくてね、渋谷で闇商をしていたそうですけど、そういうこともありました。

それから、千葉の習志野の部隊に行きまして、私たちは兵舎に宿泊しました。そこで、練兵場で一般兵士と同等の猛訓練ですよ。猛訓練を受けました。足代さんが練兵場で腕時計をなくしたもんだから、教練中止となりました。それから広い練兵場にみんな横に並んで探したわけです。猛訓練しなくてもいいものだから随分時間をかけてね。一生懸命横になって探したがとうとう見つかりませんでしたね。そういうことがありました。

それから勤労動員ですが、これは学徒出陣とは別ですね。私たち昭和十九年に編入した当時、海軍大学校の図書館の書籍をトラックに積んで郊外に運ぶのです。そういう仕事を手伝いました。それで、図書館に入ってびっくりしました。洋書が多いのです。当時敵国語とかなんとか言って英語は軽視されていたが、海軍大学の図書館に入って驚きました。ほとんど英語です。その作業に対し学院に感謝状が贈られたことがございました。

それから戦災については、私の在学中はありませんでした。

学徒動員ですが、これは昭和十九年の六月からです。昭和十九年は、四月、五月と授業がありまして、六月から終戦までもう授業がないのです。三菱重工業横浜造船所へ勤務しました。みんな寮へ入ったのです。横浜の西区の軽井沢という山の中です。だからもう雨降りのときは大変でした。その宿舎と食堂が離れているのです。雨降りのときは泥んこで、もう粘土みたいです。そこをなんとか歩いて食堂へ行きました。しかし食事が悪くてね、寮が新しくできたばかりでしたが、その反動でふすま等を壊して注意を受けたことがあった。まあ食事が悪かったかも知りませんが。寮を管理するのは舎監で、朝礼する時にみんな並んで舎監に礼ですよ。そういうことが一時ありました。それで朝礼の時に軍人勅諭を言わされるのですよ、「一、軍人は忠節を尽くす…」をずっと毎回朝礼で、その三菱造船に行って、朝礼をする時に軍人勅諭は必須ですよ。さっき言いましたが、学生たちから「先生中心の朝礼をしろ」という意見があり、その後、先生中心の朝礼に変わり、軍人勅諭は言わなくなった。しかし学生があまり来ない、勤労動員をサボってしまって、それで竹中先生はその時は生徒課長だったのです。竹中先生は困ってしまってね、このままだったら明治学院は潰されると、廃止されてしまうと、眼鏡外して泣きながら生徒に訴えたのですよ。それが生徒に分かったのでしょうか、皆さんが出勤するようになりましたけど、一時は本当に生徒課長が困った時がございました。

それから寮生活では忘れてはいけないのは、ドイツ語の加藤七郎先生が、自分の家で作ったさつまいもを蒸かして、寮の皆に持って来てくれまして、部屋ごとに分けてくれました。僕たちはいただいたことは忘れられないですね、うれしくてね、食糧難でしたから。そういうことがございました。それからその造船所のドックには南方で傷のついた戦艦が入っているんです。そういう戦艦の修理をしたり、あるいは新

しい戦艦を造る手伝いをしました。私は電気艤装という仕事だったのですよ。その戦艦に入って電線をずっと巡らす、留めていくのです。電線を戦艦の中に取り付けるのです。そういう仕事をしました。その船の下の底で取り付ける時大変でしたよ、戦艦内の作業場では空気が悪いので、取り付けて上へ上がって行くと気分が悪くなって大変な苦痛でした。それからその現場で南方なんかで捕虜になったアメリカ兵が働いておりましてね。竹中先生からきつく言われました「英語を喋っちゃいけない」と「特に英文科の学生は禁止だ」と、こう言われましたけどちょいちょい話しましたよ。現場に出たら誰も監視人はいないでしょ、時々喋ったりしたことがありました。昼休み時間になると米機がやって来るんですよ、「空襲警報！」って言うのですよ、昼休み時間。だけどあそこでは米兵も働いていますからね、僕のいる間は被害がありませんでした。それから阿部志郎さんも一緒だったのですけど、あの人はよく腕章つけて工場を回って来ましたよ、異常がないかどうか見張りなんかしていたのでしょう。

それからその次は勤労動員のことですが、すみません、お手元のプリントの付記欄に「学徒動員中、月一回の給料日には学院に登校し、礼拝が行われた。奨励は矢野院長であった。終了後、私たちは当事の生徒課長、竹中先生から給料を頂いた」と、「当事」の字が間違っています。「時」という字です。「当時」に訂正してください。

それから繰上卒業ですが、これは文科系の学生の徴兵猶予が停止になりましたものですから、勤労動員の時からみんな入隊するんです。軍隊に行ったわけです。そこで繰上卒業というのは、昭和二十年一月以降に入隊した者は、昭和二十年九月二十日付で繰上卒業になったわけです。ところが昭和十九年十二月以前に兵隊に行った者は、繰上卒業になりませんで、そこで線引きしたわけですね。昭和十九年十二月以前

に入隊した者は、昭和二十年十月から昭和二十一年三月まで臨時措置学科課程による授業を受けて、昭和二十一年三月三十一日付で卒業したということです。

それから、戦没学生慰霊祭というのは、在学中に僕は聞いたことはないです。僕たちは知りませんでした。

次に中国・台湾・韓国からの留学生ですが、私たちの英文科の中では台湾人が一人居りました。だけど何ら私たちと変わりはありませんでしたね。私自身が民族的な意識を感じたことはありません。彼は戦後、台湾に帰りまして、台湾で教師になりまして、県立国民中学校長として活躍しました。戦後、日本にやって来まして、僕ら東京で歓迎会をやったことがありましたが、まあ特別な扱いはありませんでした。

それから外国人宣教師、これは全員帰国しまして不在でした。

昭和二十年八月十五日の玉音放送ですが、これは私がいた部隊、和歌山第二十四部隊で聞きました。その玉音放送がある前の日に、アメリカの飛行機が飛ぶのです。夜中に、上空からビラをまくのです。そのビラを見ますと「日本が降伏したのだ」、「降伏したんだからもう戦いやめろ」という意味のビラがいっぱい落とされました。それで十五日の放送を聞きまして、「ああ本当だった」ということが判明したわけです。

次に戦後の学院生活ですが、私は昭和二十年の十月から授業を受けたわけです。ところが食糧事情が悪くて、学校へ来ると臨時休校、それが一日や二日じゃないんです、一週間、臨時休校と。それで学校へ来るでしょ、学校へ来たらまたまた一週間休校、もう連続の休校でしたね、もう授業になりません。電車も超満員で大変でした。私は池袋から通いましたが、時刻も予定より遅れることが多かった、だから遅刻す

る時が多かったです。

三年生はほとんどが兵隊から帰った学生ばかりですよ。だから軍服姿の学生が多かったです。同期生はほとんど繰上卒業しており、十月から授業を受ける人数も各学科とも少なく、時間割も共通で、その中から必修科目と選択科目を選べばよいことになっておりました。それで繰上卒業した人でも勤労動員で全然勉強しておりませんから、学院当局は「補修科」を新設し、繰上卒業で勉強したい者は「補修科」へ入ることを認めまして、三年生と同じ授業を受けられる措置をとってくれた。

食糧なんかがもう大変でしたよね、私はまあ山形県出身の家庭に下宿したものですから、米は充分、不自由なかったんですが、弁当が作れないんですよ。それで授業を受けて、昼食はあそこの高輪警察か、高輪消防署か、付近に食堂があったように思うんですよ。あそこですいとんを食べました。すいとんと言っても若い人にはわかりませんでしょう。すいとんや雑炊も、並んで、食べる順番が来るまで待つのです。これは大変ですよ。また当時、猿町といったが、いま高輪台と言うのですか？頌栄女学校がありますね、頌栄女学校あたりに芋羊かんを売っている店があったんですよ。そこへ昼休み時間によく行きました。雑炊とかすいとんとか芋羊かんで昼食を凌いだことがあります。

それから、新制中学、新制高校、新制大学についてレジュメに書きましたが、これは明治学院に関係したことではなく、一般的な公立とかその他の学校と思いますのでこれは削除させていただきます。

原　南さんは一般の区立中学の先生をなさったご経験を書かれているということで、これは一応記録ということでよろしゅうございますか？

南　今までまとめておきましたことを書いて置きました。「戦時中、多くの文系専門学校が工業専門学校

に転換されたり、他校と統合された学校が多いですね。全国で私立は二十一校あります。国立を入れるともっと増えるでしょう。当時多くの文科系の学校が工業専門学校に転換され、あるいは他の学校とも統合しております。ところが明治学院だけが文科系に留まっている。島崎藤村以来のこの伝統、永い伝統を維持することが出来たのは矢野院長の力に依るところが多いと思います。

原　はい、ありがとうございます。今の南さんへのご質問なにかございますか？

いま伺いましたように、南さんと阿部志郎先生と繁尾久先生は同期ですね。

南　阿部さんも、繁尾さんも、繰上卒業で…。

原　皆さん青山学院から来られたわけで？

南　そうですね。

原　明治学院専門学校統合でということですね。それで三菱造船所というのは、たしか桜木町の駅のすぐそばだったのですね。ＹＭＣＡ食堂の支配人をやっていた中冨さんも三菱造船所で食糧係をやっていたと。よくリヤカーにあさりを積んで運んだと、食糧係というので。そのあさりを南さんは食べたということですね。

南　そうですね。

原　何か南さんに対してご質問がございますでしょうか？

南　兵隊から帰って来て初めて学院に登校して、竹中先生に挙手の礼をした時、「そうした礼はやめなさい！」と言われ、それで挙手の敬礼をやめ、おじぎをする礼に改めました。

原　あと、宮城遥拝ですか？あれは正門脇のテニスコートのところに皆が朝礼で集まって、教育勅語をそ

こで聞いたりしたわけですね？

南　テニスコートに集まって朝礼しました。先生方は通路で生徒たちの前に並んでいました。

原　だからあそこで揃って、宮城というとこの方向だと思うんですが、こっちに向かって敬礼するわけですね。

南　最敬礼するわけです。

原　はい、ありがとうございます。

大河原　それから、神社参拝というのも私の学年ではなかったです。それから、教育勅語を読んで聞かせるとか、御真影を拝ませるということはなかったのですよ。ところがあるようにちらっちらっと書かれるとね。だけどこれははっきりと突き止める必要があるだろうと思います。あったと思うのですよ、その天皇と皇后の写真は、だけど拝ませることはしなかったんじゃないかですか。

大西　どこにあったのですか？

原　いまチャペルの南側に鉄ドアがあって、あそこがその奉戴所だという風に聞いているのですが。

大澤　らしいね、らしい。記憶は定かではないがあったような気がする。だけど遥拝したりなんかした記憶はありません。

現影　私等も、あそこは御真影奉戴所ですよということを上級生に教えられて、ああそうですかというだけの話で、頭を下げるとか敬意を表するとかいうことはやったことがないです。

大澤　原さん、これはお人によって多少印象が違いますよ、どれが正しいかわからない。

原　どうもＯＢの戦前の方、皆さんに聞くと御真影は見たことない。「御真影を見ましたか」と、「いや見

たことない」と言う人が圧倒的に多いんです。

大澤　だけど遥拝した方がいらっしゃるから間違いない。

菊地　遥拝はしないけれど写真は見たと思うなあ、チャペルの奥の方に。

大澤　時によって違うからわからないですよ、学年によって違うかも知れない。

南　年度によってもね。

大澤　私はあなたの二年後だけど、わからないです。その頃学院に居ましたけどね。

菊地　それは御真影を頂いてすぐじゃないですかね？私が見たのは。

大澤　だけど昭和十四年ころにホキエ先生がもらってきたことの他は何にもわからないです。

現影　チャペルの脇のところにあったんですよ。

原　ホキエ院長事務取扱の頃に文部省から頂いた。申請して頂いたわけですよ。

大澤　礼拝の記憶が強くて、そっちの記憶が曖昧になって。あったのではないかと言われればそうかなということ。礼拝の記憶の方が強いですよ。

現影　だから射撃部とか、ああいう何て言うのか軍隊の訓練中の、軍にいた人はわからないでしょ、自分たちで勝手にやったかも知れないし。だけど一般の学院生はほとんど、強制もされてないし。ただある場所だけは知っていたですね。

原　その辺は矢野院長の人柄というか方針だったのではないかなという気もいたしますけれど。文部省に対しては別だけれども、内々では、自分自身もあまり御真影というものを拝んでもしようがないということを知っているし、とにかく矢野先生自体は、植村正久先生の富士見町教会に通って、富士見町教会の何

十年と長老をやられたような熱心なクリスチャンだったわけですから、あまりそれを拝むことに、どう考えても熱心になるわけはないと思うんです。

菊地　そうすると結局、なんか強制的に御真影を戴かないと、あれしなかったんで昭和十四年にこの…。

大澤　十年かその前かちょっとわかりません。十四年ですか、十三年ですか？

原　奉戴ですか？奉戴は、昭和十三年ですね。

大澤　昭和十三年だと私は中学に入ってない。

菊地　僕は昭和十一年に入ってる。

原　そうすると、礼拝堂の脇にみんな一列に…。

菊地　そんなことはしないですよ。

原　高商部の前に並んで、黒塗りの車に乗った御真影が入ってきてそれを…。

菊地　記憶ないんですよ。

原　そういう写真が残っているものですから。

菊地　あ、そう。

原　はい、皆でこの御真影を迎える、行列して。これはきっと中学部生徒ではなく、高等学部や高等商業部の学生達が整列していたのですね。

菊地　それでは、それをやったのですね、きっと、御真影を。

現影　それはあるいは文部省に報告するためにはそういった証拠がないとまずいので、それを写したんじゃないんですか？

菊地　わかりませんね。

南　矢野院長の時、朝礼の時ですけれども…。

菊地　それ記憶ないんだけれど、宮城遥拝なんかしたこと憶えないんだけれどね。

南　ああ、そうですか、僕は昭和十九年だから。

大澤　年次ご一緒でしょ？

南　昭和十九年四月に明治学院に編入したとき、宮城遥拝後、加藤七郎先生が大声で明治天皇御製を拝読され、私たちは拝聴した憶えがあるのですが、私の勘違いかどうか分りませんが、あったような気がするんです。加藤先生は生徒課に所属しておりまして、それを聞いたのは憶えがあるけれど、僕の勘違いかどうかわかりません。ちょっと確認しないとわかりませんけれども、朝礼の時にあったような気がするんですよ、いかがですか？

現影　上のクラスの方はどうか知らないかと思うんですが、私は十九年に入ったのですが、この所謂宮城遥拝かどうかというのは、神社参拝とか、色々と同期生に、私一人の考えではいけないので、何人かに聞いたんですよ。聞きましたけれどもみんな記憶ないですね。「それはありません」と中にははっきりした人もいましたけれどね。「そういったことはありません」と言う方がほとんど大部分ですね。全部集計したとしてもほとんど、別に見ましたとか、行きましたとか、下げましたとか、そういったものは全部もうおっしゃったことはないですね。

菊地　そんなのはないですよね。普通に生活をしとって宮城の前へ行ったら、電車の中からこうやってお辞儀する、明治神宮の前で。宮城の馬場先門の方へ行くのも。

南　靖国神社もそうでしたね。

菊地　市電に乗っていたらお辞儀しないと怒られたんだから。お辞儀しないとおかしいから。皆やりましたね。一斉に立って。

南　靖国神社の前を通過して「通行」と言うと、皆がこうやりましたね。

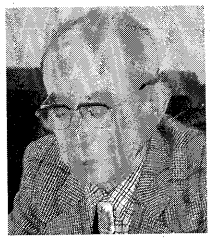
大澤　それは学院と関わりがないでしょうね。

現影　そういう車掌がいたのですよ。

南　皆そうですよ、皆。

菊地　そういうことだったですよね。強制されたわけではなかったのですよ、だから座ったままの人もいるしね。

原　それでは、大澤さん、お願いいたします。



大澤　大澤哲夫でございます。私は昭和十四年四月明治学院中学部に入学、昭和十九年の卒業です。学院高校教諭の神田寿夫、都留仙次先生の子息の都留久夫、鳥居忠五郎氏子息の鳥居聡之、同窓会台湾支部長の蔡玉柱などの皆さんとは中学部の同級生です。

専門学校は昭和二十三年経済科の卒業です。今日ご欠席の中富顕隆、学院社会学部の大島貞夫教授、ＮＨＫから議員になられた故木島則夫さんの皆さんとは科は違いましたが同級生です。当時は東亜科（中国語）、社会科、経営科、経済科などがありましたが、私は入学した経営科が社会科に変わったので経済科に転科しました。専門学校入学後、昭

和十九年末に徴兵検査、昭和二十年五月に水戸三十七部隊に現役入隊、鹿島灘海岸で本土決戦に備えて塹壕掘りをして終戦を迎え、八月末に復員して九月末に復学致しました。この昭和十九―二十年には、私は腸チフスに罹り長期休学、更に入隊と重なり殆んど通学出来ずに過ごしました。そんな事情で昭和十九年度は留年、改めて昭和二十年から経済科に復学し、昭和二十三年に卒業致しました。当時は食糧事情も最悪で皆、食べるのに精一杯、しかも、土曜日は休み、これは、他校の事情は知りませんが、当時の生活状況を考えての措置と思われます。引き続き世の中は戦後の混乱が続いており、余り勉強が出来る環境ではありませんでした。

私は明治学院に学び、それを誇りに思ってはいますが、クリスチャンではありません。また、仏教でも、神道でもありません。明治学院で「神を畏れる」という事は学びましたが、特に宗教には帰依してはおりません。

さて、今回の討議事項の、矢野院長、戦中の礼拝、御真影、神社参拝、軍事教練、戦災、勤労動員、繰上卒業、戦没学生慰霊祭、中国・台湾・韓国からの留学生、外国人宣教師、終戦玉音放送、戦後の学院生活、食糧難、食糧事情、新学制に関するご質問について、体験した事などを記憶を辿りながらお話ししたいと思います。

先ず、私が中学部に入学した昭和十四年当時の院長は、事務取扱の肩書きのウィリス・ジー・ホキエと言う先生で、外国人と言う事で驚き、また、「明治学院だなぁ」と言うのが率直な感じで、日本語も上手で、毎朝の礼拝も流暢な日本語でした。

中学部は、都留仙次先生が部長をやっておられ、台湾・朝鮮半島からの留学生を親切に可愛いがり、し

ばしばお茶や食事会で慰めた事は、同級生の台湾の蔡君から感謝を込めて聞いております。

矢野貫城院長先生は、昭和十四―十五年頃、彦根高商の校長から明治学院においでになり院長になられました。後年、矢野先生のクリスチャンとして許されない戦争協力、その行動が批判されていますが、深い事情は知らない私ども学生としては、温顔溢れる敬虔なクリスチャンとしての面のみ拝見し、その記憶が残っています。ことに、何時、どんな時にお聞きしたかはっきりとした記憶はないのですが、「明治学院は職業軍人をつくらない」と言われた事は長く私の脳裏に刻まれています。平和、博愛の精神の方ではなかったのでしょうか。日本中が軍国主義の大波にさらされた時に、矢野院長が学院を守ったことは紛れないもない事実だと私は思っております。従三位勲二等の位階は勿論、配属将校より数段上位にあり、配属将校と言えども矢野先生の意向は無視出来なかったと思います。一学生で深い事は分りませんが、当時は全て軍の命令通りに動かなければいけなかった戦時体制の教育現場、その中にあってキリスト教、敢えて言えば当時の敵国の宗教です。それを守り、教え、その火を消さず終戦まで守りきった事はやはり、矢野先生のお力あっての事と、今でも私は思っています。あの戦時下にあって、中学五年間通して毎日の礼拝、讃美歌、非国民と言われかねない状況下で、後年振り返っても良く出来たと思います。矢野院長とは直接お話しした事はありません。お教え戴いたのはチャペルだけですが、しかし、当時の在校生の大半の方々はそう思っているのではないでしょうか。

私が昭和二十三年、当時の帝国銀行（現三井住友銀行）に就職が決まった時に校庭でお目にかかりその事をご報告した時に「よくお入りになられた、おめでとう」とお褒めを戴いたのが唯一の対面対語の経験です。チャペルでの礼拝、訓示の温情溢れるそのお姿は忘れる事が出来ないのです。当時、私は学生です

から、理事長や学校役職者の方々との間にどんな事があったかは知りません。重ねて申し上げますが、当時の学生の大半の方々は、矢野院長先生に絶大な信頼を抱いていたと思っています。

後年、矢野院長のクリスチャンとしての戦争責任を問うという事は、時代の流れで仕方がないのかも知れません。しかし、当時、学院で過ごした我々が、官立の高等商業の校長から来て学院を支配して軍に協力した等と思うものは、多分、明治学院の学生の中にはいなかったと思います。この戦争責任の事は、後の人が戦前の戦争責任を問うという事を言っているだけであって、当時のものと今のものの考えの違いは埋まりませんから、敢えて埋めようと思いません。私の思いだけを申し上げます。

次に学院の礼拝、少なくとも中学部在学中は、あのチャペルで毎朝礼拝があり矢野院長もご用事が無い限り出席されていました。専門学校の頃は、戦争の混乱と私の休学等がありましたので、はっきりした記憶にありませんが、やはり礼拝はあった様な気が致します。

次に、御真影を安置した場所はあったように思いますが、直接拝見したはっきりとした記憶はありません。

教育勅語は、時に院長、部長が朗読された気もしますが、これも余り記憶には残っていません。毎朝の礼拝の記憶が強かったせいでしょうか。

神社参拝が良い悪いは個人の考えですが、在学中、明治神宮、靖国神社への参拝の行事は、公式に隊伍を組んで出掛けたような記憶は全くありません。

軍事教練は、配属将校の派遣の受け入れと、他に予備役の軍人の教練があり、教えていただきました。当時、校庭の中で駆け足、匍匐前進などの訓練をしました。他に習志野、御殿場の練兵場への泊り込みの

訓練に行きましたが、厳しいと言う感じよりも体育の授業の延長と言った気分で受け入れていたように思います。配属将校の方々もそんな厳しい人達は全くおられず、戦時下としてはむしろ穏やかな訓練に終始して苦しい訓練の記憶はありません。

私は陸軍二等兵として短かったが現役入隊の経験があります。入隊して同班の他校の学徒兵の筋金入りの訓練には全く驚きました。これは堪らぬ、これはついて行けないと思ったのですが、戦時下の回りの環境から見ればこれが当たり前で、こちらの方がたるんでいたんだろうと今反省しております。

話は変わりますが、雑誌『世界』平成十二年一月号の都留重人氏の自伝の中に、都留仙次先生に関わる記事があり、その中で一九二五年に配属将校による教練を政府が決めた時に、都留先生自ら赤坂第一連隊に出掛け、当時の本間雅晴連隊長に面会し、キリスト教教育に理解のある将校の配属を要請されて、お陰で自由主義的傾向の強かった富田三郎少佐が配属されたと記されております。この意向は引き続き終戦まで続いていたのではないかと思う程、軍国主義丸出しの強烈な個性を持った配属将校にはお目にかかりませんでした。この都留重人氏の自叙伝の話は『明治学院歴史資料館資料集』第二集の一四八頁から一五五頁にあるような齊藤教授による軍事教練の話とは少し内容が違っています。

勤労動員は中学時代に四、五日間位、数回にわたって京浜運河、今の立会川辺りの砂利堀りの作業、日本通運の運送車の後押しなどに東京駅八重洲口に出掛けた位です。私は専門学校では兵役のため、勤労動員には参加しませんでしたが、学院にいた方々は軍需工場に動員されたように聞いています。

戦災は、五月の空襲で自宅が罹災しました。

学徒動員は経験がありません。

繰上卒業は一、二年先輩方が九月、十二月に卒業期を早めて学院を巣立たれましたが、私は経験無く詳細は知りません。

学院戦没学生慰霊祭は行われた事も知らないので、意見は省略させて戴きます。

中国・台湾・韓国からの留学生については、中国の方はいたかどうか知りません。台湾の同級生は、今でも親密に交際をしており、中学クラス会にも度々はるばる台湾から参加して来る蔡玉柱君。これは同窓会台湾支部長です。日本に帰化して長野にいる三吉勝夫君、その他独立運動で処刑された故楊延奇君、死去した呉徳光君、謝爛如君等数名の同級生がいますが、いずれも明治学院を懐かしがって、特に都留先生の遺徳を偲ぶものも多く、台湾からの学生は、「自分達にはいじめは無かった。差別は無かった」と言ってくれています。これは嬉しい事だと思います。反面、韓国・北朝鮮からの同級生も数名いる筈ですが、戦後、クラス会に参加を呼びかけても案内の回答も無く、明治学院と言うより日本の侵略に対する積年の恨みが消えていないように感じます。残念ですが、当時の友人として現在は付き合う気はないようです。侵略者として日本がアジア各国に落とした傷跡の深さに痛みを感じております。

外国人宣教師については、中学時代には、スミス、ダロー（女性）、ダハティー（女性）の三名の方に英会話を教わりましたが、昭和十六年、日米関係悪化とともに授業を中止、開戦後は交換船でアメリカに帰られたと聞いています。しかし、戦後、昭和二十年―二十一年には、ハナフォード先生などはいち早く日本に帰られて教壇に立たれたのでその熱意に驚きました。そんな環境で、もっと勉強していればと、今頃思っても後悔先に立たずです。

昭和二十年八月十五日の終戦の玉音放送は、鹿島灘で敵の上陸に備えての塹壕掘りに従軍中に聞きまし

た。その前日から「明日は正午に重大放送がある」ということで全員宿舎前で整列して聞きましたが、雑音が激しく全く内容は聞き取れませんでした。後刻、小隊長から敗戦、終戦だと教えられました。その時、近くの農家の婦人が「日本は負ける訳が無い」と息巻いていたのが記憶に残ります。日本の教育、神州不滅、神風が吹く、などの虚言を国民皆が信じていたのでしょうか。軍が解散し、復員の時の隊長の訓示は、「臥薪嘗胆、努めて農に帰し、再起を図り、必ず米英を討とう」という話。これは当時、二十二、三歳の指揮官にしては、誰が教えたか立派な訓辞だったと今でも思っています。そして、八月末に鹿島から船で利根川を渡り、貨車に乗って笹川—成田—佐倉—千葉を通り、東京に辿り着きました。

東京は一面、焼け野原。闇市があり、進駐軍が警備にあちこち歩いておりました。勿論、自宅は戦災焼失しており、家族の住む中野の借家に帰り着きました。

そして九月から明治学院に復学し、復員者が多数いたクラスに編入して、戦後の学生生活を始めました。学院は幸い空襲も受けず、チャペルもそのままで、環境は良かったのですが、生活は食べるに精一杯で、学問どころではありません。そんな中で、学院は土曜日休みの週休二日制で対応していました。昼の食事は、近所の雑炊食堂で混雑の中で漸く食べる始末。そんな状況で余り勉強出来る環境ではなく、私は午前の授業を受け、近くで雑炊を食べて帰るのを日課にしていました。戦後のインフレにも悩まされましたが、それも何とか乗り越え、昭和二十三年の卒業を迎える事が出来ました。

そんな、終戦後、間もおかず宣教師の方々が次々と学院に戻られたのは本当に驚きました。あの穏やかな方々に、どうしてこんなバイタリティがあるのでしょうか。信仰の深さに敬服、感銘です。私も戦後、戻られたハナフォード先生に教わりました。今、思えばもっと勉強していればと悔やまれます。

私は、旧制中学、旧制専門学校最後の頃の卒業で、新制学制の中学、高校、大学については全く知りません。ただ、戦後、明治学院を訪ねて、海軍墓地を買収し、敷地が広くなり、旧中学部の校庭や校舎のあった所も大学の建物に変わり、当時は男子校であった明治学院にも女子学生の姿が多く見られ華やかになり、戦後六十年の時代の流れを感じております。

終わりに二点を付け加えさせて戴きます。

従三位勲二等、矢野貫城先生の事を『明治学院九十年史』には従四位勲二等と書いてありますが、私の友人の所有している、本人の卒業証書に、はっきりと、「従三位勲二等　矢野貫城」と記載されているので『九十年史』は何かの間違いと思われます。

次に、この座談会の数日前に、専門学校の同級生、中冨、中村哲哉、高島信義君と私の四名で群馬県の温泉に遊ぶ機会があり、その時に、一同でこの座談会の話が出て、中村さんが学院新聞部に所属されて、戦後間もない時期に、主催者は記憶していないが、矢野院長の戦争協力責任を問う集会があった。その場で、園部不二夫先生が、矢野院長擁護の演説をされた記憶があると話していました。集会がどんなものか、擁護された内容も、この集会に参加もしていないので良く分りませんが、たまたま同級生から得た情報を付け加えます。

羅列的で取り留めない話をお聞き戴き有り難うございました。

原　ありがとうございました。何かご質問はございますでしょうか？

南　この『明治学院九十年史』にですね、昭和十四年頃ですけども「満州国建国記念詔書」というのがあって、「その都度奉読式が行われた」と書いてあるのですけれども、「満州国建国記念詔書」ってご存知です

か？

大澤　知りません。

菊地　僕も知らないです。

原　それ何頁ですか？

南　二四一頁です。「青少年学徒に賜りたる勅語」とか「満州国建国記念詔書」と書いてあるのですが、「満州国建国記念詔書」って聞いたことないんだけど。

大澤　溥儀皇帝が日本に来て、何か宮城辺りをぐるぐる回ったような記憶はあるけど、その頃のことでしょうかね？

大澤　昭和十四年？

菊地　聞いたことないですね。

南　明治学院で奉読式があったんですかね？

原　これはまた、私にもわかりません…。

菊地　武藤富男先生はいつ頃、明治学院へ来たのですか？昭和三十八年くらいになるのですか？

原　これはもうはっきりしておりまして、昭和三十七年です。

菊地　あの先生は満州国の法務官僚だった人でしょ。

原　岸信介さんの下で働いていたのです。

菊地　だけどクリスチャンになったり、牧師になったり…。

現影　東村山は昭和三十八年開校ですから、その前の年だと昭和三十七年ですね。

原　東村山高校は昭和三十八年、その前の昭和三十七年に武藤富男先生が学院長に就任しました。確か私が高校一年生の頃だったと思います、就任式に出ておりました。それでちょうど紛争の時ですね、紛争途中で退任、もう最後、全共闘の徹夜の授業料値上げ反対で、全共闘に脅かされて、朝方まで十時間団交、ドクター・ストップがかかり退場。その後の長時間団交後、学長、学部長等が全共闘側の確約書にやむなくサインして退出ということになり、それでもって、もう理事会に対して責任を取って退任ということで終わっているんですね。

それでは最後になりましたが、現影昭夫さん、お願いいたします。

現影　私は、昭和十九年に中学部に入りまして、昭和三十年に大学二部を卒業しました。質問事項に沿ってお話しますと、まず、矢野元院長でございますけれども、私も入学をしまして、入学式の時にお会いしたのが最初でございまして、お偉い方なので直接お話ししたこともございませんし、また声をかけていただいたこともございません。矢野先生について思い出すことは、戦時中で非常に堅苦しい入学式を予想していたのでございますけれども、やはり礼拝形式の入学式というのは、私には全く想定外でございまして、非常にびっくりしました。と申しますのは、私どもの出ました小学校は、戦時中なものですから、儀式その他につきましては、非常に堅苦しくきちんとした対応を、その戦時中の事情に合わせた入学式や卒業式をやっておりましたもので、自分たちも「中学に入ったら多分そうだろうなぁ」と思っていたところが、まずその対応の仕方について驚いたのです。

次に驚きましたのは、礼拝が毎朝授業前にあったことですね。私が住んでおりましたのは麻布の広尾で、南部坂教会の二軒後ろでございましたので、教会の前を朝晩通っていましたが、毎朝礼拝ということはちょっと気がつかなかったもので、日曜礼拝だとか、特別な礼拝がある時には、確かに教会は開いておりましたけれども、あとはずっと閉まっておりましたので、明治学院に入りまして毎日々々礼拝ということにつきましては、大変びっくりしました。しかも、配属将校がいて、教練教官が居られてですね、私どもが中学に入る時には、それは大変な所謂権力を持った人だという風に聞いておりましたものですから、その人たちがやはり毎日の礼拝についてOKだということ、許可されたということは、これはやはり矢野元院長は大変な色々努力をされて、根回しをされて、当局とうまく話をつけられていらっしゃるのだなという風に感じました。

さらにびっくりしたことは何かと申しますと、祈りと讃美歌。祈りの中で、「日本の若者が戦争でもって非常に苦労している。日本の若者ばかりではなく、アメリカの若者兵士にも同じように神のご加護を」と仰っていました。またこれも、渡辺勇助先生もそのことを仰っていました。そういうことでございまして、やはり、私どもが、明治学院はキリスト教の学校でありましたけれど、まさかここまできちんとやっているとは気がつきませんでした。ということは、私が小学校の一年生の時に、桜井さんという先生がおりまして、アメリカの“ABCDEFG”と言うレコードを聞かせてくれたのです。レコードを聞かせてくれて、「ああ」と思ったことは、その先生は急に転勤になりまして、すぐ離れてしまったのです。三十年くらいたってお会いしまして、「あの時は先生にレコードを聞かせていただいた」とお話ししたら、「やあ、あのレコードが原因で学校を転勤になったのだ」ということでした。「校長に怒られましてね。それはな

にかと言うと、アメリカから送ってもらったレコードが子供の教育にいいと、それで皆に聞かせようと思ったけれど、とてもじゃないけれどもそういう時代じゃなかった。」という風なことをお聞きしました。そういうことを考えると、矢野元院長は大変素晴らしいことを学院の中でやられたのだと思います。

それから、礼拝につきましては、重複はしますけれども、やはり、きちんと守られていたということです。私は、勤労動員でもって、後でお話ししますけれど、築地の海軍経理学校に、一番最後に作業に行ったのですけれども、聖路加病院が反対側にございまして、その聖路加病院が、戦時中は、聖ルカのキリスト教の名であるとして大東亜中央病院に改称させられ、病院の屋上にある十字架も外すように言われ、信仰上の問題なので院長もだいぶ抵抗したが、病院存続のため、最後は名も十字架も奪われてしまったことを聞きまして、これは、やはり、なかなかキリスト教の教育を守るということは大変なことだということを感じました。

それから次に、御真影でございますけれども、私は学校に入った時に、「御真影は、ここにあるのですよ」ということを上級生から教えていただいて、それを見て「あ、そう」と言うぐらいの感じでございまして、それに対して、頭を下げて拝礼するとかということはございませんでした。

それから、神社の参拝でございますけれども、小学校の時には、開戦記念日である大詔奉戴日の毎月八日には必ず、小学校が港区でしたから、明治神宮に先生の引率で全員で行きました。けれども明治学院では、神社参拝は私どもの時はございませんでした。

次の軍事教練でございますけれども、これにつきましては、他校の、都立とかミッション・スクール以外の私立の同期生は、軍事教練は必修科目になっていたらしく、だいぶ厳しかったようでございます。私

どもが明治学院に入りまして、軍事教練らしきものは、この間も皆で話したのですけれども、分列行進の練習をやって、それは査閲があるための訓練で、実際に分列行進をやって、評価は概ね良好と言われたくらいの記憶です。ただし、学内では上級生が新入生に軍隊式動作行動については、結構うるさかった。射撃部とか馬術部、滑空部、そういうところは教練教官が部長のせいか、部活のときは軍隊式行動を要求されていました。

それから、勤労動員作業でございますけれども、これは、昭和二十年の四月に、中学部の二年になりましてから、間もなく学校が閉鎖になりまして、そのために皆それぞれ地方に疎開したわけです。地方に疎開出来なかった残った連中が、京橋の区役所に動員として行きまして、当時、東京は三月の大空襲で焼けていましたが、京橋、銀座、月島、築地こういった所が京橋区役所の管内で、この地区で焼けたビルを清掃する目的で動員されたわけです。朝の九時から夕方四時まで、モッコとシャベルで焼けたビルを清掃して、使えるようにするということを、ずっとやらされたわけでございます。けれども、何ていいますか、警戒警報発令、空襲警報発令の中を整然と作業に従事、来襲するB29に合わせて退避をしたり作業をしたりしたわけでございます。幸いに作業は事故もなく毎日無事終わりました。終戦となり、今度は築地の海軍経理学校に進駐軍が来るというので、受入れのための作業につきました。それが勤労動員作業の一番最後でございました。

それから、戦災でございますけれど、私の家は幸い焼けませんでしたけれど、明治学院の近辺を見ましても、麻布十番から古川橋、魚籃坂、それから渋谷の方は明治通り一帯も空襲で焼けました。焼けた後、大変悲惨だと思うのは、川が渋谷方面から麻布十番、一ノ橋と流れていますが、川の両側の家は全部強制

疎開でもって類焼防止目的で全部取り払ってあったのですが、そんなものはもう何も役に立たないで、焼け野原となりました。焼けた後に行きましたら、都電の線路脇に掘られた退避用防空壕の中で、周りの火災で逃げられず亡くなった方、初めは無数にある銅像かと勘違いしましたが、火災にまかれ逃げられず虚空を掴むようにして亡くなった方が、焼け野原に収容が間に合わず放置されており、そういうことで大変悲惨な状況でございました。

明治学院の教職員の皆さん方も戦災で罹災されて、私ども二年生は、罹災された教員、職員の方の家の焼け跡整理に駆りだされました。作業のついでに不発の焼夷弾があると、その不発弾は放っておくと危ないものですから、皆、結構器用に処理しました。不発焼夷弾は、胴体をとんとん叩くと、筒が抜けて、中から液体のナパーム弾が出てくる。それを後で災害が起きないように処理しました。爆弾もいろいろ投下されたが、私どもが教えられ知っていたのは、高性能の黄燐焼夷弾・アルミテッド焼夷弾・油脂焼夷弾があるのですけれども、所謂油脂焼夷弾というのは、割合無難だったので、処理は油脂焼夷弾だけで、そのためあまり事故は起きなかった。そんなわけで、学院の罹災されました教職員の方々には大変感謝されました。

それから次に学徒出陣でございますけれど、これにつきましては、私ども経験ございません。学院の戦没学生慰霊祭、これも記憶にございません。

中国・台湾・韓国からの留学生でございますけれど、名簿を見ますと、中にそれらしい方が一人二人おられたように感じますけれども、全然違和感がなくて普通にお付合いしたような気がいたします。

それから外国人宣教師の方ですけれども、戦後、ブランズ、バーカー、コーヴァーさんという若い方々

が教壇に立って、私どもに英会話を教えてくださったわけでございますけれど、非常に丁寧でございましたし、当時は全員、黒の背広で決め、かっこよくスマートで、皆あこがれて一生懸命に英会話を勉強したと思っています。

昭和二十年八月十五日の玉音放送でございますけれど、さきほどお話ししたように京橋区役所に動員されまして、八月十五日の十二時に、重大放送があるというので、銀座四丁目の服部時計店、今の和光でございますけれど、その前に動員された学生全部集まりまして、そこで玉音放送を聴いたわけでございます。その時の放送は、雑音がひどくて聴こえにくかったんですけれど、後からいろいろ整理してみますと、ちょうどお昼の時報がカーンと鳴りまして、和田信賢アナウンサーが「ただ今より重大なる放送があります。全国の聴視者の皆様ご起立ねがいます」というアナウンスがございまして、続いて玉音放送をお送りすると、下村宏情報局総裁の「天皇陛下におかせられましては、全国民に対して、かしこくも御みずから大詔を宣うことになりました。これより謹しみて玉音をお送り申します」と放送があり、皆、直立不動の姿勢で頭をたれ、君が代が流れて、玉音放送となったわけです。私ども放送の内容につきましては、あまりにも難しすぎて、雑音で聴こえにくかったのですけれども、一緒にいました学院の職員の方に掻い摘んで説明していただいて、どうも日本はポツダム宣言を受入れて、負けたらしいというので、敗戦を知ったわけでございます。

戦後の学生生活でございますけれども、まず、中学部に入りました時に、小学校から来たばかりですから、物凄く元気が良くて、休み時間なんかは走り回って、上級生あたりは、「俺たちは日向ぼっこが一番だ」なんて話をしていたくらいでございました。それがだんだんと所謂学院に慣れて来まして、生物の実

習で、多摩川に学院が農場を持っていまして、ここでもって芋掘りの実習をしていました時、昭和十九年十一月一日ですが、東京の上空に初めてB29がブーンと飛んできたわけです。農作業実習中で、見ると随分高い所にB29が飛んでいるけれど「日本の飛行機はどうして迎撃しないんだ」という話をしていたのです。後で聞きましたら、一万メートル上空を飛ばれると、地上から撃っても五千メートルか六千メートルしか高射砲は届かないんですね。一万メートル上空に届く高射砲は、一個中隊にしかなくて、とても駄目だと。日本の戦闘機は一時間かけて追いかけて上がったのだけれども、一時間かけて上がって一万メートルまで行ったけれども、所謂能力不足といいますか性能不足で、一部はたどり着いたが、途中で数千メートルも失速落下してしまったということでした。それを後で知ったんですが、そのために敵に偵察飛行をやられてしまったと、その後二回やられて、計三回偵察飛行をやって、東京空襲のための精密写真撮影をしたというのです。この科学的偵察資料で、敵は東京空襲の準備をした。ちょうどその初偵察の時に、私達はB29を多摩川の農場で目撃したのでした。

空襲警報が発令されると、学院では授業があっても全員下校させました。昭和二十年の二月くらいから艦載機が空襲に加わり飛来するようになり、学院生の何人かに聞きましたが、空襲警報が発令され下校途中に艦載機に追い掛けられて、電柱に隠れて、逃げ回って、結局機銃掃射こそされなかったが、随分怖い思いをしたという人もいました。それから終戦になってから、疎開していた連中がすぐ帰って来るのですけれども、疎開した人達は帰って来ても食べ物も無ければ住む家もないということで、都会地への転入を禁止した「都会地抑制緊急措置令」というのがございまして、昭和二十一年の三月二十五日に公布されたのですけれども、そのために、学校が再開されても帰って来られない学生が沢山出ました。

また、終戦直後は、授業が始まっても、教科書が無かったものですから、漢文の安藤先生は黒板に書かれて、それを我々が読んで、それが教科書代わりでした。数学の先生も教科書が無いものですから、黒板に方程式をどんどん書いて、先生は、ほとんど内容が頭の中に入っていますが、我々は写すのが精一杯で、写している内に鐘が鳴って、写すのが間に合わないということがございました。それから音楽の小泉先生も、教科書が無いから、あの頃ラジオからたびたび放送された「浜辺の歌」等を教材にされて授業をやっていたようでございました。ですから、歴史とか地理とかいうものも、随分暫くたってからでございまして、その当時は中断しておりました。

それから、終戦直後の昭和二十二年十月に衣料切符制が復活しましたが、みんな家が焼けたり焼け出されたりして、お下がりとかお古の学生服とかを着て通学していましたが、軍関係から復学して来た学生とか、親兄弟が復員の際に持ち帰った軍服を着て登校した学生も結構おりました。お古の軍服と学生服姿が学内に混じり、私は海軍下士官の服装をしていたので渾名を「兵曹長」とつけられて、今でも「兵曹長」と呼ばれています。

それからまた、駐留軍の兵隊が闇市に横流しした兵隊服をやむなく買って来て、そのままでは問題が起きますから、茶色に染めると色がよく染まるので、洗濯屋で染めさせたものを着て来る学生もいました。他の転校組の中には、駐留軍の軍属の様な格好をしているのがいて、「あれ、こいつ、国籍は日本かな?」と思ってました。英会話の時間でも聖書の時間でも、結構対応が上手なものですから。それで、その頃は国際興業が進駐軍専用の軍用バスを無料で都内主要路線を運行していたのですが、彼はそのバスを止め、乗って行くのです。「本当に軍属だったのか?」と後で聞いたら「そうじゃないんだ、こういう格好をし

ていて、パッと手を上げると止まるんだ」と、「それがわかったので、あまり喋らなくても手を上げればよい。それでもって品川に行ったり、銀座へ行ったりしたのだ」と言っておりました。

それから、戦時中は学院は勤労動員で学生が不在なので、軍や通信学校等が入り使用していたため、校舎は荒れ、窓ガラスも割れたままで、冬に向い寒くないかと思ったのですが、アメリカのミッション・ボードより補修用の窓ガラスが到着して、綺麗に補修されました。

それから、変わった学生もいまして、当時人気の喜劇役者の榎本健一（エノケン）の息子が一年先輩でおりまして、演劇部とかで、学園祭の時などチャペルの舞台でドタバタ劇を披露していました。

また、戦後、プラカードを掲げ、盛り場や街を歩く広告のサンドイッチマン商売が流行しましたが、高橋三吉大将の息子さん（同窓生）がサンドイッチマンをやっておられ、プラカードを掲げ、口におしゃぶりをくわえてのサンドイッチマン姿で校庭に来られ宣伝をされていました。

次に、食糧難でございますけれど、戦争末期には、食べ物が無くて、一般の家庭では大豆とかトウモロコシとかコーリャンとか薩摩芋とか、そういったものを代用されていたようですが、幸運にも空地などに家庭菜園らしきものを手掛けることができた人は、自分でカボチャを作ったりトマトを作ったりできたようですが、それはごく一部の人で、私達は採れたカボチャや薩摩芋の蔓までも、茹でて皮をむいて食べました。口に入るものはなんでも食べました。これらで食料は代替され、米は満足に口にすることはできなかった。配給米の玄米を一升瓶に三合程入れ、はたきの棒で突いて精米しました。

配給の小麦粉は、すいとんにしたり、フライパンで焼いたり、木製の箱の内側にブリキ板を片側ずつ張り、電灯線を＋－別に繋ぎ、手製のパン焼き器をこしらえまして、小麦粉を重曹で練って通電させ、焼く

とパンが出来上がるわけで、これらの食べ物を工夫して作り、しのぎました。

それから、インフレで、政府は昭和二十一年にインフレ収拾措置案を出し、封鎖預金、一定期間凍結、払戻制限を実施しました。インフレ対策として新円が発行されましたが、これは旧紙幣を封鎖して新たに日銀券を発行したのですが、印刷が間に合わず、紙幣に切手のような証紙を張り代用させました。

昭和二十年に警視庁第三課が発表していますが、基準価格と闇価格とで、価格を対比しておりますが、基準米とは多分配給米のことだと思うのですが、基準米が一升で五十三銭ですが、闇価格だと七十円です。随分大変なことで、薩摩芋は一貫目が一円二十銭のところが、闇価格だと五十円でした。食べ物について非常に苦しんだという状況で、私どもは学校で弁当調査というのがありました。食べ物が少ないし、腹が持たず、十二時の食事の前に弁当を空にしてしまう者がいるものですから、二時間目か三時間目位に弁当調査をやるんです。本当に弁当に沢山入れて来て半分食べてしまって残す者と、米が無いから最初から弁当に半分しか親が入れてない者、全部食べてしまった者と三通りいました。中でも一番あおりを食ったのは、食糧難で親が弁当箱に半分しか飯を入れてくれないのに、お昼に少ない半分を食べようと思ったところが、弁当検査で「お前は半分食べた」と大変怒られた者もいました。

それから食堂事情でございますが、学院の中で食堂が出来たというのは、戦時中は勿論ございませんけれども、街には外食券食堂というのがありました。昭和二十二年の七月四日に外食券食堂以外の飲食店に休業命令が出て、それで昭和二十四年五月七日に食堂が再開しているんですね。この頃、学院の食堂の記憶があります。当時、校門を入り右手にテニスコートがあり、確かその奥に、協同館の食堂が出来た。出来た食堂もやはり何か、ちゃんとしたものを食べるには外食券食堂の方がいいかな、どうかなという気が

いたしました。昭和二十五年の六月一日、もりそばとかけそばが自由販売となった。それで、高輪警察署の近くの蕎麦屋に皆が食べに行った。もりそばとかけそば以外は、きつね（そば）とカレーライスがありましたが、外食券がないと駄目でした。

次に、新制中学でございますけれど、私どもは途中でもって新制高校に移行したものですから、これはパスします。

新制高校へは、二年に移行したわけでございますが、この時は高等学校が初めて出来たばかりですから、色々なクラブが次々と出来まして、美術部だとか、カメラ部だとか、体育系はサッカー部だとか幅広く部活が盛んに行われました。まだ、ないないずくしで、みんな手作りで、サッカー部の連中は、ランニング（シャツ）にラシャをMGと切り抜いて張りつけ、明学のユニホームにしていました。

英語は、外国人教師が一生懸命教えてくれて盛んでございました。今みたいにテープ（レコーダー）がございませんでしたので、その頃は進駐軍の兵隊をGIと言っていたのですが、GIの（キリスト教）信者の人達が福音英語学校というのを開校しまして、聖書の研究をやりながら英会話を教えるということを、週に一回、銀座の米軍施設内とか桜上水の日本聾唖学校でやっていましたので、これに通いました。

このようなわけで、高校を出ます時に、高橋源次先生が、新制高校卒業生全員に「大学は他校にされる人もいると思われますが、ぜひ続けて明治学院大学受験を」との勧誘がございまして、私は高校を卒業しましてからサッポロビール株式会社に就職したものですから、大学は二部へ入りました。二部の時は賀川豊彦先生が夏期講習をやっていたのを受けました。それから伝道集会もあり、参加しました。その時、賀川先生は一生懸命キリスト教の説教をされて、感銘を受けて洗礼を受けられた方も多かったようです。二

部に入った時は、学生が随分いたなと思ったのですが、卒業した時は八十八名でした。三月卒業組と十月卒業組がありましたが、三月卒業組は七十六名、十月卒業組は十二名でした。私事で恐縮ですが、私の息子も平成一年卒で、大学院の文学研究科（英文学専攻）でお世話になりました。

原　はい、ありがとうございます。焼夷弾が四発、学院の構内に落ちたのを記憶されてるわけですね？

現影　それは、ある朝登校した時に、皆が「焼夷弾落ちた」と、わあわあ騒いでいたのですが、「とにかく不発で良かった」と皆で言っていました。事実さきほど申しましたように、先生方のところで焼け跡の整理をやっていましたので、非常に上手に不発弾を処理し、手慣れていたわけです。あまり難しく考えていなかったのですね。「また不発弾か」という感じで。

原　ありがとうございます。もう実は、時間が三時半までの予定を過ぎてしまいました。座談会というタイトルなのですが、皆さんの報告で終わってしまいそうなのですけれども、もし、差し支えなければ四時ちょうどまで延長させていただくことは出来ますでしょうか？帰りのご予定もあるとは思うのですが、よろしゅうございますか？はい、ありがとうございます。それでは、四時まで座談会延長ということで、今の現影さんのお話に何かご質問ございますか？

南　明治学院中学を昭和二十四年にご卒業になっているんですね？

現影　まあ…。

南　新制中学が出来たのが、昭和二十二年ですから、同年一年の入学者は昭和二十五年が卒業ですね？新制中学が出来た時に、現影さんは旧制中学部四年だったと思いますが？

現影　高校の二年へ移行したのです。そのへんが誤解の元なんです。というのは、昭和十八年に入学した

人は昭和二十三年の五年で卒業しているんです。昭和十九年に入った人は四年ですから、一年足りないわけです。それで「一年足りないにもかかわらず、高校の二年に入るとどういうことになるか」ということですね？

南　これは昭和二十四年旧制中学部卒業と同時に高校三年へ移行したと思うのですが？

現影　さきほど言ったように、旧制中学の昭和十九年に入った人が、昭和二十三年になって旧制中学がなくなった。それで、学籍簿がなくなった。いきなり、高校二年へ転校生として入ったということですから、おかしいということになります。

南　普通は、新制中学一年の入学者の卒業は昭和二十五年になるわけですね？昭和二十二年に出来たわけですから。二十四年というのは、途中で中学一年から行かなくて、中学校の二年生になって、昭和二十四年卒業と、こんなわけですね？

現影　そうそう。

南　次に高等学校になるんですけれども、高等学校が出来たのは昭和二十三年ですから、第一年入学者は昭和二十六年卒業になるわけですね？

原　現影さんは中学部に昭和十九年に入学、五年間在学して昭和二十四年に卒業になったと思うのですが？

現影　そうなんです。だからね、卒業が中途半端になったわけです。だから学院の学籍簿も、新制中学は全く入学も、卒業も記録がないわけです。で、新制高校は入学がなくて、卒業だけあるんです。（笑）旧制中学の方はそういうわけで無くなったものですから、全く白紙なんです。それで、旧制中学は昭和十八年の入学生の方が昭和二十三年に卒業して終わりという形になったわけです。ですから、昭和十九年の入

学生は、その時は四年生だったわけです。五年生ではないから卒業にはならないわけです。

南　先程お話がありましたけれど、新制度が出来た当初は、教科書も何もなかったということですね？

現影　終戦後ですね？

南　終戦後、新制度の新制中学が出来た時です。その時は教科書も生徒に届くのは遅れました。

現影　終戦後？

南　終戦直後はどうでしたか？

現影　その時は教科書はもう揃っておりましたよ。いわゆる昭和二十年の八月十五日に終戦で…。

南　揃っていたけれど、生徒の手元に届かなかった？

現影　昭和二十年の八月十五日に終戦になりましたね。それで、九月から授業が始まります。九月、十月と、その時には今までの教科書は全部無いのですよ。

南　いわゆる墨で消しましたか？

現影　消しました。

南　昭和二十二年になってから新制度になりましたね？その新制度になった時には、教科書は出来たけれども、生徒の手元には届きましたか？四月に？

現影　いやそれは。

南　生徒に教科書が来なくて困ったのですよ、全国的に。それで先生だけに、文部省が教科書の初めのところだけ藁半紙みたいな紙に印刷して配ったのです。生徒には全然教科書はありませんでした。それは長いこと続きましたよ。それは困りましたよ。

現影　だから、あの頃は教科書も無いから参考書も無い。それで、英語の辞書は、『コンサイス』の辞書は巻煙草を巻くのに丁度いいのです。あれが一番いいんですよ、火が消えなくて。廃棄になった煙草をその紙で巻いて巻煙草にしたのです。それで、『コンサイス』の辞書が全然無かったんです。

南　例えば英語の教科書も「宮城遥拝なんか載っている個所は不適当だ」というのでみんな墨で消したんですよ。昭和二十年九月、十月頃は、教科書は全部「これも駄目だ、あれも駄目だ」と、アメリカの指示が来て、教師は「これは駄目だ、あれは駄目だ」と生徒に教科書を消させましたよ。大変でしたね。

現影　昭和二十年の九月二十日に教科書の取り扱いについて文部省の通達があったんですよ。だから、あの頃の教科書は無残でしたよ。

南　そうですね。教科書はね。特に歴史の教科書は無残なものです。

現影　十二月三十一日に修身とか地理、歴史が授業停止になるんです。その頃の学生は大変ですね。

大澤　大河原先生にお伺いしたいのですが、私は中学はあなたより二年後に卒業しているんですが、当時、矢野先生と話したことも無いし、人格も知らないけれど、ともかく彦根高商から来られて、明治学院を守って下さった方のように今まで思っていました。あなたのご意見もややそれに近いか、あるいは若干のご批判があるようにも聞こえます。それから先生の話を伺うと、矢野先生が、当時の軍国主義に迎合したようにも聞こえて、非常に何面性もあってよくわからなくなるのですが。私ども生徒は矢野先生を信じて学校に通っていたと思うのですが、先生なんかは如何だったんですか？

大河原　はい、私もほぼそうです。私どもは、だいたい矢野先生とは接触が無いということもありましたけれども、私達に向ってはそういうことをおっしゃらないわけです。

大澤　本音はね、あちこちで多少軍国主義的なあるいは戦争歓迎のような言動も多少あるけれども、これはしょうがなかったというような気持でいいんでしょうかね？

大河原　それは、外向けのものだったのではないでしょうか。旧制中学部はそのままでいいと考えていたと思います。

大澤　当時を振り返って見ると、よくも明治学院が礼拝をして讃美歌を歌って、あの当時を過ごしたと思うんですけれど、これはやっぱり矢野先生の力じゃないかと私は思っているのです。あなたは半分どう考えていますか？

大河原　半分って？もうちょっと同感ですね。つまり、矢野さんの位置付けというのが、原さんの方で最初言っていたけれども、非常にこれから問題になると思います。

大澤　これが解決できないで、私もさっき話した時に、「戦後の人は色々お考えはあると思うけれども、我々はそう思った」と言ってしまったんだけれども、それに近いことでいいんですか？

大河原　はい、私もそうですね。

大澤　でも、解決の仕様が無いですね。戦後の人が言うのをね。

大河原　そこは、でも、歴史家の仕事ですね。

大澤　ああそうですか。我々が出る幕ではない？

大河原　いや、やっぱり我々は発言すべきだと思います。もうあの頃、我々は模範文を書くといっては、「（鬼畜米英）撃ちてし止まむ」を書くと決まっていたんですから、作文としては。

大澤　学校自身がなくなってしまうかも知れないという危惧を感じたのは、矢野先生ご自身じゃないかと

思う。だから戦後の人が見ると、「戦争に迎合しておかしいよ」と、「戦争犯罪を問う」とまで言われてね。これちょっと、何としたらいいかと私は今日ここに出てきてね、皆さんの意見が…。

南　おかしく思いますのは、配属将校が「英語を使うのはやめろ、礼拝はやめろ」というのを生徒に向ってそう言うのですよ。だけど、礼拝の時はちゃんとチャペルに入って讃美歌を歌っているんですよ。矢野先生の従三位勲二等が効いたんですかね？

大澤　それで、私は後で皆さんに資料を回しますが、都留重人が都留仙次先生のことを書いたものの抜書きをクラス会で配ったことがあるんですよ。これを見ると、都留仙次先生が配属将校を穏健な方に頼むと、それがずっと生きていたかなという気がするし、それから齊藤茂夫先生のこの文（『「明治学院九十年史」のための回想録』）を見ると、多少ニュアンスが違うけど、やや同じようなことを書いている。穏健な人が多かったと思いますが、あとは厳しい人いましたか？

大河原　いや、笠井重一という配属将校は…。

大澤　笠井重一中尉ね。

大河原　いましたね。我々の所に来て、何度も「身の上相談を持ってきなさい」ということを言いましたよ。

大澤　彼は中学部でしょ。

大河原　中学部です。

大澤　それでは、先生のお考えも今とはちがうけれども、当時はやはり矢野先生は学院には大事な人だったと我々は思っていいんですね？

大河原　そうですね、私は先程のご発言にほとんど賛成です。

大澤　言い過ぎたかなと思ったのですが、我々の思った感じでね。裏付けは何もないんですよ。

菊地　全然言い過ぎじゃない。

現影　話が飛びますが、島崎藤村さんが作成に関わったという「戦陣訓」の中の文面の終わりは「生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」ですね。だからそういう時代だったのではないですか？表向きの顔と裏の顔とを上手に使わないとね。やはり一方だけだと突っ張って、つぶされてしまって牢屋に入ってしまうか、それとも寛容の精神で上手に世の中を見ながら喋ると。そして、やはり存続を図って、嵐が過ぎたらまた、嵐に立ち向かうと。さもないとめげてしまうわけですね。やはりその辺の所を抜かしてはいけないですね。

大澤　逆に漆山先生の方が、発言は相当過激に聞こえたけれども、あなたのおっしゃるイメージとちょっと違っていたね。

大河原　個性的なので、そういう風に聞こえるんですね。

大澤　戦争の賛成者みたいな感じで非常に激しい話をしたような気がする。でも、あなたの話を聞くと、こっちが聞き違えているような気がする。

大河原　そこは柔軟にやはり見ていかないといけないと思います。

大澤　今日はあなたから箇条書きの文一つ一つを聞いてそう思うけれども、やはり最後の矢野先生のところがね、あなたの意見とちょっと違うんです。やはり学院にとってなくてはならない人だと私は思いたいのですよ。戦後の混乱の時については私はちょっとわかりませんが。食糧難で、専門学校では勉強をあん

まりしてないんですよ。

原　『同窓会報』の矢野先生についての回想を読んでいましたら、軍事教練の時に生徒をひどく叱責する軍事教練の教官がいたらしいのですが、「そんなに生徒に厳しく当たらないでくれ」と矢野先生がその教官に対して言ったというのが記録で残っているんですね。だからやはり院長として軍事教練があまり激しくならないようにコントロールされていたような気がするのですが。

大澤　あの頃、矢野先生の話をチャペルで聞くだけだから、本当の人格を、私は拝見していてわからなかった。

南　昭和十九年四月二十八日の『朝日新聞』を見ますとね、文科系の専門学校が随分と理科系に転換されているんですね。いわゆる理科系の専門学校に転換されたり、新しく作られた工業専門学校が二十一校あるんですよ。よくも明治学院が文科系に留まったと思います。

大澤　それは何があったんでしょうか？関東学院と青山学院？

南　青山学院と関東学院だけじゃなくて、私立で理科系に転換したのは二十一校あります（朝日新聞・昭和十九年四月二十八日）。国立を含めるともっと多くなります。転換されて工業専門学校になっている。国立の彦根高商、和歌山高商、高岡高商も工業専門学校になっているんですよ。

大澤　神戸高商もそうなったの？知らなかった。

南　そうですよ。国立もそうだし、私学は多いですよ。よくも明治学院が文科系を残すことが出来たと思いますね。相当に矢野院長の力があったと思うのです。関東学院や青山学院だけではありません。全国的にそうです。

原　ただ、南さんの場合、青山学院から明治学院にやむなく統合で来られた。そのために卒業が明治学院になってしまったわけですよ。どちらかというと青山学院の方が当時はやや学力が高かったと言われていたように思うのです。戦前からそうだと聞いていますけれど、ですから、当時は青山学院を出た方がブランドとしては価値があったわけだったと思いますが？

南　そのことについてですが、矢野院長は富士見町教会の長老でしょ。小野徳三郎氏も同じく富士見町教会の長老なんですよ。昭和十八年、小野氏は青山学院理事会から院長就任の依頼を受けたが、教派の違い（青山学院はメソジスト派）等もあり、決断を渋ったそうです。しかし、富士見町教会（明治学院と同じ長老派）牧師、三吉務氏（明治学院神学部出身）の勧めもあり、結局受諾したそうです（小野徳三郎氏のご令息で、本学名誉教授・小野忠信先生の資料による）。

だから小野徳三郎さんは自分で積極的に青山学院の院長になったのではありません。もちろん青山学院の院長になったけれど、明治学院に好感を持っていたのではないかな？だから青山学院と明治学院が合併しても青山学院の院長なのに明治学院の理事をしていますからね。

原　南さん自身は青山学院から明治学院に強制的に来させられて卒業されたわけですが、当時青山学院の方を出た方がブランドの価値があるということがあったと思うのですよ。そういう点で不満は無かったですか？

南　申し訳ないんですが、不満はありましてね。別にグループを作って、「青友会」を作りました。明治学院卒業なのに青山学院のグループを作って、同窓会をしても、明治学院の校歌じゃなくて、青山学院の校歌を歌ったりして、「青友会」というグループを作って仲良くやりましたけれどね。結局、あれは文部

省省令で、文部省の訓令になっているからどうしようもないんですよ。「元に戻せ、青山学院に戻せ」と最近まで盛んに運動しましたよ。それで青山学院に集まって、盛んに青山学院当局に運動したんですが、駄目で、結局、青山学院当局は「校友会員として認めるが、卒業生としては認めない」という結論に達したわけです。そういう時期があったわけですね。

大澤　南さんは転科して工業専門学校に残ることは出来たわけですか？それは無かったのですか？

南　希望すれば、青山学院工業専門学校に残ることも出来たんです。

大澤　工業専門学校に行くと徴兵が免除されるから、そっちへ行こうということは出来たわけですね。

南　希望すればね。工業専門学校も途中で中止になり、結局、徴兵延期が無くなりましたからね。

大澤　やはり歴史の波に弄ばれているんですね。

南　そうですね。関東学院も合併反対でしたから、中学部の運動場で合併式が行われた時に、青山学院の院長や先生方が集まりました。関東学院からは高谷道男先生一人だけで、関東学院の先生は誰も来ませんでした。もともと合併に反対でして、文部省に行ったらしいですよ。代表者が、合併しないよう文部当局と交渉したが受け入れられず、矢野院長のところへ来て「合併を諦めてくれ」と求めたが、矢野院長は「お国のためにこういう政策に協力しなければいけない」と言って説得したというのです。それでやむなく関東学院は明治学院と合併したということです。

大澤　経営科の高谷先生が向こうからみえたのですね？

南　そうです。

大澤　笹尾先生と三神先生が青山学院から移られたのですか？

南　三神勲先生と石井次郎先生と笹尾洋二郎先生です。それと、後に宮城学院院長になられた小田信士先生ですね。

大澤　四人ぐらいみえたんですか？

南　四人です。文学部で二名と高等商業部で二名とで、計四人です。

大澤　関東学院は一人ですか？

南　一人です。

大澤　高谷先生お一人ですか？

南　一人です。「明治学院ではそれ以上は採れない」と。

大澤　ああ、そういう意味だったんですか？

南　だから青山学院からも四名しか予算の関係で採れないということで。

大澤　大変だったですよね。

南　それが青山学院では文学部なんか生徒たちに説明が無いんですよ。新学期に生徒は知らずに青山学院に行った。しばらくして「明治学院に変わりましたよ」と言われて、学生が初めて知ったというのですからね。

菊地　若林龍夫先生が合併のことで、何か「建学の精神は守らなければならん」というようなことを言った記憶があります。

南　明治学院にキリスト教概論の先生で小野忠信先生がいましたね。あの方が、青山学院院長の小野徳三郎先生の息子だと聞いていますが。

原　そうですか。ラテン語を教えておられましたけれど。

大澤　阿部志郎先生も青山学院院長のお子さんでしょ？

南　そうです。阿部志郎先生が横須賀基督教社会館の館長になられているのは、明治学院に来たおかげですよ。当時の明治学院の宣教師の紹介だったと聞いていますが。

原　そろそろ時間ですので、最後に二つほど質問させていただいていいですか？矢野貫城先生が院長になった時は、中学部長兼務で、その時に体操を率先してやったとありますが？

大澤　それは違うのではないかな？矢野先生が来た時に中学部長は都留仙次先生のはずです。それで都留仙次先生がフェリス女学院に行かれてから、中学部長は漆山先生になった。

原　漆山先生になる前に、矢野先生が中学部長を兼務していたと思うのですが？

大澤　兼務していますか？いや都留仙次先生ですよ、それは昭和十四年当時ね。

原　写真が残っていましてね。矢野貫城先生自ら先頭に立って、生徒達と一緒に体操をやっている写真なんですが。

大澤　中学部ですか？

原　中学部だと思うのですよ。校庭で。

大澤　当時専門学校とは離れていましたからわかりませんが、中学部長は都留先生。その後、漆山先生、それから高橋先生かな？その辺、矢野貫城先生が中学部長兼務というのが私の記憶の中にないんですが、皆様の記憶の中にありますか？

菊地　終戦直後のことはよくわからないが、ずーっと、私の記憶では都留仙次先生ですが。

大澤　それはそれとして、話はどうなんですか？

原　ただ、記述としては年表がそうなっているんですよ。

大澤　そうかもしれない。ただ、さっきも言ったように、従三位勲二等に関しては、正四位勲二等と『明治学院九十年史』に書いてあるのに訂正を要求したいね。ここにちゃんと卒業証書のコピーに書いてあるわけですから。（笑）

原　従三位勲二等というのは聞いておりますので。

南　僕らの卒業証書は従三位勲二等になっています。

大澤　昭和二十一年はそうですか。私の卒業証書は昭和二十三年なので「事務取扱　齊藤茂夫」先生になっているんですよ。もう矢野先生は院長を辞めているんです。これを見るとね。これは私のではないけれど、中学の卒業証書は出身県まで書いてあるんですよ。また下の写真は、柔道の三船久蔵と赤沼先生の名前が載った初段の認定書をコピーしたものです。

原　もう一つの質問ですが、『明治学院百年史』に取り上げられている長谷川信（まこと）は菊地さんの同期生と伺っているのですが、どういう方だったのですか？

菊地　長谷川さんは、同志社大学予科から転校して、旧制中学の喜多方中学五年を出て、明治学院厚生科に入学しました。英語がものすごく上手な方で、英語の教科書を読ませると、英語の先生に「うまいね。どこの中学から来たの？」と聞かれると「喜多方中学です」と答えていた。それで、付き合いはなかったけれども、いつも長谷川信の話が出てくると、彼は『きけわだつみのこえ』に出ているのですが、色々軍隊に入って歩兵から転科して航空の方へ行ったのは、歩兵だと取っ組み合いで相手を倒さなければいけな

いので、飛行機ならば遠く離れているから救われるというような気持ちとか…。

原　『明治学院百年史』だと洗礼は受けていないにしろ、信仰心の篤いクリスチャン的人間として書かれていますけれど、一方で、仏教の経典も読んでいたと聞いているんですよ。

菊地　そうです。そういうような感じですね。あの宗教家の梁川氏というのはどういう人なんですか？軍隊でそういう本を取り上げられたという個所がありますね。

原　いずれにしろ、キリスト教や仏教を問わず、宗教に非常に関心があった方なんですね。

菊地　そうそう、関心があったね。長谷川信の没後、猪苗代の湖の辺に石碑を建てるんですね。この『心に刻む』に載っていますが、石碑が出来上がった時のことです。

一九四六年五月のことである。小林敏子教諭は信を偲んで短歌を読んだ。

特攻機にて基地発つ君がよこしたる最後の文字「シアワセデシタ」
湖近きすすきの中に君が碑を見出でて佇ちぬ霧深き中

私は一九二二年生まれですから一歳上ですかね。生きていればは八十四歳ですね。

原　性格的には温厚な方でしたか？

菊地　とても大人しい人でね、勉強が出来た。惜しい人でした。生きていたらきっと出世しただろうと思いますけれど。

原　わかりました。それでは、他に何かご質問ございますでしょうか？陪席者の大西先生、佐藤先生いか

がですか?この際、お聞きしておきたいこととか?

大西　いろいろと学ばせていただきました。大河原先生がおっしゃった矢野先生のイメージと、『心に刻む』という本の取材で出会った台湾・韓国出身卒業生の話が次第に私の中で符号して来ました。近年の研究において、明治学院が東アジア諸国のミッション・スクールの中で驚くほど自由な学校であったということも明らかにされています。

原　それでは時間が過ぎてしまいまして申し訳ございません。今日は貴重なお話をうかがいまして、本当にありがとうございます。歴史資料館としては、最初に館長が申し上げましたように、本日の座談会を記録として残させていただきますので、また追って、録音テープから起こしたものをお届けすることになると思います。その節はよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

資料（戦前・戦中の明治学院事情）

都留仙次先生のご遺徳をしのぶ

内山兼演（白金一九会）

私たちが中学時代、中学部長としてご指導戴いた都留仙次先生は、敬虔なクリスチャンで、温顔、そしてその笑顔は終世忘れる事が出来ません。私が、雑誌『世界』一月号を読みましたら、「都留重人自伝――いくつもの岐路を回顧して――」の文章のなかに、都留仙次先生の事が書かれているではありませんか。私どもの知らない古い事ですが、先生のお人柄がしのばれ、是非、白金一九会の皆さんにもご披露したいと、先生に関わる部分だけを引用してみました。改めて、先生の心髄に触れた様な気が致しました。

以下は雑誌『世界』平成十二年一月号掲載の「都留重人自伝」の引用です。

「鼻つまみ者」と陰口をたたいていた。妻のふじなど、聖書を読むためにカナ文字を勉強し、少しずつ読めるようになったとき、マタイ伝の中の「鷲、集まらん」というくだりを「ワシャツマラン」（私はダ

メな男だ）と解し、「エス様も謙遜な人だったのだね」と語ったという。

その後、明治も終わりに近いころだったであろうが、音平は、喜一以下一同が集まった機会に、「お前たち五人のうち一人は、是非キリスト教の牧師になってほしい。そうなった場合、牧師の生活は楽ではないと思われるので、その時は、一同で助け合うように」と語ったのだった。五人兄弟の中で経済的に一番成功した私の父は、神学校に志した弟仙次の一家にたいする支援にかんしては、子どもたち我々に向い、「お祖父さんとの約束だから、仙次一家に不自由させることはできない。だから、お前たちもぜいたくは我慢するように」とさとすことを忘れなかった。

ともあれ、音平の子女は、その誰もが気骨のある人物として成長した、と私は思う。

喜一は、帰郷して宇佐中学の数学の教師をしていたが、音平から受けついだ山林を自力で開墾し、造成した田畑を進んで、逆境にあった部落[ママ]出身の小作人に開放し、戦後の農地改革の折、そのすべてを譲渡した。そして晩年は、緑内障で失明に近い状態になりながらも、『廣瀬井出と南一郎平傳』（勁草書房、一九五五年）の執筆に性根を傾け、一九五九年に八七歳で長逝した。

藤太は、兄弟の中ではただ一人、公務員となり、農林省官吏として茨城県庁や香川県庁で勤務したが、一時、東大での恩師上野英三郎教授（忠犬ハチ公の主人）の命で久原鉱業に移り、英領ボルネオの開発に出張した。しかし、一九一九年以降は、朝鮮総督府での官職につき、その間、日本人土木業者が有利な契約を得ようとして、藤太のところへ金品の付け届けをしたらしいが、藤太は、その都度妻の徳子に命じて返済の足を運ばせたことで名高い。藤太夫妻には、やはり子どもがなく、弟仙次の次男忠久を実子として入籍させたのだった。

仙次は、アメリカのオバリン・カレジ留学のあと、イギリスのエヂンバラ大学でも学び、帰国後は明治学院で教職につき、一九五七年には同学院の院長に就任したのだったが、一九二三年関東大震災当時に朝鮮半島出身学生何名かを学院内にかくまったことで名高い。その当時、「朝鮮人[ママ]が井戸に毒を入れた」という流言で多くの朝鮮人[ママ]が殺害されたのであり、在郷軍人たちや、学院内所属の予備役将校が、仙次に向かって「朝鮮人[ママ]を突き出すように」と迫った。これに対して仙次は、「神から預かったもの、命に従うのみ」と答えて、断固、学生たちを守り抜いた。このことを仙次はついぞ自ら語ることはなかったが、当時事務職員だった簿記学の松田講師が一部始終を目撃していたことから、後年つねづね人に語ったのである。徹底したカルビン主義者であると同時に絶対平和主義者でもあった仙次は、一九二五年に配属将校による教練を政府が決定したとき、明治学院高等部の部長として、これに抵抗し、学生協議会を開いての討論の結果、受け入れ反対の決議をした。しかし一九三一年についに抵抗しきれなくなったとき、仙次は自ら赤坂第一連隊に出かけて本間雅晴連隊長に面会し、キリスト教教育に理解ある将校の配属を要請し、おかげで自由主義的傾向の強かった富田三郎少佐が配属されたのだという。

（内山兼演の原稿を大澤が編集）

［『平成十二年四月開催の白金一九会クラス会出席者配布資料』より、修正の上転載］

【編集付記】　二〇〇六年十一月十一日の「戦前・戦中の明治学院事情座談会」で「資料」として用いられた、雑誌『世界』二〇〇〇年一月号（二三三～二四二頁）の記事については、注意を要する。本『資料集』の七三頁で論じられており、また四〇頁と六一頁でも話題になっている都留仙次学院長の軍事教練に

対する対応に関しては、この雑誌連載の二四一～二四二頁にある、「都留音平の一家」の記述に基づいている。だが、この連載をまとめた都留重人著『都留重人自伝　いくつもの岐路を回顧して』では、この個所について若干の訂正がなされている。しかし、その叙述自体も、明治学院の残存資料と照らし合わせると事実に齟齬があり、今後、更に詳しく検証する必要があると思われる。

平林武雄先生訪問記

平成八年（一九九六年）六月二日午後、東京目黒の平林武雄先生のご自宅を以下の六名の同窓生が訪問して、明治学院ご在職中に出会った出来事、関係された方々の人物像などをお聞きして、記録にとどめたものである。

訪問者は、卒業年度順に紙本義雄、大島貞夫、中冨頴隆、今井洋一、岩浪伊一、齊藤豊の六名である。

先ず、平林先生の略歴を記す。先生は、明治四十三年（一九一〇年）九月二十日、平林秀齊と平林とりの六男として、東京で出生された。今年九月には八十六歳の誕生日をお迎えになる。明治学院中学部から、昭和三年（一九二八年）それまでの高等学部商業科が独立して、高等商業部となるにしたがって、同部の第一期生として入学、昭和六年（一九三一年）に卒業された。

長年にわたり明治学院に教員として奉職され、専門学校教授から昭和二十四年（一九四九年）に新制大学発足とともに助教授、昭和二十六年に四十一歳で教授に昇任された。のち文学部長、図書館長などを務められた。昭和五十四年（一九七九年）に定年により退職された。これより先、日本大学英文科を卒業され戦後、学院の留学制度により、コロンビア大学に一年留学。専攻は英文学。一方で、長年にわたり同窓会副会長を務められた。ご高齢であり且つ最近は心臓に病気をお持ちのご様子であるが、この日は血色も良く年代の証言記憶も正確である。

聞き手　先生は、終戦の日の昭和二十年（一九四五）八月十五日は、どこに居られましたか？

平林　その日は朝から熱い日でした。当日は勤労奉仕はなく、私は登校日でしたので事務所にいました。教務課です。正門を入ってすぐ左手の石段を上った、木造二階建の建物です。何か打ちのめされたような気持ちで、何も言うことがない空しさで目黒駅まで歩いて帰りました。

ところで、皆さん、教務課の前に掲示があったでしょう。

（1）聖訓を奉じ固く本分を守るべし（2）（3）この掲示のことは『目で見る明治学院一〇〇年』に出ているので皆さんもご承知の事と思います。ところがある日、当時の矢野貫城院長は私を見て、「平林さん、どうですか、聖訓を奉じその意味は解りますか？」私は、はぁー、と思いました。「聖訓の聖は聖書の聖ですか」と言いましたら「よく解かりましたね」と言われました。先生は色々考え工夫されていたと思いますよ。確かに「聖訓を奉じ」と言えば、当然普通は「天皇陛下の御言葉」と思いますから、配属将校も何も言えませんよ。

先ず冒頭に以上、矢野先生との直接の対話を持ち出され、続いて追憶のお話となった。

聞き手　先生は昭和六年（一九三一）高等商業部のご卒業ですが、当時の学院の様子をお聞かせくださいますか？

平林　話をすると長くなりますが、それより先に、私は大正十二年（一九二三）に、学院の中学部に入りました。（注・当時の中学部長は水蘆幾次郎先生）中学部には無試験で入りました。

小学校は五反田にあり、クラス担任の先生に何か不名誉なことがあったらしく、その名誉回復の為か、

私を府立一中〈注・現在の都立日比谷高校の前身で当時は小学校から優秀な受験生が集まった。〉に進学させようとしました。しかし、受験勉強など全くしていません。しかし、先生は駑馬に鞭を打つように督励しましたが、所詮叶わぬ夢でした。

すっかり、落胆しているところに、丁度私の兄が学院の中学部を卒業したところで、「僕が頼んできてあげるよ。学院に入れよ」と、私を同伴、中学部事務所に出向きました。兄が「この子は良く勉強が出来ますよ。中学部には無試験入学の制度があるでしょう。入学させてください」と頼み込んでいましたが、教務の先生が「推薦入学は気の毒だが昨日決めてしまった」と言われました。しかし兄が執拗に「先生お願いしますよ、ここに通信簿も持ってきていますよ」と頼み込んでくれました。ようやく先生方が相談されたのか、「よろしい入学を認めよう」ということになり、救われました。

今でも鮮明に覚えていますよ、それは綺麗なキャンパスで、中学部校舎の前庭は一面の芝生、要所にはつつじが咲き乱れ、外国人住宅に住む婦人が、長いスカートを身に付けて、散歩したりしていました。そんなこともあり、学院の中学部に入りました。

〈注・この年に関東大震災起こる〉しかし、中学部でも、上級生になると軍事教練もありました。ですが、学院に来る配属将校は、噂では奥さんが「カトリック教徒」だとかいう人もあり、軍当局も明治学院にはそれなりの配慮をしていたのかも知れません。その様な具合で軍事教練ものんびりやって、最上級生となりました。

聞き手　石橋先生についてはいかがですか？

平林　昭和二年（一九二七）のことですが、翌年に高等学部商業科が独立して、高等商業部となるという話がありました。当時の商業科主任の石橋先生が中学部に来て、「公民」の授業をする機会を捕えて、「是非高等商業部に入れ」と私達を勧誘しました。私は何人かのクラスメートと共に、翌年に高等部の第一期生として入学しました。無試験推薦入学でした。第一期生というので、それぞれ仲間も意気盛んでした。

ところで、卒業する年の昭和六年（一九三一）の産業経済界は、ご承知のように、大不況で、卒業までに就職が決まったのは、僅かに三―四名に過ぎませんでした。（注・高商部卒業生は一三七名）大変な時代でした。一方、昭和一桁の時代は明治学院も発展、膨張する時期で色々な先生方がおられました。鷲山第三郎先生（注・明治二十六年生まれ。和歌山県出身。明治学院の神学部を大正八年に卒業。高商部教授から川村女子短大教授。専門はキリスト教学。すでに故人）、齊藤茂夫先生（注・明治三十二年生まれ。東京商科大学卒。専門学校当時は経済科主任教授。専門は経済学）。特に齊藤先生は、ご専門の経済学の外に音楽に造詣が深いし、短歌も詠まれる。お二方などは、私にとって文字通りの恩人です。楽しい学生生活でしたね。

卒業後暫くして、クラス会がありました。多少アルコールが入っていたのでしょう。幹事役の荻多君がいきなり、立ち上がり「祝祷をやるから、みんな頭を下げろ」と大声をだしました。そして、一段と声を大きくして「願わくば主イエス・キリストの恵み、神の御愛、聖霊の親しき交り、汝等全ての者と共にあらんことを。」私は驚いて、「荻多君、教会に行って覚えたのかい」と声を掛けたら、彼曰く「学院の特別集会で覚えたのさ」と言い放ったのを覚えています。信者でもすぐ覚えないのに、卒業して何年かたっても同級生が覚えているのは、学院の生活が自然と身に付いていたのだと思います。

さて、石橋先生は、高等学部商業科時代から、科の拡張を考えておられていたようです。念願の独立を果して、自ら高等商業部の部長に就任されました。私が卒業した後には、夜間部も創設されるなど、先生は内容の充実に務められました。その一面、自らの地位と名声を高めようとする向上心と実行力の強い方でした。

例えば、同窓会問題です。どうも従前の明治学院同窓会は気勢が上らない。高商部同窓会の独立を考えられました。まず在学中から、当時の金で年間五円の同窓会費を独自に集め、三年間計十五円で終身会員とすることを実行されました。

それに先立ち、名簿をしっかり押さえ、集めた金は運営資金として、ご自分が会長となって管理されていました。高商部在学生から異論が出なかったのは、就職などで親切だったからということにもありました。

しかし、第一回の卒業生が出た昭和六年（一九三一）から十年も経過すると、昔の同窓生が石橋先生を批判して、「学院同窓会と合同するように」と強く主張して運動するようになりました。この高商部同窓会は、本来の同窓会の中で「コブ」のようになっていました。ようやく、従前の同窓会が高商部同窓会と、同額の基金を集めて合同したことがありました。学院同窓会は資金難でした。「会報」を刊行するといっても、実際は会長の一色帋児氏（注・明治学院第二代同窓会長として、昭和二年から二十年まで務められた。財界人）がポケット・マネーを出されたと聞いています。

ところで、石橋先生は、官立山口高等商業学校（注・現在の国立山口大学経済学部の前身）から京都帝国大学法科大学政治経済学科選科を卒業された方です。明治学院にとっての存在は、功罪相半ばすると思います。罪というのは適切な表現ではないのですが。

聞き手　矢野貫城先生院長就任の経緯についてはどうでしたか？

平林　さて、同窓会問題が決着する前、すなわち昭和十年に、学院第三代総理の田川大吉郎先生（注・当時、院長を総理と称した）が辞任してホキエ先生を学院長事務取扱としてお迎えしました。（当時の高等学部長は中山昌樹先生で）ホキエ先生はオランダ改革派教会の牧師で、後に長崎の東山学院の院長に迎えられた人です。日本語が堪能で、漢字も読めるし、さらには勅語もそのまま読めるという先生でした。

しかし「外国人が院長ではどうも適切ではない」という話がありました。もちろん、私が直接に耳にしたわけではありません。文部省がそのような意向だということが、学内の噂となりました。昭和十三年頃（一九三八）のことです。やむなく、当時の学院理事会はホキエ先生にお辞めいただく事になりました。

さて、後任をどなたにお願いするか論議がありました。その結果、昭和十四年（一九三九）に第四代院長に矢野貫城先生がご就任になられました。ところで、ご就任になってしばらくして、何かの機会に、先生のご自宅をお訪ねする時があり、雑談したことがありました。

先生は、文部省に勤務されているときから、富士見町教会の長老でした。富士見町教会（注・千代田区富士見町一―十―一）は日本におけるキリスト教の教会としては、有力な存在でした。植村先生も、かつて長い間、同教会の牧師であられた。当時から、各界の有力者が沢山集まっていました。

矢野先生は山口高商のご出身で、コロンビア大学に学ばれ、当時は官立彦根高商の校長をされていました。（注・現在の国立滋賀大学経済学部の前身。）私はご自宅で、「先生のお国は高知県でしょう。山本忠興先生も高知県ですね」と申し上げると、奥様が「山本さんは私どもの親戚ですが、あちらは名門、私どもは貧乏農家です」と言われました。（注・矢野家はかつては、土佐山内家の士族）ところで、いま名前

が出ました山本忠興先生は、ご存じのごとく、早稲田大学の出身で、同大学の理工学部長を務められた方です。この先生は、資性温厚しっかりとしたキリスト者で、特に日曜学校の熱心な推進者でした。この山本先生が、植村門下で、富士見町教会の万年長老ともいうべき方でした。矢野先生は、山本先生から明治学院の院長就任を紹介され強い推薦を受けられ、就任をお引き受けなされたという事を、直接お聞きしたことがあります。ところが、肝心な学院側は、三学部長始め、一部の先生は必ずしも歓迎しませんでした。考えてみれば、石橋先生にとっては、自ら山口高商在学中には、矢野先生の教えを受けたと云う事もあり、どうもご自分の上に院長として来られるのは賛成ではなかったと思いますが、如何でしょうか。

いずれにしても、正式に院長にご就任されました矢野先生は、元々官僚出身ですから、院長になられると、先ず三学部長から辞表の提出を求めて、改めて再任の辞令を交付するという方法をとられました。先生にとっては当然のことですが、あとが問題です。中山高等学部長と都留中学部長の辞表は返して留任としたのですが、石橋高商部長の辞表は受理したままで、矢野院長が高商部長兼任としたのです。この人事で首脳部は紛糾しました。石橋先生は、翌年九月に学院を去られました。

矢野さんは官僚的だと非難される。確かに、その院長就任のスタートのときから、一致して新院長を強く支持する体制はなかったと云えましょう。さらに、先生は祝祭日には勲章を佩用して、宮中に記帳に出掛けられるのが通常でした。

さて、明治学院の創立記念日は十一月三日です。当時は明治節です。先生は十一月一日に繰り上げましょうと言われました。十一月三日というのは当時国民が尊敬していた、明治天皇の誕生日です。様々な行事がこの日に集中していました。私としては、三日が一日となっても大きな問題ではないと思っていました。

これがまた、古い先生方には面白くない。一事が万事こういうことになる。

私は自己弁護するわけではありませんが、矢野先生を院長にお迎えしたことは、神の摂理であったと思います。私も一同窓生ですが、先生に対して感情的に疎むという気持ちは全くありません。紙本さん（注・紙本義雄氏）が、矢野先生の退任は、飼い犬に手を噛まれたようだと書かれたことも承知しております（注・『明治学院同窓会会報　記念樹』四十八号）。私としては、この記事はどのような意味で書かれたのかわかりませんが、考え方によって異なると思います。飼い犬というのは、事務本部のしかるべき地位の人か、また教員であったのかもわかりません。あの時、大内先生（注・大内三郎高等学部教授。昭和十三年辞任。既にご他界）が辞められたことが矢野先生と意見が合わなかったのか、よくわかりません。

紙本　あの文章を書いたのは、私です。私どもの仲間内では、矢野先生に反対して退任を画したのは、当時の総主事ただ一人と理解しています。

平林　成程、わかりました。ところで、矢野先生を、当時の最高責任者として非難糾弾するのと、個人としてどうしても性格や体質が合わないと言って嫌うことは、区別して別の次元で考えないといけないと思います。私は、再度申し上げますが、あの時代の明治学院の院長としては、正に適任であったし、神の摂理が導いたものと思っています。また個人的にも、そんなひねくれた官僚主義者とも思いません。そうですね、性格や体質が合わなかったのか、戦後も感情的な対立があったとも云えましょう。杉本君（注・当時の総主事、杉本民三郎氏）や英先生（注・英義雄教授）たちですか。その英先生を絶えず背後から焚き付け刺激していたのは、園部さん（注・園部不二夫教授）でしょう。この際ですから、率直に申し上げますが、それぞれ変ったキリスト教学ご専門の学者です。例えば、英先生などは、思い込むと、「矢野はけ

しからん、足代（注・当時の配属将校の陸軍大佐）はしたたかだ」と罵る。

或る教授会のときでした。当の足代大佐は、暫くすると口をあけて大きな鼾をかいて寝てしまわれました。英先生は、「ああやって、狸寝入りして油断させて、何を話しているか耳をすまして聞いているんだ」と言われる。私はたまりかねて「足代大佐は、先生と同郷（共に三重県出身）ではありませんか」と半ば諫めても一向に受け付けようとしない。私としては、教練というのは体を使うし、学生でも疲れる、本当に足代大佐は疲れて寝てしまわれたと思います。しかし思い込むと、一事が万事でこういう事になる。園部さんも思い込むとなかなか、考え方を改めようとはされない。いずれにしても、当時のホキエ先生を「明治学院の院長として適切ではない」と言い出したのは文部省でしょう。あの当時の文部省は軍の出先機関と同じでしたから、交代は適切だったと思います。

聞き手　御真影問題についてはいかがですか？

平林　それから、話は前後しますが、御真影問題について、お話ししましょう。この御真影下付の問題は、昭和一桁の時代からあったのですが、その都度「奉安する場所がないので礼を失する」という対応で先送りしていたのです。しかし、全国の国公立の学校がすべてお受けしているのに、何故明治学院のみ先送りするのか、即答をせまられたので止むなくお受けしたのです。

ホキエ先生と一緒に文部省に御真影をいただきに出向かれる加藤さん（注・加藤七郎教授）にお会いして、「何処に置かれるのですか」と聞きましたら、「御真影を講堂の金庫の中にでも置いておけばいいんですよ」と言われました（注・チャペルを当時講堂と呼んでいた）。私は少なからず驚いて、「大丈夫なの」

と聞き直しました。加藤さんは「なあに相手がそれでよいと言っているのですから構いませんよ」とのことでした。講堂の中の金庫というので、私は心配しましたが、加藤さんはそのように言われる。私は、また小学校では校庭に社のような建物を建て御真影を奉安していますので、明治学院も正門の脇に社を建て、通学してくる学生がその前を通る時には敬礼でもしないといけないのかと思っていました。

そうそう、余談ですが、今日、皆さんが目黒駅からバスに乗られて清水町バス停で下車されたでしょう。バス停からすぐ左に入った処にお稲荷さんがあったでしょう。あのお稲荷さんの社は、すぐ近くの鷹番小学校の奉安殿ですよ。それにしても、御真影問題は、あれで片付いたので安心しました。これも考えてみれば、明治学院という学校は歴史の古い学校ということで、官辺も一目おいていたのではないかと思われてなりません。

紙本　私が中学部に入った昭和十三年（一九三八）の十月に問題の御真影下付があったのですが、生徒の方は全く知りませんでしたし、何の儀式もありませんでした。

平林　そうですか。確かに文部省に御真影下付のため出掛けられたのは、ホキエ先生と加藤先生のお二方です。ところが文部省当局は、ホキエ先生に御真影を渡したくないという風で、加藤先生が受け取られたという報告でした。加藤先生は、親代々のキリスト者で、信仰の堅い人でした。何といっても、東京帝国大学の出身ですから、文部官僚にもそれなりの人脈もあり、知人友人が沢山おられたと思います。あのときの両先生のコンビは、明治学院にとっては最高でした。よく当局の追及がなかったと思います。

それから、再度矢野先生のことですが、先生は、講堂で行う様々な儀式のときには、勲章をつけておられました。ところが、これがまた一部の先生方には面白くないのです。「何であんなものをつけてくるん

だ」と言われる。しかし、或るとき、先生は私にこう言われましたよ。「私がこれを付けていないと、勲章を付けた軍人が私の上席に必ず坐りますよ。」先生は当時確かに勲二等をお持ちでした。「配属将校は、略章を見ただけで、私の上席には坐りませんよ。」私は当時、「成程なあ」と思いました。学校の最高管理者は常時上席を占めているものかと。

紙本　これは、学院の『百年史』にも出てくることですが私の同窓でラグビーの選手でしたが、たまたま雑談したおり、学徒出陣の話になりました。あの明治神宮外苑雨中壮行会（注・昭和十八年（一九四三）十月二十一日）の時、行進に移り、大学の行進が終わり、高等専門学校の行進にはいったとき、最初は第一高等学校等、それらに続き明治学院であったということです。これも考えてみれば、矢野先生の実力とともに、文部省もこの学校を抑えておけばという考えがあったかも知れません。

平林　そんなこともありましたか。

今井　最近、戦後五十年ということもあってか、明治学院も自らの戦争責任を問う、『心に刻む』というパンフレットが出ました。その中心の文書は、平成七年（一九九五）六月五日発行の「明治学院の自己検証」という文書です。今頃になって、当時の異常な状況を体験しない先生方が、あの時代を精一杯を尽くして学院を守った努力を評価しないで、一方的に検証されるのはいかがと思いますが、如何でしょうか。まだご関係者も居られる中で、神主姿の関根先生を登場させていますが、私にはどのような経緯で神官姿で写真を撮られたのか、写真だけでは理解出来ないのですが、如何ですか？

平林　関根さん（注・関根文之助。大正元年生まれ。中学部教員で国語を担当後、日本キリスト教教育同盟主事から東洋英和短大教授）と云う人は、それほどの政治力を持った人ではありません。言葉は悪いが、

人柄は単純で自己顕示欲が強い。外側からみれば温厚な人柄ですが、内側は顕示欲が旺盛と云う人でした。問題の神主姿の写真も、あの時代のちょっとした出来事でした。関根さんは国学院の卒業でしたから。あの学校は神道主義を学校の教育理念に掲げている事はご承知のとおりです。丁度『日本的キリスト教』という本が出てくると、自分の出番が来たと張り切ったのです。元々、救世軍の出身ですから、喋ることと書くことが大好きと言うこともあり、筆も立ち、『興亜讃美歌』なるものをつくりました。今その詞を読んでごらんなさい。とても、通用するものではありませんよ。明治学院を軍国主義右翼にしようなどと、本格的に活動したなどと云うことは全くありません。しかし、なにしろ書く事と喋る事が人一倍好きですから、パンフレットでも何でも沢山残っているでしょう。

ところで、ハッキリ申し上げますが、矢野先生は全学運営の最高責任者です。学院を守らなければならないし潰すことは出来ないという事が、常に頭の中の重要な部分を占めていたと思います。自らは卒業生でもないし、一部の同窓の先生方の批判の矢面に立たされた。当時キリスト教主義の学校を潰そうとすれば、簡単でした。学院の運営に何の責任も役割もない若い関根さんと、矢野先生の立場ではその人物・力量は勿論、置かれた立場には格段の差があった事を知らなければ駄目です。ところで、どうも大学の若い先生方は文献主義で、書いたものが残っていると、それが客観性を持った最大の資料だと評価してしまうのではありませんか。しかし、文献に出ていない日常的な事柄、当時それを書いた人の社会的な環境、そして立場などをよく見ないと、その文献がどれだけの引用価値があるのか解らないのです。充分観察して、判断しないと駄目です。ある一片の文書を取り出して、それが全てであるかの様な印象を読む人に与えることは、厳に慎むべきでしょう。

そういえば、あの文書に、富田先生（注・富田満。明治十六年生まれ、昭和三十六年没。明治学院卒。戦争中の日本キリスト教団統理。戦後の昭和二十二年から一年間、学院長事務取扱を務められた）のことが記されています。

あの先生は、確か尾張名古屋のご出身で、いわゆる商人的感覚もあり、その時の周囲の状況を見て巧みに変身して、上手に物事を纏めて行く方でした。ある会合で、靖国神社前で頭を下げる事が問題となったとき、開口一番、「頭を下げても一向に構わないではないか。元々日本人は、あの中に本当に神様がいるなどと考えている人なんかいませんよ」と片づける。それから、思い出しますと、或るとき、キリスト教信者の大会がありました。私も出席したのですが、その席で、ある牧師さんが立ち上がり、「我々はアメリカから、独立しなければならない。今後は一切援助は断ろう」と大声で発言されました。植村先生もこの点ではご苦労なされた。ところが、富田先生は、「金をくれる、援助してくれるというのに何も断ることはありませんよ」とおっしゃるのです。全く先生は現実主義者というか実利主義者ともいうべき人でした。戦争中は、日本キリスト教団統理という最高責任者でした。明治学院理事というのは、先生にとっては、第二第三の肩書きでした。その先生が靖国神社や伊勢神宮に参拝された事を非難し、学院の戦争責任を云々するのは如何がなものでしょうか。学校と教会は本質的に異なります。学校は教育の場であり教会ではありません。日本キリスト教団統理としての戦争責任を、明治学院という学校が負うのでしょうか。お門違い、次元が異なります。

紙本　この問題は古く、明治二十年代にも大きな論争がありました。日本の国体とキリスト教の教義は相容れないのではないか、国家とキリスト教の関係です。

平林　そのことを考えると大問題ですが、明治以来、日本におけるプロテスタントは、国家の政策が左右に揺れる中にあって、教育を含めて国家社会の発展のため大きく貢献してきました。その事を、今日、誰も否定する人はいないでしょう。明治学院はキリスト教の信者だけが集まってくる学校ではありません。仏教徒の家庭の子弟が、英語を本格的に勉強したいと思って入ってくる。そういう人は戦前でも沢山いたでしょう。

どうも神学者の先生は、その信仰のご熱心のあまり、学校と教会を間違えている人が多いので困ります。確かに、学院に神学部があった頃は、その学部の目的は牧師を養成することにありましたし、教会と密接な関係があったのは当然です。しかし、神学部が確か昭和五年（一九三〇）に廃止されました。それ以後は、法人としての明治学院と教会とは、有機的な関係はなくなっているのです。神学部が廃止になったのは、学生が少なくて採算が全く取れなくなったからです。これはちょっと言いにくいのですが、神学部出身者のうちには、牧師になれないならば英語の先生にでもなろうかという人が出てきたのです。この神学部廃止のときの学院長は田川大吉郎先生です。当時、学院内部でも神学部を邪魔にする先生も出てくる。一方では、東京神学社も植村先生が亡くなると、経済的に行き詰まったのです。この神学部廃止問題に触れると、どうしても、田川先生のことを申し上げなければいけないと思います。

田川大吉郎（注・明治二年生まれ。長崎県出身。元東京市助役。大正十一年（一九二二）に学院理事長総理事務取扱となり、同十四年（一九二五）、正式に第三代総理に就任。昭和十年（一九三五）にホキエ先生に譲られるまで務められた。昭和九年から二年間高等学部長を兼務された）先生も、富士見町教会の有力な長老でした。高い見識を持ち、ご自分の意見をしっかり持たれた方でした。田川先生が神学部を邪

魔にしたといわれていますが、どうも同窓の先生は、田川先生に対して必ずしも全幅の信頼を寄せている様子は見られませんでした。

紙本　話を挟みますが、丁度昭和十年頃、学院が経済的にも苦しく、白金から目黒競馬場跡に移転することが、本格的に進められた事があったということです。しかし、白金の地を懐かしむ同窓生が反対して、学内での賛成反対相半ばして混乱したということですが如何でしたか？

平林　確かにそのような話はありました。目黒競馬場跡（注・現在の目黒区下目黒四丁目地区）には、頌栄女学院の創立者岡見家の土地もかなりあり、同家の子弟の多くは学院に学んだはずで、入手し易かったのではありませんか。田川先生は、「学院の発展の第一歩は一万坪の土地だ」といわれる。先生にはそれなりの目算はあったでしょう。しかし、先生に対して面白くない同窓生は反対運動をやる。その運動の一つには、「先生が学院の仕事に専念していない」という事があげられていました。

しかし、私をして云わしめれば、田川先生は学院から一銭の報酬も受け取られてはいません。生活のために他の仕事を持ったのではなく、政界への関心が強かったのです。結局、移転問題は中断し、先生は昭和十年（一九三五）に院長を辞められてしまいました。

紙本　それはさておき、若林先生のご印象は如何ですか？

平林　若林先生（明治三十七年（一九〇四）生まれ。昭和五十二年死没。大学第三代学長）は、長年にわたり社会科の充実について実に御熱心でした。その人物像などは皆さんの方がご存じでしょう。先生が一生懸命に内容の充実に御努力されたことの結果は、今日の社会学部は明治学院の中心的存在となっていることで実を結んでいるではないですか。

紙本　ところで先生は同窓会副会長はいつ辞められましたか？

平林　私は長年、同窓会の役員として、会の発展に及ばずながら努力してきました。しかし、昭和五十七年（一九八二）に岡村さん（注・岡村長徳氏。昭和七年高商部卒。同窓会第七代会長）が辞められるときに、一緒に辞めました。丁度岡村さんが会長当時に「明治学院同窓会を解体して、各学部ごとの同窓会にしよう」という話が出ました。

しかし、私は極力反対しました。かつて、昭和一桁の時代、石橋先生の高等商業部の同窓会が独立して、問題が生じたことは先程お話しした通りです。先輩の皆さん方が、ご苦労の上ようやく合併した事を思い出します。独立の道は孤立の道となります。そういう反対論を出したいきさつもあり、退いたのです。どうですか。今はそのような問題はないでしょうか？

紙本　いや東村山高校の方が独立したいという話はあります。

平林　そうですか、余り大きくなったので、そのような声が出てくるのかも知れませんね。

紙本　ところで、私の中学部時代の学校長は、漆山清二先生（昭和十六年から十九年まで中学部長を務められた）ですが、どのような先生でしたか？

平林　漆山先生は東大出の農学士で、公立私立の教諭を広く勤めた人です。戦時下人材を要する時に、三年位でやめられたのは残念でした。

紙本　さて都留先生はどの様な先生でしたか？

平林　都留先生（注・明治十七年（一八八四）生まれ。学院神学部卒。第六代学院長。そして昭和二十五年から四年間同窓会長を務められた）は確か大分県のご出身です。さあ、どの様な方と申し上げてよいか。

先ず先生はいかにも九州人らしい、芯の強い、御自分で信じたことは押し通すという信念の持ち主でした。しかし、晩年は頑固になられた。若いころはリベラルで、本当に耳を傾けざるを得ないという思想をお持ちでした。「明治学院は国家に枢要人材は養成しません。神の国に寄与する人を養成する」と言われる。ところで、私の中学部卒業の時の部長は衛藤幹太郎先生でした。昭和七年（一九三一）に都留先生が中学部長になられたので、直接授業は受けておりません。

聞き手　都留先生は、海外から、特に朝鮮・台湾からの留学生には格段に親切に指導されたと言われていますが、いかがでしたか？

平林　そうですね、先生の処にお邪魔すると、『ジャパンタイムス』や外国の雑誌を常に読まれていたご様子で、国際的視野に立って物事を考えておられたと思います。しかし、少々リベラルで、当時の日本キリスト教会から外された様なお立場でした。特別の意見を持ち、自説を守るという事もあったからでしょう。しかし、ミッション・ボードとは折合の良い先生でした。

それから、矢野先生が学院長在任中、中山先生（注・中山昌樹氏。昭和十年から十四年まで高等学部長）がおられました。この先生は、学校行事のことなど細かい事は一切石橋先生に押しつけて、「石橋さんは事務がお好きだなあ、高等学部の方も一緒に頼みますよ」と言われて、ご自分は自分の勉強をなされる。月給が少ないころは、講演を頼まれると何処にでも出掛けられる。いきおい「本日の講義は休講」ということになりました。しかし、学院の誇りとする学者でした。

話を戻しますが、都留先生は申し上げた様なご性格ですから、結局は矢野先生と合わず、中学部長を辞められてしまいました。その後、フェリス女学院長に迎えられました。それから笹尾先生（笹尾粂太郎氏。

昭和二年から九年まで高等学部長）も学院を去られましたが、先生は戦後に横浜共立学園校長となられました。

それから、ご存じのように都留先生は、戦後また明治学院に復帰され、昭和三十二年（一九五七）に第六代学院長になられました。そして武藤先生に引き継がれる迄、五年間にわたって務められました。その頃は頑固さも一段と強くなられていました。教職員組合との会議でメモを取ろうとすると、大声で「駄目です。メモは駄目です」と言われる。ところで、ニューヨークで長年牧師をされて、日本人をよくお世話されていた方がおられました。その牧師さんが戦後帰国されて、暫くして死没されました。私は、都留先生のご子息もその方にお世話になった事もあるので、「明治学院として花輪でも贈りたいと思いますが、如何いたしましょうか？」とお尋ねしましたところ、言下に「それは虚礼だ」と断じて終わり。なるほど考えてみれば、たしかに虚礼かもしれませんね。とにかく先生は、自分の信念で強い信仰を持たれ、その生涯を貫き通された人であったと思います。残されたご子息方も、それぞれに個性をお持ちになり、自らの道を歩かれています。

聞き手　さて、村田先生の御印象は如何ですか？

平林　村田先生（注・明治二十年（一八八七）生まれ。学院第五代院長として、昭和二十三年から九年間務められた。大学初代学長）の印象は様々ですよ。私は敬服しているような一面、肌が合わないということもありました。しかし、都留先生と共に本当に男らしい人物でしたね。思い出しますと、あるとき、御殿場の東山荘で会議があり、私も出席しました。たまたまお風呂で一緒になりました。先生は私の頭を見て「平林君、随分髪が伸びているなあ。切ってしまえ。切ってしまえ」と言われる。ご自分は風呂に入る

前にパァーッと冷水を一杯二杯と体に浴びてから入浴される。なんとも男らしいと思いましたね。それから説教もお上手でした。美辞麗句を所々に入れて余韻上々、なかなか「芸術的」でした。

村田先生が学長のとき、私は庶務課長でした。私が先生宛の手紙を持参すると、封を切るのに一切鋏を使われない。指先で封を切られる。時には中身が床に落ちてしまう事があります。矢野先生は丁寧に鋏で切って中身が痛まないようにされる。村田先生は指先で縦に切られる事が多い、気短かというよりも、そんな事はどうでもよいということであったかもしれません。或るとき案件を持って、先生に、「この件は如何なされますか?」と伺いますと、「そんな事は君が決めてくることだ、若林君（注・庶務課長として私の前任者）はそうしてたぞ。『この件はこういたします』と庶務課長が決めればいいんだ。」とおっしゃるのです。私は、「ハイわかりました。以後その様にいたします」ということで引き下がりました。面倒な事は全て下の者にやらせる。ご自分はというと自分の勉強をされている。机の上を見ると新刊の神学書が幾冊も積んであります。学長としての指示などは一切しません。会議があると、すぐ「庶務課長、何か甘いものはないか。早く甘いものを出さないか」と大声で言われる。会議の予算などは一切お構いなしですよ。お坊ちゃんというか、お代官のような一面がありました。

今井　確か村田先生が学院長にご就任準備のため、学院の近くに引越されたことがありました。当時私は都留先生のご息子の久夫君と親しかった事もあって、頼まれてその引越しを手伝ったことがありました。驚いたのは家具類はともかく、大量の書籍、それも原書でした。大変な学者だと思いました。

平林　言われる通り、大変な読書家です。加えて当たり構わず本を買う。奥様は、この本代にご苦労されたと思います。たしか、学院の近くに、国文学者三上参次の家を明治学院が買い取って、村田先生にお住

み願いました。若林先生は、その後も常に村田先生を立てられ、それはよく尽くされました。若林先生は、案件を「こういたしますから、よろしいでしょうか？」と伺うと、「先生、うまくやって下さい。頼みます。頼みます」と言われる。一度軽い脳出血で倒れたことがあり、回復されてからは、朝十時頃学長室におみえになる。昼にはご自宅で昼食を摂られる。そして昼寝をされて、二時頃また登校されるという日課となりました。会議はその昼寝に合わせて行うという状態になりました。我儘といえばそうかもしれません。

余程有能な部下がいないと、組織は機能しませんよ。あるときの会議で、「教職員の給与を上げてほしい」と村田先生に申し入れたことがありました。村田先生は何も言われない。突然、高橋文学部長（注・高橋源次氏。大学第二代学長）が回答を求めて大声を出して立ち上がられる。どうなる事かと心配しましたが、そこは高橋先生も思慮もあり、頭を下げて着席されました。両先生とも個性がお強い熱血漢でした。

中富　これは、村田先生から伺ったのですが、「明治学院の校歌は適切ではない」と聞きましたが、如何ですか？

平林　それは、確かにその通りです。あの歌詞には「信仰」という言葉がない。宗教的な憧れがないと思いますよ。村田先生にそういったのは「賀川君だ」といわれました。「この校歌には神もキリストも出てこないな。明治学院の校歌らしくないな」とのことでした。

それから、若林先生を中心にして、教職員の給与値上げの会議の際、齊藤先生がたしか、五人のお嬢さんがおられた事があってか、「村田先生、娘一人持つと蔵が一つ空になると言うではありませんか」と言われました。村田先生は、「僕にも三人いるが、一向に空にならないな」とおっしゃられ、齊藤先生はあっけにとられ、後で「全く同情がないんだから」とつぶやいた。村田先生の奥様はご苦労されたと思います。

ご自分はおしゃれをして、常に髪を整えて、着物に袴姿で現れる。いわゆる高踏的な処もありましたが、純粋な人でした。

なんといっても、矢野、都留そして村田の三先生は、日本のキリスト教の興隆期に青年時代を送られて、以後、その信念を貫き通されたのは、幸運だったと思います。

聞き手　さて武藤先生は如何ですか？

平林　武藤先生（注・武藤富男氏。学院第七代学院長を昭和三十七年から十二年間務められた。東大出身。元満州国国務院法制局参事官）のお話の前に、ちょっと松本さん（注・松本亨氏。昭和十年高等学部英文科卒。元学院総主事）のことに触れます。

さて、武藤先生の前の院長は都留先生です。都留先生は、松本さんに全幅の信頼をおかれていました。松本兄弟は学院の出身者で、亨さんは一段と英語も出来る先生お好みの人でした。よく勉強もされました。しかし父親が頼りなく、母親が狂信的ともいえるキリスト教の信者でした。

松本さんはミッション・ボードの信頼が厚く、米国から学院に呼んだのです。村田先生がご退任後も引き続いて都留先生の下でも在任していました。松本さんは特別な才能の持ち主で、当時は学院も建物は戦災にあわなかったとはいえ、校舎は荒廃していました。その校舎を建て直すという事では極めて大胆でした。ミッションからの金も自由に引き出していました。不幸なことですが、奥さんとは不仲で、家庭問題で周辺から批判が厳しくなり、結果的には、嫌気がさして学院を辞められてしまいました。惜しい事をしたと思います。さて、武藤先生ですが、昭和三十七年（一九六二）に都留先生の後を受けて、学院第七代院長に就任されました。いち早く校庭を歩かれて、校舎や施設を点検されました。ご案内した私に向って

「平林さん、松本と云う人は偉い人ですな。再建計画は立派ですね」と言われた事を覚えています。

武藤先生も、ちょっとあくの強い人でありましたが、これも明治学院の歴史を恩寵の歴史としてみれば、あの時武藤先生を院長としてお迎えしたという事は、神の摂理のしからしめる処であったと云えましょう。それは、性格の強いお方ですから、批判すれば限がありませんよ。何といっても、武藤先生は苦学力行そのものの人でした。小学校時代から、子守などをして、また住み込みの店員などをして、歩きながら本を読み勉強した方です。そして夜学で中学を卒業されました。そうして、頑張って、第一高等学校に入ったのです。

武藤先生のお顔は本当にご苦労されたお顔です。ご自分でも云われています。一高に入って寮生活をしている時、「我々の仲間で一番不器量なのはだれだ」といったら「武藤だ、武藤だ」と声が上がったという事ですよ。先生はかつて、こう云われていました。「僕は働きに働いて、栄養を摂る暇がなかったんだ」と。そして、東大に進まれ、卒業して内務省に入られる。しかし、当時は満州国創建の頃で、満州へ満州へと草木もなびくで、一旗あげようと満州国に渡る人も多かったのです。そのような時代の中、先生は満州国の官僚に転じられる。上司は岸さん（注・岸信介元総理）だったと思います。先生は同地で文化の行政を担当されていました。しかし、いよいよ敗戦となると、いち早く内地に引き揚げてしまわれました。明治学院歴代の院長の中では、その進退の鮮やかな事では、武藤先生の右に出る人はいませんよ。全く無から有を生み出すような方でした。たしかに、先生は、寄付金をお集めになる事はお上手で、全く一筋縄ではいかない人々も説得してしまう実行力がありました。それは、実力でしょう。ちょっと、一昔前の日本の社会では、東大出身者が要所、要所を固めていました。先生は人間関係が豊富で、学院長になられて

から、その人脈を存分に活用されたと云うべきでしょう。武藤先生は、北村徳太郎理事長（注・長崎県出身。戦後片山内閣の大蔵大臣、財界人）の支持があって、学院長に迎えられた方です。

武藤先生は、教文館の社長としても腕を振るわれ、新聞を活用して、ジャーナリズムにもその活動の場を拡げておられました。教文館ビルは、たしかに、一階に銀行が入ったり、ネオンの広告を取り付けたりして、昔の面影はなくなっていますが、先生は、金になることは、本質さえ誤らなければ、どしどし取り入れたのです。もし批判があるとすれば、ご自分が何でもお出来になられるから、下の者にやらせない。何でも自分でやられる。数字にもお詳しいし、文書もお上手。書を書かれても立派な字を書かれる。

ところで、先生は「本部にどうも人材がいない。手薄だ。人件費も少ない」と言われましたが、都留先生のように改革はされない。手薄の分は何でもご自分でやられる。当時は、明治学院の最高責任者だけではなく、様々な社会福祉施設団体に関係されていました。人の出入りも多かった「君はあそこに寄付を貰いに行け。紹介状を書いてやるよ」という具合でした。性格の強い方ですが、実行力のある一流の人物ですね。

こんな事を口にしてよいかはわかりませんが、あるときチャペルで、学生相手の講演のときでしたが、「官僚なんて何でもない。金をやり、飲ませて、女を世話すればコロリと変わりますよ」とおっしゃるんです。明治学院歴代の院長で、学生相手にこんな発言をした院長は初めてでしょう。驚きますよ。

ある時、「平林先生、人間の頭はいくら酷使しても大丈夫ですよ。酷使すればするほど頭は良くなりますよ。」とおっしゃるのです。ですが、お聞きする処、先生は病床につかれて一段と老衰されたというではありませんか。やはり、人間は、身体でも頭でも、余り酷使するのはよくありませんよ。　以上

補足

今井　洋

なお、平林先生は、「明治学院と私」というテーマで、明治学院大学新聞の昭和三十六年（一九六一）十一月十五日創刊百五十号記念特集号に執筆されている。そのなかで、先生は自らの生い立ちの生活環境に加えて、当時学院で教えを受けた先生方の思い出を書かれている。

幸いなことに、平成五年十月二十九日に『明治学院大学学生新聞会の時代』という新聞集が、明治学院大学学生新聞保存版刊行委員会―委員長山下剛正氏の手により刊行されている。残念ながら『明治學院學生新聞』の一号から四十三号までが欠号となっている。

しかしこの刊行物により、私どもは手許で平林先生の書かれた文章を読むことが出来る。ここに、その一部を抜粋して、先生の回想を補足したいと思う。

先生は、『明治学院と私』というエッセイのサブタイトルに「思いでつきぬ母校」と記されている。

「私は明治学院に程近い三田豊岡町」に生まれた。それは慶応義塾の裏手に当たる。そのころ芝界隈の人たちは、学校といえば慶応と明治学院とが話題だったようだ。

私の亡父は明治二年生まれだったが、新聞は福沢さんの『時事新報』ばかり何十年も取っていたし、ヘボンさんの名前もなにかと口にしていた。私の家はその後猿町に移り、兄は頌栄小学校に入った。それは、高輪教会の長老である素封家岡見家の私立学校で、小学校から英語を教えていた。幼い私は、山吹鉄砲の球を作るため、頌栄の庭の山吹を採りに行った。

兄は、近所にいる同級生島崎楠雄さんの家に遊びに行って、お父さんがフランスから送ってくれたという西洋臭い絵本を見せてもらった。

兄は、それから、明治学院に入った。私は時々、学院に連れて行ってもらった。電車はもちろんなく、狭い静かな道を清正公の方に下りていくと、左手に門があった。門を入って坂を昇りつめると、正面に中学の校舎がそびえ、前は一面の広い芝生で、点々と赤と白のつつじが咲いていた。私は紺がすりの着物を着て、下駄をはいた小学生だったが、この丘の美しさには胸が踊った。ある夜は音楽会に連れて行ってもらった。礼拝堂に明るい灯がともり、童話のなかの挿絵のようだった。—中略—鷲山先生の旧約聖書の講義は実に面白かった。鐘にうらみは数々ござると歌にもあるが、大久保小使い(ママ)の鳴らす終業の鐘がうらめしいほどであった。黒板の端から端へ一本線を引く。その上に二三本の木を書くと、私たちの目の前にはヨセフと隊商とがエジプトに去り行く果てしない砂漠が展開するのだった。

—略—昭和六年三月、私は明治学院での八年間の生徒生活を終えて校門を去った。その時は、再びこの門を毎日出入りするようになるとは思わなかったが、十年の三月、石橋近三先生から電話で呼び出されて、四月から高等商業部に勤めるようになった。学院史上初めての夜学が開かれたのはこの年である。高等商業部第二部と称したが、その始業式の夜、石橋先生は「勤労青年への教育の機会均等」という言葉を強く叫ばれ、「夜間部を見たければ明治学院に行け、といわれるような、日本一優れた夜間部にしよう。この第二部は無休講だ。担当者が万一休講するときは必ず補講をする」と約束して実行された。—中略—

紀元二六〇〇年というのは昭和十五年だが、今の学生ホールあたりに大弓場が出来、加藤七郎先生が部長となって弓道場を作り、先生も意気軒昂と弓を引いていた。十八年の夏頃から勤労動員となり、空襲下

に諸方に出勤した。

加藤先生といえば、あの寒い寒い横浜造船所の寮に、師弟同行、苦労していたある晩、お宅からの急報で奥様急病とのこと。あたふたとお帰りになったが、程なくお亡くなりになった。思えば昔の話のようでもあり、昨日のようでもある。

私も中学入学の当初から数えれば、三十七年間も明治学院を見て来たことになる。発展といえば発展だが、志いよいよ高ければ高いだけ、諸事不如意な事は昔も今も変わりはない。ただ永遠に変わらぬ壮美なものの姿はいつの世にも見失うまいと念じるのである。

最後に平林先生は、一茶の句「美しや障子の穴の天の川」でこの思い出を結ばれている。

なお、この「平林先生訪問記」の記述は、テープに収められた約二時間半のなかから、その要旨をまとめたものである。その記述の責任は全て今井にある。さらに限られた方にこの文章を配布することとする。また、当時学内学会副会長、卒業生部会会長岩浪伊一氏に感想の一文をお書き頂いたので、合わせて本文に掲載する。

私の感想と希望

このテープに記録されているように、平林先生のお話は次々と流れるように展開しました。先生のご記憶はとても正確で、私たちの興味と関心をそそりました。お約束の時間は過ぎてしまいました。先生は、

この日の朝体調を崩されて、急いで近くの病院で点滴をされたということでした。私達が一斉に腰を上げようとすると、つまらなそうな表情をされ、「まだ話は終っておらん。まだよいではないか」と制止されました。また機会を見て参上したいと、後髪を引かれる思いで先生宅を辞去しました。

ところで、私は、先生のお宅を訪問して本当によかったと、いま実感いたしております。戦前から戦後と激動する時代を生き抜いてきた、明治学院のリーダー像、伝統を堅持して、方法の感覚を鋭敏にして、進路をきちんと見定めて、いばらず、いじけず、周りの人とうまく関係を保持して、本来の目的を達成しようと懸命に努力された母校明治学院歴代の指導者の生の人物像を、平林先生から直接お聞き出来たことは有り難いことでした。先生は、書かれた文字のみを通した限定的解釈や理解によらず、そこに生きて働く人間の光と影を同時に描きだして、論理明解に解き明かしてくださいました。この日先生のお話をお聞き出来た事は、私達にとっても神の摂理であったと思います。

人間は社会的な存在として生きています。その存在が脅かされる状況に立ち至ったとき、どのように生きるか。そこにこそ人間の真価が問われると言えるのではないでしょうか。その人の置かれた状況をその人がどのように受け止め、どの様に対処するのか。そこに自己の責務を自覚し、知恵と勇気が求められる。このような実践的リーダー像を伺うことができました。私は改めて、今日におけるエリートとは何か、社会の担い手とは何か、今私達はこれを求める時に立ち至っているのではないかと思いました。明治学院の将来を考える上で、私は貴重な宝物を手に入れたと満足しております。志を同じくする関係者各位の目に止めて頂きたく、これを文章化いたしました。この拙い企てが学院の明日への活力源のひとつになることを希望いたします。

以上

第二部の思い出

竹中治郎

（一）第二部のはじめ

明治学院大学第二部は、旧高商部第二部と専門学校第二部が、大学へと昇格したものである。高商部第二部が開設されたのは、昭和九年（一九三四年）四月である。私が非常勤講師として招かれたのが、昭和十二年九月からで、米国人教授タボーグ氏が賜下休暇で一ヵ年帰国されたために、その代役としてであった。したがって、私の授業は全部英語で英作文を教えることであった。このようにして私と明学の結びつきは第二部から始まったのである。昭和十四年から教授に任ぜられたが、まだ講師時代に、私に対して「英語の夏期講習を開いてくれ」との要求が、学生たちから持ち込まれた。私は専任の教授方を差し置いて、そのようなことは出来ないので、教授方へ申出をさせて、私は援助ということにして貰ったが、私の担当時間が一番多かった。これが夏期講座の始まりで、太平洋戦争勃発前まで続いたものである。そしてこの時から、第二部のＥＳＳが始まったのである。

一年後、タボーグ先生が米国から帰ってこられ、宗教部（現在のＳＣＡの前身）の活動が始まり、私も指導者として先生に協力を求められたのが始まりで、現在のＳＣＡとのつながりが続いているのである。クリスマスには英語劇まで行ったものである。

第二部には職業人も多数在学していたので、年齢もかなりに達していた者もいて、私も時には学生に間

違えられたこともある。それは九時三〇分に授業が終わって、品川駅で省線に乗り込んだときのことである。私と服部という学生がブリッヂの階段をかけ降りて同時に扉が閉まる瞬間に電車へ跳び込んだのである。「間に合ってよかったね」と、私は隣に席をとった彼に話しかけた。私が蒲田駅で下車する間際に、「君は一年何組だったけな？」と質問すると、彼は、「一Ｂです。して貴方は？」と来た。「僕は先生じゃないか！」と言ってさっと車を出たが、彼が「しまった！」と言って、頭を手でおさえて苦笑している姿が窓越しに見えた。私自身もまだ三十五、六才の若造でもあったが、若い学生と見られて、くすぐったいような嬉しいような気持で家路を辿ったことを今でも覚えている。「して貴方は？」という題で、平林先生が明学新聞に書かれたこともある。

（二）戦時中の第二部

さて、昭和十六年大東亜戦争はついに太平洋戦争へ突入した。学生の断髪令、卒業繰上、勤労奉仕、勤労動員、軍事教練強化と、学校はその本質を失い始めた。この点では、第二部は第一部に比べて恵まれていた。第二部生は昼間勤労者であるという理由で、学業を平常通り続行することが許された。昭和十五年から私は生徒主事（生徒課長―現在の学生部長相当）に任命されていたので、昼は農村へ学生と共に奉仕へ行ったり、工場へ動員で、習志野や富士板妻へ野営にと行ったものだが、第二部の授業日には、私は学校へ戻った。大体週三夜授業があった。米国人教師は帰米した後なので、私が放課後九時半から十時半まで、聖書研究とＥＳＳの練習を引き受けねばならなかった。不思議なことに戦争になると、逆に宗教心は高まると見えて、学生は「週一回の聖書研究を二回にしてくれ」と頼んで来た。ＥＳＳと合わせて、私は

週三晩ともこれを引き受けた。灯火管制の暗い中でこれを行った。空襲警報が鳴り出すとやめて、防空防火に当った。帰りはバスも電車もなく、暗い道を五、六名の学生諸君と目黒へと歩いたものである。学校内に軍隊が宿泊するようになった。ある人々は私に、「ＥＳＳで英語の歌を唱ったり、宗教部で讃美歌を唱ったりしては、軍人の方から苦情が来るかもしれないから止めては」と忠告してくれた。しかし「学校の礼拝と英語の授業が許されている限りはかまわない」と言って、私は最後まで続けた。苦難の時代に、私は明学の真髄である信仰と英語の生命をかすかながらも持ち続けることが出来たことを神に感謝している。この聖書研究グループの中から神学校へ進み牧師になった人もある。

(三) 後の第二部の衰退

相続く空襲に遭った東京は、終戦後まるで焼野原。それに食糧難。学校は再開されても、集まる学生は少数であった。とくに第二部はこの影響を受け、〝新制大学第二部〟となっても、定員の半数にも達しない状態であった。英文学科、社会学科、経済学科、商学科、一学年定員総数三百二十名が、補欠募集をして二度入学試験を行っても足らず、三月卒業式を済ますと、千二百八十名の定員が四百五十しかいないといった淋しい有様であった。

理事会でこのことが問題になり、一部では、第二部廃止の声さえ起り始めた。教授会でも心配し始めた。結論として、役職の教授の昼夜兼任制を廃し、第二部に専心し、学生の相談相手となり、親身に世話をする人を置くことが必要だということになった。文学部、経済学部両教授会は一致して、私に白羽の矢を立てた。この当時、私は教務課長であったが、その仕事を辞めて、第二部の教務事務と学生部事務全体をま

とめて、昼間部より切り離し、事務員も第二部専任を置き、私には第二部々長として働いて欲しいということであった。その時の学院長兼学長の村田四郎先生は、私に向って、「第二部の全権をすべて君に託すから、第二部の学長のつもりでやってくれ」といわれた。当時の文学部長であった若林龍夫先生は、「学生数を増やすどころか、在学生数を減らさないようにすることだけでも大変な仕事ですから、御努力をお願いします」と励ましてくださった。私は一大決心をせざるを得なかった。家庭生活も多少犠牲にすることは止むを得ない。講義があってもなくても毎晩、出来るだけ遅くまで学校に残り、学生諸君の相談相手となり、事務員の督励に努めようと決心し、青山学院第二部の講義も一晩は止めさせて貰い、他の二晩は最後の八時五分からの授業にしてもらい、明学に残って第三時限が終わってから事務員と一緒に帰ることにした。ＥＳＳやＳＣＡの集会や指導があるときは、それよりも遅く帰ることになった。

（四）第二部の隆盛

理事会および両教授会から私が依頼された第二部に対する任務は、先ず学生数を増やすことであった。その方法を私は色々考え検討した。到達した結論は、第二部いわゆる夜学が、昼間部の落武者を待っているだけでは絶対に定員には満たないし、それどころか、翌年になると、一年修了した者が第一部へ転部したり、他校へ転出したりで、減る一方である。そこで私は、第二部の従来の性格を変えるより他にはないと思った。すなわち第二部は落武者の受入れ所とか受験予備校的存在であってはいけない。第二部の目的は、昼間勤労者の学ぶべき所でなくてはならないということであった。すなわち、高校時代に成績は相当良かったが家庭や経済事情のために進学を諦めて就職はしたものの、一、二年経つと、大学を出ていなけ

れば昇進の見込みも少ないということが分かる。しかし、入学準備は出来ていないと悩む人が多いのである。私は、このような人々に学びの道を開くことが第二部の目的でなければならないと強く感じた。私は第二部に「無試験推薦入学制度」（すなわち高校時代の成績が優良で、職場の部課長の理解と推薦があれば、学科試験なしで面接による人物考査だけで入学を許可するという制度）を案として教授会に提出、慎重な審議の結果、実施ということになった。

事務員もこれに進んで協力してくれた。学長や私の依頼状を持って、有力な会社や夜間高校を訪れ、部課長や校長に会って推薦方を依頼して廻ってくれた。こんなことが四年くらい続いた。その努力は一般に理解され報われて、実施四年後は無試験で半数以上許可が出来、残りは入試で十分選考が出来、千二百八十の定員に達し、私が第二部長を免ぜられるまでの八年目には、在学生の数は定員数の約二倍に、二千五百名に達し、成績Aの入学者も多く、量的にも質的にも向上した。私の与えられた使命は達成されたのである。今日では第二部生は約三千名に達する隆盛である。「他の大学の二部生が減少し、或は閉鎖になる夜学が多いのに明学の二部は逆行し、その発展振りは注目の的になっている」と誉めて下さる先生もあった。

学生会、自治会の委員諸君もよく協力してくれて、学校と学生間に殆んど摩擦などの無かったことは、私個人としても嬉しいことであった。苦労したことは学生諸君の経済上の問題、学費、問題の相談であった。校納金が足りないので試験が受けられないと訴えて相談に来る。こんな場合は、何とか苦心しても立替えてやるより他に手はなかった。「入学手続きはしたいが学債が払えないと学校は入学許可を取消すという。どうにかならないか」という相談が五人や十人ではないのである。私は乏しいながらも印税や原稿

料や講演料などの特別収入をこれに当てて立替えてやった。今年の夏、この最後のものが私の手許に戻って来た。年単利七分の利子が付いて。私はそのような困った学生諸君を助けてあげたことを誇っているつもりはない。逆にそのお陰でまとまった貯金が出来て利息をもうけさせて貰ったという感謝である。そのような学生諸君も、めでたく卒業が出来たことは、私の心に喜びを溢れさせてくれる。

私は今はもう六五歳の隠居教授であるが、第二部の成長を今もって大きな関心と楽しみとをもって見詰めている。第二部自体でこのような『九十周年史』[『公孫樹』一九六七年刊のことか]を出版するほどの成長である。十年後の学院百年祭に第二部がどれ程成長発展し、学内にまた学外の社会にどれほどの感化力を持ち得るか、期待したいものである。

[明治学院大学名誉教授]

[『明治学院同窓会報』第十九号　昭和四十二年十月刊より訂正の上、転載]

社会科のつぶれなかったこと
―裏道と木立と小川―

大竹新助

明治学院に入ったのは、昭和十年であった。あの赤煉瓦の、西洋の童話の中のお城のような建物が教室であった。あんな狭い校舎の中に、英文科と社会科が収まっていたのである。ずいぶん学生の少ない学校で、いまの明治学院大学の発展ぶりなど、当時は想像もつかないことだった。

それだけに、「社会科をつぶせ」というようなことが、当時の学校理事者間では考えられていたようで、そんな不安感は、わたしたち学生の間にも漂っていたのである。中学や高商部から得た授業料の一部が、社会科の経営費にまわされていたようで、社会科からの授業料のみでは、どうにもならなかったものらしい。だからこそ、「社会科を廃止しよう」という考えが、ときたま話題に上ったのであろう。

そんな不安感がみなぎっていたころのことである。神学部が日本神学校として独立した後に、社会への奉仕者の養成機関として社会科を新設し、その育成に努力してきた総理の田川大吉郎氏が辞任したのであった。そこで、社会科の先生と学生が一致して、〝田川大吉郎総理留任運動〟が起ったのである。総理が辞めれば、社会科がつぶされると思ったからである。

しかし、その運動は不成功に終わり、総理は辞められてしまったが、社会科はつぶされずにすんで、なんということなく事態は終わりを告げたのである。しかし、その運動のおかげで、社会科の学生相互の団

結は強まって、学生社会事業連盟の創立や、子供映画会などをして得たお金をもとにした池上線の戸越地区のセッツルメント設立など、色々な仕事ができたのであった。そのセッツルメントに当時の特高がふみ込んだことがあったが、なかなか懐しい思い出である。

そのころ、徳永君（いまの学生課長）が中心になって、『燈心草』（たしかそうだったと思う）と題する回覧雑誌を作っていた。その雑誌の後に『雑草』というトウシャ版の新聞になったが、その名は私がつけたもので、雑草のごとく強く生きようという願いと、「わたしたちは雑草なのだ」というちょっと嗜虐趣味も加わっていたのである。その雑誌が、これまた社会科生を一つに結ぶ役わりを果たしてくれてもいた。

まだ『雑草』になる前の回覧誌に、私のアイディアを徳永君が漫画に書きあげたのだが、チャペルの礎石のみが残り、そこに藤村の記念碑と記念樹がある「いまはすっかり廃校になってしまった」わが明治学院に、遊覧バスが立ち寄って、ガイド嬢が「いまは亡き明治学院の跡です」と説明している漫画が載った。そんな不安感は、たえず私たちを襲っていたのである。そこで、学生募集の宣伝をして、社会科生の一定数を獲得しようと、これまた徳永君の編集で、入学案内を作ったりもした。それまでは、学院の入学案内は、いまの国立大学のもののような、一枚の紙にただ教科目や先生の氏名のみを印刷したような、事務的な印刷物しかなかったのである。そこに、写真入りの、今の私大の入学案内のような気のきいた、きれいな入学案内を作ったのである。しかも、それが学生の手によるものだったのである。写真は小生が担当したし、文章も学生が書いたのである。それが、『明治学院入学案内』の第一号なのであった。

本当に全てが、楽しい思い出である。常に自分たちの学ぶ学院の運命に思いを馳せ、学院を愛し育てて行こうという考えにあふれていた青春であった。

先日、学院を訪れて、その発展ぶりに驚いたものだが、コンクリートの四角の建物が、なにか〝そっけなく〟感じられ、もっと、〝ふくいく〟とした建物にならないものだろうかとも感じられた。木をたくさん植え、芝生を敷き、〝ゆったり〟とした、いかにも学ぶ者の園にふさわしい設計を考えていただきたいと思った。

その帰り道に、目黒駅までの裏道を歩いてみたが、当時の小川は埋まってしまっていた。でも、木立は少し残っていた。あの、学院の正門から目黒の方に歩き、突きあたりの寿司屋の横から入って、電話局の裏を抜ける道は、木立が多かった。小川の水もきれいで、ちょっと田舎道がしのばれて、夏は涼しい木立であった。私の大好きな道であった。

そこには洗濯屋の建てたアパートがあって、同級生の小松君が住んでいた。よく立ち寄ったものだが、小松君は終戦直後に小さいお子さんを残してこの世を去った。今の医薬だったら死なずに済んだものをと、残念でならない。私は、彼の悲しい死を思い、あの洗濯屋の二階の四畳半を思い浮かべる。

年月はいつの間にか過ぎ去っていたのである。

［一九三八（昭和十三）年高等学部社会事業科卒・随筆家・写真家］

［『明治学院同窓会報』第十六号　昭和四十一年五月刊より訂正の上、転載］

［戦前・戦中の明治学院中学部の頃］

向原　茂

昭和十四年四月、黒い詰襟の学生服に編み上げの革靴、明治学院のＭＧを組み合わせた校章を付けた帽子、白の肩掛け鞄という服装で、私の電車通学が始まりました。蒲田駅まで歩いて、省線に乗って品川駅で降り、駅から西に真っ直ぐ北白川宮邸（現在の新高輪プリンスホテル）脇の坂を上り詰め、右折して高輪消防署の四辻を左折、坂を下って二本榎の市電停留所の北西の一廓が、芝白金のわが学び舎です。品川駅から徒歩十五分の距離にありますが、五反田からもほぼ等距離で、目黒からは徒歩二十分少々の位置にあります。それぞれバスがありますが、余程のことが無い限り徒歩通学です。

校門を入ると左手に高等商業部の校舎があり、校門から真っ直ぐの通路の短いだらだら坂を上れば、左に素敵なチャペルがあります。このチャペルはアメリカ人建築家のウィリアム・メレル・ヴォーリズが大正五年に設計建築したもので、学院のシンボル的存在となっています。目の前には校庭が広がり、右手には高等学部の古い瀟洒な建物、左手には中学部の木造二階建ての校舎がありました。正面奥には木造のヘボン館と、物理、化学の教室や絵画教室が入っている鉄筋コンクリートの二階建ての建物がありました。当時の学院長事務取扱はウィリス・ジー・ホキエという外国人の先生で、国粋主義的思想の高まる世情の中で、教育者として異彩を放つ存在でした。

以上、往時の学院風景を振り返って見ましたが、今では全く変わってしまい、十年ほど前にホーム・カ

ミングで学院を訪ねた時、往時を偲ぶものは変わらぬ姿のチャペルと、小さな木造二階建ての高等学部くらいのもので、古い校舎の殆どは取り壊され、鉄筋コンクリートの建物がキャンパス一面に建ち並んでいました。

昔、ヘボン館の奥の敷地には、緑に覆われた海軍墓地があったのですが、今では廟になり、敷地は学院のキャンパスに姿を変えています。私たちが学院在学中、毎朝讃美歌を歌い、祈りを捧げたチャペルの外観は、昔と同じ壮麗な姿でしたが、チャペル自体古くなった木造建築の悲しさで、二階席は危険ということで使用禁止となっていました。中に入ってアッと驚いたのは、正面ステージの前面にしつらえた立派なパイプオルガンでした。銀白色の大白鳥が翼をいっぱいに広げたような優美なデザインには、思わず息を呑むほどでした。私たちが在校していた頃、全校生徒が毎朝行う礼拝での讃美歌の演奏は、「印度うぐいす」のニックネームを持つ音楽教師が、正面ステージの左袖にしつらえたリードオルガン演奏室で、厳かに奏でていました。

当時のリードオルガンは日本に数台しかないという代物で、露出したパイプは無く、用務員さんが後ろの物陰で、一生懸命オルガンに空気を送り続けるという旧式のものでした。私は何故かそんなリードオルガンに親しみを感じていました。

もう一つ、ここで紹介しておかなければならないのは、ヘボン館のことです。アメリカ人宣教医のジェームス・ヘボンは一八五九年（安政六年）に来日し、横浜で布教、医療活動の傍ら日本語を研究し、聖書の和訳を進め、日本最初の和英辞典『和英語林集成』を出版しました。ヘボン式ローマ字を考案した人物で、明治学院初代総理となった方です。その傑出した偉人のヘボン博士を記念して建てられたのがヘボン館で

す。言うまでもなく、私たちが学んだヘボン館は、元の位置に建てられた後世の建物でしたが、ヘボン館と呼んでいました。

そのほか、高等学部の建物は古い洋風建築で、幾星霜を経た校舎は歩くと廊下が軋み、とっくに建て替えが必要だったそうですが、取り壊すには惜しい建物で、以前は同窓会の事務局などに使用されていました。また、在学当時、キャンパスの周囲の緑の木陰にいくつかの外国人教師の家族の住宅があり、その周りで子供達の遊ぶ姿がありましたが、今は殆んど学校施設に建て替えられていました。

当時、戦時体制下で衣料品も次第に調達が厳しくなりつつありましたが、学校では規律が厳しく、校服、帽子、靴は朝の整列時にチェックを受けました。編み上げの革靴などだんだん入手が難しくなっていましたが、短靴は不許可でした。校律に定めた服装は堅く守られ、服のボタンの欠落とか服装の乱れも厳しくチェックされました。朝の検査では学校が特別に編纂した『明治学院用讃美歌』も必携要件となっていました。

毎朝捧げる神への敬虔な祈りも、生徒達にとっては学校行事の一環として行っているもので、正直言って形式的なものと感じていました。敬虔な宗教行事も、若い人生経験に乏しい生徒達にとっては、それが人生にとって真に心の糧となるかどうかについて、深い考えを持っていたわけではありませんでした。ただ一つ言えることは、生徒達にとって毎日の礼拝がただ形式的なことであったとしても、何時しかそれが身に付いて、そこに精神的な安らぎを覚えるものになるかもしれない、ということは考えられるように思いました。

ミッション・スクールの生徒は、他校の生徒に比べて非行が少なく、品性があり、おとなしい態度が、

どこか宗教臭いと言われるのも、そうした学園生活の中での教育環境で育てられたことと、あながち無関係でないような気がします。

でも、私たちにとって、チャペルでの時間は、決して堅苦しいものでも退屈なものでもありませんでした。茶目っ気たっぷりな年頃の学生達は、壇上で敬虔な祈りを捧げる教師達の仕草を真似たりして、結構面白おかしく、クラス・メートと楽しんでいました。キリスト教の教義についての教科はおざなり程度にありましたが、学校側は布教をすることはなく、入信を慫慂するものでもありませんでした。

授業の開始を告げるのはベルではなく、校舎の正面入り口にある古びた鐘でした。どういう謂れの鐘かわかりませんでしたが、それが島崎藤村作詩の校歌にある「人の世の若き生命のあさぼらけ　学院の鐘は響きて　われひとの胸うつところ」に出てくる鐘だとすれば、相当歴史的な代物といえます（後でわかったのですが、学院にはもう一つやや大きめの古い鐘があって、それが藤村時代の鐘らしいという説があります）。いずれにしろ私たちが親しんだ鐘は、学舎の隅から隅までよい音色が響き渡って、人々の心に悠久の響きを伝えるものでした。雨の日も風の日も時計を見て釣り鐘の紐を引くのは、小柄な学校の用務員さんだったので、誰言うとなく「ノートルダムの鐘男」というニックネームが付いていました。

学校ではニックネームが大流行で、私もある教師から「むくはら」と呼ばれたのがきっかけで、「むく」と命名されていました。教師といわず、生徒といわず何かしらニックネームを持っている人が多い中で、始業の鐘が鳴るとすぐに教室に駆けつける数学の真面目な教師は、「ポンプ」（消防車のこと）というニックネームでした。ある時、その教師の数学の始業の鐘がなったので、クラス・メート全員が悪ふざけで「ポンプ、ポンプ」と囃し立てたところに、案の定小走りで入ってきた教師は、大変悲しげな顔をされま

した。それを見て生徒は全員申し訳なく思い、シュンとしてしまいました。誰かが入り口の引き戸の鴨居の上に悪戯で仕掛けておいた黒板消しは、危うく落下を免れ、教師に何事も無かったのは幸いでした。

英会話の時間では、ダローという女性の外国人教師が教鞭を執っていましたが、どういうわけか級長でもない私が、よく「起立、礼、着席」の号令や、出欠とりを英語でやらされていました。教師のほうでは私の面倒を見ていたつもりなのでしょうが、私もその頃から本気で英会話の勉強をしていれば、少しはましな英会話力を身につけることができたのかもしれません。

時あたかも、時局は大陸での戦火の拡大と長期化で、経済危機が深刻化し、戦略資源を求めるため南進政策が強化され、それが米国の対日姿勢を硬化させることになりました。その結果日米通商条約は破棄され、かくして日本は第二次世界大戦への道を一歩一歩辿ることになるのでした。

「愛馬進軍歌」、「太平洋行進曲」、「出征兵士を送る歌」などの軍歌が次々と世に出て、国民の士気は高揚され、当時の近衛内閣は、昭和十五年九月に独逸に働きかけて、米国を対象とした日独伊三国軍事同盟が締結されるに至りました。しかし、この頃、一方ではいわゆるＡＢＣＤラインの対日包囲網が次第に強まり、政府は国民に総員戦士としての決意を促しました。

学校では配属将校が配置され、学校教練が必修科目となり、戦士の養成が義務づけられました。散兵訓練や匍匐練習、銃剣術や射撃訓練などを行ないましたが、私にとって一番つらかったのは、小砂利を敷いた校庭での匍匐前進でした。ずしりと重い三八式歩兵銃を両手で支え、腹ばいになって、両肘と両足を使って目標に向かって進むのですが、三八の重みで両肘に砂利が食い込んで、痛くて痛くて、嫌な思い出として残っています。

三八銃に腰のごぼう剣を着剣して、敵兵に見立てた巻藁に突っ込む訓練では、突進しているうちに銃の重みで銃剣が下向きになるのを必死にこらえ、歯を食いしばって巻藁の標的に突っ込んだのですが、その時の形相がすごく真剣味があってよろしいと配属将校にほめられ、お手本としてみんなの前で何回もやらされたのには閉口しました。

言い遅れましたが、学校では全てが学業の成績順になっていて、教室での席順は勿論のこと、体操、教練、朝礼での整列など、諸行事に到るまで、学年や各学期で決まる総合的な学業成績で、学年、学期ごとに順位が変更されていました。私は中学生になっても相変わらずイージーな性格のせいか、五十人ほどのクラスで、常に十番台にいました。学校では競争原理の導入で、全体の学業レベルの向上を図るのが狙いなのかもしれませんでしたが、生徒達の殆どはガリガリすることもなく、多少の席次の上がり下がりを気にする様子もありませんでした。

中学では科目ごとに担当教師がいて、教育方法もそれぞれ特色があり、生徒達の中にも得意科目があったりして、結構バラエティのある学校生活を送っていました。

教師の中には、海釣りが好きで日焼けした物理のK教師の話が面白く、授業の前にひとくさり釣りの極意を聞かせてくれるのですが、ある時、江ノ島の黒鯛釣りで、真夜中に撒き餌の中に人糞をこね混ぜてそれを海中に撒き、翌朝その場所を他人に取られないよう早起きして糸を垂れたら、自分だけ面白いようによく釣れた、などという面白おかしい話を、生徒達は半信半疑で聞いたものでした。

そのほか、駄洒落の好きな国語の先生、踊るような手振りでリズムに乗って教える数学教師、足音を立てずに教室中を歩き回り、生徒達にネチネチと注意をするニヒルな英語の教師、生徒の執拗な質問攻勢に

辟易の体の実直な漢文教師、身体がすごく柔らかくて、「ゴム人形」という異名を持つ体操教師など、ユニークな人が数多くおられました。

生徒達は生意気盛りの年頃だし、悪戯や冒険心も旺盛で、私たちは三〜四人誘い合わせて、学校からの帰路、しばしば通常の通学路でない道を興味深く探索して歩きました。

高輪消防署脇の高野山別院の裏山で道草を食い、崖にある大木から垂れ下がった太い蔦の蔓につかまり、空中を飛んでターザンの真似をしたり、偶然見つけた木苺の実を食べたりしながら、人ひとり通れる樹木の覆い被さった小径を辿って、とある大きな屋敷の横に出て品川駅に着くのですが、ターザン遊びの場所や美味しい木苺の在処は、他の友だちには絶対秘密にしていました。私たちの道草はひとしきり続きましたが、だいぶ遠回りして泉岳寺の方まで行くこともありました。道すがら、とある饅頭屋の店先に、「味はおおいし値段はやすべえ　餡はたっぷり討ち入り」と書かれた宣伝文句がありました。

休日に、親から買ってもらった空気銃を持って、学友二人と事もあろうに殺生禁止の、鶴見にある総持寺の寺領の森に出かけたのですが、罰が当ったのか雀一羽の収穫も無く、夕日の空を仰いで足取りも重く、くたびれもうけの一日でした。雀を撃つのならむしろ家の周りのほうが適地で、人慣れした雀のほうが容易に撃ち取ることができました。私の射撃は所詮ゲームなので、獲物を料理して食べることはなく、無駄な殺生をするよりも、標的で命中率を競うことに終始しました。

時局は、日本自ら招いた戦争拡大ではありましたが、軍部の強硬な姿勢で対米交渉妥結の見込みを失ったことで、昭和十六年十月、近衛首相は辞任し、強硬な開戦論の東条陸相が首相兼陸相となったのでした。かくして十二月一日、天皇は御前会議で対米開戦を決定し、十二月八日、日本は宣戦布告以前にハワイの

真珠湾を奇襲し、対米英戦争は開始されました。これに先立ち、政府は大政翼賛会の新体制を敷き、中央、地方を通じて、国民は家にあっても職場にあってもその体制の中に取り組まれ、戦争に動員されました。「隣組」もその体制の一環でした。

銃後では物資がだんだん窮屈になり、特に食糧は若い発育盛りの私たちにとっては厳しい問題でした。学校では昼食時、パン屋の売店で売り出したおこわパンが好評で、ずっしりと入ったおこわが若い胃袋を満足させるもので、学校の推奨品でした。

学校の教室の冬の暖房は石炭でしたが、割り当ての石炭では十分ではないと言って、悪ガキの生徒達は、老朽校舎の廊下の剥がれかかったリノリウムを、さらに剥がしてストーブに投げ入れ燃やしてしまいました。すごくよく燃えたので、リノリウムは次々と剥がされましたが、この一件はたちまち学校側の知るところとなり、中止されました。これとほぼ時を同じくして、リノリウムを剥がした廊下の窓の外に人糞がしてあり、朝礼を終えて教室に入る私たちをびっくりさせました。皆であれこれ詮索しても思い当たる節も無く、不思議な臭い事件として迷宮入りとなりました。

何時の世も、人間生意気盛りになると、はみ出す者も出てくるもので、戦時下といえども高学年になるにつれ、規則に違反して不良ぶったり、それを得意げに同僚に誇示したり、威圧感を与える者もいました。キャンパスの北隣にある海軍墓地は、学校敷地と有刺鉄線で区切られているだけで、緑豊な墓地の中では、ときおり、ウズラやコジュケイが遊んでいました。ある時、有刺鉄線の破れ目から墓地に侵入して、喫煙する生徒がいました。学校側に見つかれば勿論処罰されますが、墓地の奥の見えないところで喫煙するのではなく、わざわざ私たち生徒の目の届くところで煙を立てるのは、不良ぶって得意になりたいという心

理からだったのでしょうか。この事件はいつも墓地のそばで遠慮がちに喫煙している美術の温厚な老教師に見つかって、喫煙をやめるように注意されただけで沙汰やみとなり、生徒も自粛してけりが付いたようでした。

「燃ゆる大空」、「暁に祈る」の軍歌が流行し、太平洋戦争はやがて日独伊三国が米英仏の連合軍と対戦することになり、瞬く間に第二次世界大戦へと、戦火は燎原の火のごとく拡がりました。

日本は緒戦では米英蘭の植民地に展開し、ラバウル、ビルマ中部、マニラ、シンガポール等の広大な地域を占領しました。しかし米軍は昭和十七年六月、ミッドウェイで山本五十六長官率いる日本連合艦隊を壊滅させ、翌年二月にはガダルカナルを奪回、太平洋における主導権を確保するところとなり、わが日本軍は太平洋の全戦域で逐次敗退し始めました。

学校教練はいよいよ強化され、行軍で目黒の柿の木坂や五反田方面へ出かけたり、狭窄弾による射撃訓練などで、油臭い兵器庫への出入りも多くなりました。

富士の裾野での野外訓練も行われました。夜間の野外訓練では、真っ暗闇の中で散兵して、対峙する敵の陣をうかがっていたところ、草むらで胸のあたりに蠢くものがあり、暗がりの月明かりで顔を近づけて見ると、なんと手の平ほどもあろうかと思われる巨大な蜘蛛でした。あまりの恐ろしさと気味悪さに身の毛がよだつ思いで飛び退きましたが、その夜の訓練は気もそぞろでした。兵舎での夜は、毛のすり切れた毛布で寝袋をつくり、その中に入って寝るのですが、悪戯好きの悪ガキ数人が昼間のうちに打ち合わせていたとみえて、消灯ラッパの鳴る直前にA君に飛び掛り、ズボンを脱がせて、局部に歯磨きクリームを塗りたくって大騒ぎとなりました。消灯ラッパの吹鳴で一斉に自分の寝床に戻り、当直の通り過ぎるまで息

を殺して寝たふりをしましたが、昼の訓練の疲れで、皆すぐ眠りについたようでした。次の朝、起床ラッパで目が覚めると、あちこちで南京虫にやられた者が続出し、血をいっぱい吸って逃げ遅れた南京虫が、柱の割れ目などに逃げ込んでいきました。私はその時の光景が今でも忘れられず、西瓜を食べるとき、種の形が南京虫のように思えて仕方がありません。

蒲田の家から見る羽田の上空には、毎日練習機が飛び、宙返りや背面飛行など、飛行戦士の養成が続けられ、知り合いの大学生も志願して行きました。航空服を身に着け、半長靴を履き、白のマフラーを襟元に巻いて、とても恰好が良いので憧れたものでした。

戦局は厳しさを増し、私たちの周りからも出征して行く人が増え、適齢期の人は何時来るかもしれない赤紙に、口では名誉と言いながら、心境は穏やかでないようでした。日の丸を振って見送られる出征兵士が増加する一方で、帰還する英霊もありました。

中学も高学年になり、生徒達はそれぞれ進路を決めなければなりませんでした。特に進学目的の勉強もすることなく、方針も定かでないイージーな学校生活を過ごしてきた私は、文科系の志望でしたが、多分に成り行き任せといったところでした。

雨の日も風の日も、蒲田の自宅から学校まで通い続けた通学路や、周囲の建物の佇まいは、在学中殆んど変わることはありませんでした。戦争中のこととて無味な通学路ではありましたが、そんな中でも、私のうら若き青春の心に、ほのかに芽生えた秘めたる出来事がありました。

毎朝、品川駅から歩く北白川の宮邸脇の坂道の途中で、決まって出会うとても清楚で愛らしい女子生徒がいました。私は上り坂の右側の歩道を歩いて学校へ、女子生徒は反対側の下り坂の歩道を歩いて、品川

駅方面へ向かって行くのです。確か私より一つか二つと年下のようでしたが、本当に決まった時間に決まった場所で、車道を隔ててほんの一瞬すれ違うのです。お互い顔を見合すわけではなく、伏し目がちに、ちらっと見るだけでしたが、私の胸はときめいていました。

それは何時の頃からはっきり憶えていませんが、とても長い期間続いたように思います。そのことは多分相手も意識していたと思うのですが、私は思い切って反対側の歩道を歩いてみる勇気もなく、ましてや、なんのきっかけもないのに話しかけることなど、出来るわけもありませんでした。

その私の秘めたる逢瀬は、とうとう私の中学卒業で終わりとなりました。たったそれだけのことでしたが、私にとっては忘れられない、淡い、若き青春のひとこまでした。

戦争中でありながら、わが青春の中学時代を、これといった苦労もなくおおらかに過ごせたのは、なに不自由なく育ててくれた両親や、良き師良き友に恵まれていたからでしょう。でも、もし戦争という抑圧がなかったら、私の若き青春時代は、或いは変わっていたとも思うし、違った方向に展開していたかもしれません。

［一九四四（昭和十九）年中学部卒］

［向原通繁（筆名）著『風雪』二〇〇六年四月六日刊より訂正の上、転載］

［戦時中のこと］

加藤　新

昭和十七年この年、前年十二月八日に始まった大東亜[ママ]戦争の戦線の拡大と連戦連勝のニュースが国民を酔わせていた四月、明治学院高等学部厚生科に入学した私達は、その月の十八日(土)の午後、米空母からのノースアメリカンB25の東都空襲を体験させられた。私はたまたま日劇で映画を見ていたので、帰路にそれを知り、あわてて学院のチャペル等の無事を確認し、防空対策で遅くなったと言い訳して帰宅したことを覚えている。六月にはミッドウェー海戦、八月からのガダルカナル攻防、十二月の転進といった戦況の中で、院長矢野貫城、厚生科主任若林龍夫、大内三郎先生をはじめ福與正治、加藤七郎、園部不二夫、長谷川謙治、加茂儀一、峯村光郎、大河内一男、舘稔、沖中恒幸など各学科の先生方の授業にノートをひろげ、また陸軍大佐足代守政配属将校の軍事教練に汗を流す毎日が始まったのである。

昭和十八年の四月に、山本五十六長官の戦死、七月のアッツ島の全滅、そして十月には学生の徴兵猶予特権が廃止となり学徒出陣。今年還暦を迎へられる諸兄が次々と出兵された。十一月にマキン・タラワ島の玉砕。また、この年の八月二十二日に島崎藤村氏が逝去されたことは忘れられない。

昭和十九年一月から千葉県公津村の農業用水路工事へ勤労動員、そして四月には明治学院専門学校経営科への改称、三菱重工横浜造船所へ勤労動員。九月に繰上げ卒業となった。私は海軍予備学生として土浦海軍航空隊に入隊したので卒業式には出席できなかった。ということで二年半の短い学院生活は終わるの

である。

［一九四二（昭和十七）年中学部・（昭和十九年）専門学校経営科卒］

『白銀会―明治学院専門学校経営科卒業同窓誌―』昭和五十八年十一月五日刊より訂正の上、転載］

〝あの頃〟

藤本美彦

昭和十八年、中学部の口頭試問の時、ほのぼのと明るく温かなものを感じた。僕は前年二校失敗し、高小に一年行き、その年も一校落ちた後、追いつめられ、いじけ、あきらめに似た心が、すっかりときほぐされ、試験場で微笑さえ湧く雰囲気だった。その印象は入学しても裏切られず、在学中も、卒業後の今日も、心に余韻をとどめている。

校門で「歩調とれ、頭右」の時代、査閲の前などは品川近くの宮家前の路地で行進練習をみっちりしぼられ、「コーチセンセにいうてうつぞ」と桁山先生。しかし、そこに笑顔があり、僕らも笑って応じ、結局、誰もそのような制裁は受けなかった。そういえばヒゲダルマ中尉殿の「マンネンエンピツ一本、落っことった」も愛敬があった。五年生には可愛がられ、こちらも甘えたりからかったり、四年生など、時折僕らの教室に来ては何やら説教して行ったが、暴力的な威圧はなかった。疎開した時、学院がいかに温室

だったか身にしみた。先生方の渾名の伝承が徹底し、職員室でまごまご。今でも渾名だけを思い出したり、確かに習った先生の名前を見て、はて何をいつ習ったっけ。全く申し訳ない次第。当初からお世話になり、昔以上にお元気な現役の先生方にお会いすると、嬉しくも面映ゆくもある。靴の配給を三光町まで買いに行く時代、一泊遠足の芦の湖畔の礼拝も懐しく、厳しさの中にも、長閑さや楽しさがあった。

二年生になり板妻兵舎での野外演習の頃から、情勢はいよいよ深刻。中学部長漆山先生に、校庭で「太郎よお前は良い子供」と、皆してよく歌わされた。「日本は必ず勝つ」と絶叫された先生方の声が、今も耳に哀しい。五年生から始まった勤労動員は、遂に僕らにも及び、大半は荏原製作所や宮田製作所に、距離の都合で僕ら三十人程は大崎の牟田鋳工所へ、しかも皆より早く十月に出掛けた。四年生の一部が既に動員されていた。僕らの作った物がどれほど役に立ったかは知らない。アルミ食器の給食、厳寒にも鉄の溶けた熱さ、仕事後の工場の風呂、当時はむしろありがたかった。帰りに空襲に遭い、すきを見ては壕から壕へと一歩でも家に近づこうと渡り歩いた。二十年三月、大雪と大空襲の重った夜は、膝が没する雪を分けて、明け方近くにやっと家にたどり着いた。三月末に疎開、転校。八月終戦。日本は「大きく」なるどころか、小さくなってしまった。

翌年、四年生の十月に学院に復帰。書類が届かず案じていた学院は健在。相前後してもとの顔振れも揃い、賑わいを取り戻した中に、かつて工場の風呂でおどけていた者の顔が見えない。聞くと空襲で死んだとのことだった。

五年生のはじめ、担任の追放にショック。秋に創立七十周年。学制改革で旧制中学部最後の卒業生。新制高校三年に移行して第一期生。大学開設の年に入学。専門学校から移行した学年に続いて第二期生。誇

り高く恥も多いこの頃のことは、紙数が尽き、文字通り割愛。

［一九四八（昭和二十三）年中学部・（昭和二十四年）高等学校・（昭和二十八年）大学英文科卒・元世田谷区立中学校教諭］

『明治学院同窓会報』第二十号　昭和四十三年一月刊より転載］

戦時の学院生活

繁尾　久

昭和十九年に専門学校の生徒になってから、今年三月に大学を退職するまでの四十八年間に、明治学院にまつわる思い出はさまざまである。とりわけ印象が深いのは、敗戦前の約一年半にわたる学校ぐるみの勤労動員であった。横浜の軽井沢町にあった寮から高島町の三菱重工の造船所へ行き、南海で見るも無残に傷つきたどり着いた戦艦の修理や、戦時標準船を造る下働きであった。そこでは、捕虜たちと一緒に空腹に耐え、汗まみれになり、鉄板など資材の運搬が主な仕事であった。

印象的であったのは、作業ではなく、宿舎に戻ってからの生活であった。疲れきって丘の上の寮に帰った学生たちは、粗末な食事のあと暫く自由な時間があり、散歩に出ても寝そべっていてもよかったのだが、我々と寝起きを共にした先生方が、有志を集めて、それぞれの専門の事柄について学習の時をもってくだ

さったのである。そして、身は工場労働者であるが、それにかまける事なく、「学問を放棄しないように」と諭されたのだ。我々の多くは間もなく軍隊に入り、一層自由は拘束されることになっていたので、寮生活と工場生活の合間に、聖書やシェイクスピア、その他、西田哲学、倉田百三、ドストエフスキー、トルストイ、マラルメ、イェスペルセンの文法書（それはふしぎに限られた部数が新刊となった）など、手あたり次第に読みあさり、人生の意味について考えた。

あの混乱を極めた困難な時期に、明治学院の先生方が、いたずらに権力に迎合することなく、学生をその本分にむけて指導されようとした努力を私は貴重だと考えている。敗戦後、占領軍が来て、学院の出身者の英語が直ぐに役立ったことを喜ばれた旧師がいた。私はさらに、あの異様な教育風土の中へ否応なく飲みこまれるはめになった明治学院の友人たちの多くが、突然の異国との対決に際し、比較的公正にこれを評価し、受け入れる様子を見て、伝統の重さを見た思いがした。

［一九四五（昭和二十）年専門学校英文科・（昭和三十二年）大学院英文学修士課程卒・
前明治学院大学副学長］

［『記念樹―明治学院同窓会報』四十五号　平成三年九月刊より訂正の上、転載］

戦争末期の学院生活

峯岸久三郎

昭和十九年、私は明治学院専門学校経営科に入学した。当時、青山学院は工業専門学校に、関東学院は航空専門学校に夫々変更し、文化系は明学が中心になって、三学院が合併し、明治学院専門学校が出来て、その第一期生として入学したのである。従って上級生の中には、青山学院から、或いは関東学院から、不本意に転校して来た人達がいた。青学からの転校生の中には、校門をくぐると帽子の徽章を青学からMGに、ホックでつけかえる人がいた。これが教官に見つかり、オーバーな体罰が加えられ、「気の毒」に、と思ったものである。

授業内容は、士官学校の予備校のようなもので、週七時間も教練があった。火曜の午前四時間と、金曜の午後三時間である。将校は既に不足で、歩兵将校ならぬ騎兵の中尉殿が教練教師として指導？するのである。騎兵の教師が歩兵の教育をすることは、国語の教師が独語を教えるようなもので、連続四時間もの授業を消化出来る筈もなく、その貴重な時間の半分以上が銃剣術等に費やされた。

食糧不足で、空腹をかかえて、目の眩む毎日であった。十九年も終わりに近づき、食糧事情は益々悪化し、昼食も儘ならなくなって来た。高輪消防署の近くの雑炊屋に毎日長蛇の列が出来た。雑炊の基準は「箸が立つ程度」とのことであったが、そんな雑炊は全く無く、箸は汁の上に浮いてしまい、汁の中に米粒がパラパラというものである。長い列の前の方を確保する為には、四時限の授業をエスケープせねばな

らない。程よい所に並んでいると、四時限を終えた上級生が来て、列の前の方に割り込み、私の前で売り切れ、昼食にありつけないのである。食物の恨みは大きい筈であるが、四十年の歳月は、これをも風化させてしまった。

労働力の不足は極限を越え、遂に中学生まで軍需工場で働かされるようになった。明学も、経営科一年生の百名を除く全員が、糧秣廠へ動員されたのである。幸い私達百名は、学校防衛隊として学院に残り、授業を続けることが出来た。

毎日十名が残って学校に宿直する。宿直といっても、布団があるわけでもなし、体操用のマットを卓球室に敷いて仮眠するわけだが、寒くて眠れず、徹夜で卓球をして暖をとったりもした。

こんな時でも、月曜の第一時限は礼拝を欠かさなかったのである。また一方、校庭で毎朝、朝礼を行い、宮城を遙拝し、明治天皇御製を全員で斉唱、生徒課の竹中、加藤、平林の三先生が、交代で段に上られ、御製をお読みになったのを、懐かしく想い出すのである。

［一九四七（昭和二十二）年専門学校経済科卒］

『記念樹―明治学院同窓会報』四十一号　昭和六十三年九月刊より訂正の上、転載］

昭和十九年四月の明治学院中学部入学生徒の戦中メモ

現影昭夫

昭和十九年に中学部に入学の大部分の生徒は昭和六年生れで、その年には満州事変が起き、小学校に入学する前年から日中戦争は始っていた。昭和十六年十二月八日、私が小学校四年のときに太平洋戦争が始まった。この年の四月から小学校は国民学校と呼称が変わり、開戦記念日の毎月八日は「大詔奉載日」となり、全校生徒参加の神社参拝をさせられた。麻布区立（現港区）小学校在学の時、参拝先は明治神宮であった。行く途中、戦死者を出した〝英霊の家〟の前では、全員行進を止めお辞儀をした。昭和十六年の戦時標語は「月月火水木金金」。十七年は「屠れ米英我等の敵だ。欲しがりません勝つまでは」。十八年は「撃ちてし止まむ」。十九年には「進め一億火の玉だ。明日の百機より今日の一機だ」。など街を歩くとこれらがやたらと目についた。

祝祭日は年十日以上あったが、今日と異なり学校が休日となる日は少なかった。二月十一日は紀元節、三月二十一日は春季皇霊祭、四月二十九日は天長節、十一月三日は明治節でその日は登校し、式が挙行され、礼装の校長が、初めに必ず教育勅語を奉読。全校生徒は直立不動で黙祷して聞かされ、校長の訓話、祝日の歌の合唱の式次第で、式典に列席させられた。

音楽の時間もドレミファも敵国語で駄目で、ある日突然ハニホヘトイロハに変わり、鉛筆の硬度符号も

HBが「中庸」、2Hは「二硬」、Bは「一軟」、2Bが「二軟」と称した。

中学受験の際は、先生に『小国民練成読本』を受験参考にするようにと、受験生全員が言われた。内容は記憶していないが、皇国日本の小国民のための指導書であったと思う。たしかに口頭試問に出題された、前述のような教育を受けた国民学校卒業生であった私が中学に進み、キリスト教教育校である明治学院に入学した。

昭和十九年四月

チャペルでの礼拝入学式。学院には軍派遣のお目付け役で、現役配属将校一名、教練教官一名、配属常駐されていたが、学院教育の中心である、授業前のチャペルでの全生徒参加の礼拝などは、院長と中学部長、各先生方が毎日交代で、主の祈り、讃美歌、聖書訓話等、戦時色の強い中でありながら、当局や関係方面に相当な根回しがされていたのか、配属将校などからも特別な干渉もなく守られていた。服装はミッション・スクールでも戦時色で、生徒は国防色のスフ学生服に戦闘帽、編上げ靴にゲートル姿が制服であった。当時の全国中学校生徒の行動は、すべて軍隊色で統一され、学院も例外扱ではなかった。敬礼は、小学校では脱帽拝礼だが、中学生は厳格な挙手に変わる。上級生には歩行しながら、教師に対する礼は停止しての挙手と決められていた。但し、校内では上級生へ礼は省略と、毎日が新体験だった。中学に入学して、早々に戦況はすでに敗色模様を呈していたが、情報が乏しく、国民は実態を知らされていないだけであった。

略年表（昭和十九年〜昭和二十年）

六月　六日　連合軍ノルマンディー上陸
六月　十六日　B29初の北九州来襲
七月　七日　サイパン島の日本軍守備隊玉砕
八月　三日　テニアン等の日本軍守備隊玉砕
八月　十日　グアム島の日本軍守備隊玉砕
八月二十三日　学徒勤労令公布
十月　十日　米軍機動部隊沖縄攻撃
十月二十五日　神風特攻隊レイテ沖で初の米艦攻撃
十一月　一日　B29一機東京上空に初めて偵察飛行で現れる
（アメリカ側の資料で後日判明したが、B29が一日、五日、七日、連続して房総勝浦沖より偵察飛行に侵入したのは、F13と呼ばれるB29型偵察機で、地図作成用・特定目標撮影用カメラを搭載し、高度一万㍍の高空から、東京地区の工業地帯や軍事施設などを詳細に撮影。三回偵察し、一回に五千枚の精密写真撮影をし続けた。このあらゆる科学的偵察資料で、東京空襲を準備した。日本軍防衛部隊は迎撃したが、戦闘機、対空砲火も高度一万㍍の壁に阻まれ、撃墜できず、偵察飛行を許した。）
十一月二十四日　B29約七十機で東京都下大空襲。中島飛行機工場と住宅を爆撃、二百三十四個の爆弾と百三十五個の焼夷弾を投下され、工場は大被害を出した。罹災者千三百名以上、傷者三

百二十八名、死者二百二十二名、家三百三十二戸損害。当時は厳重な報道規制で、被害内容は一般に知らされなかった。（消防庁他調）

十一月　二年生以上は「勤労報国隊」として軍需工場等に動員令が下る

十一月二十八日　学院で第二学年学徒勤労報国隊壮行式挙行。第一学年学徒参列

十二月　十三日　名古屋初空襲

十二月　十八日　大阪初空襲

十二月　B29計十五回、延百三十六機、東京来襲。六百九十七個の爆弾と、四千百二十九個の焼夷弾投下で、死傷者七百十五名。

昭和二十年一月　B29計百機東京空襲。死傷者千五百八十一名、罹災者六千四百三名、全焼八百五十五戸、全壊五百二十五戸、投下爆弾五百四個、焼夷弾二千八百二個。

二月　B29の他、小型艦載機も加わり、計七百五十一機、東京空襲。死傷者千九百四十七名、罹災者八万千五百九十九名、投下爆弾千四百七十三個、焼夷弾八千二百六十二個、全焼二万五百六十四戸、全壊五百五十五戸。

三月　一日　硫黄島日本軍守備隊玉砕

三月以前の空襲は高度一万㍍より軍事目標中心の大量の爆弾、焼夷弾攻撃。それが日本の主力工業地帯、非戦闘員も対象とした無差別爆撃に三月十日東京下町大空襲より戦略変更した。

三月　九日　東京に二二時三〇分警戒警報発令。B29二機が陽動飛行。

三月　十日　陸軍記念日にB29百三十機が来襲。〇時〇八分、先頭機が深川木場に第一弾投下。〇時一〇分、隣の城東区（江東区）北砂町が被弾。〇時一二分、本所区（墨田区）。〇時二〇分、浅草区（台東区）。次に牛込区（新宿区）、下谷区（台東区）、日本橋区（中央区）、本郷区（文京区）、麹町区（千代田区）、芝区（港区）を爆弾と焼夷弾で焼き払う。空襲警報が発令されたのは〇時〇八分。第一弾投下より七分遅れの〇時一五分で同警報解除は二時三七分。この間、正味百四十二分間に出た被害は、死者八万三千七百三十九名、傷者四万九百十八名、罹災者百万八千五名、半焼九百七十一戸、全壊十二戸、半壊二百四戸、消失家屋二十六万七千百七十一戸、計二十六万八千三百五十八戸、と警視庁発表。

（消防庁はB29百五十機、警視庁・大本宮は百三十機、米軍資料は三百三十四機と二百七十九機とあり、まちまちバラバラで一致していない。）

消防庁の記録によれば、B29から投下された爆弾百キロ級六個、油脂焼夷弾四五キロ級八千五百四十五個、二・八キロ級十八万三百五個、エレクトロン一・七キロ級七百四十五個。

爆撃の中心地での密度について、『暮らしの手帳』の「戦争中の暮らしの記録」は次のように記している。

まず、まわりを焼いて
脱出口を全部ふさいで

それから　その中を
碁盤の目に　一つずつ
焼いていった
一平方メートル当り
すくなくとも三発以上という焼夷弾
みなごろしの爆撃…

三月　十八日　中学以上授業一年停止決定
四月　一日　米軍沖縄上陸
四月　新学期が始まり第一学年生徒入学。我々は第二学年進学。
上級生徒は勤労動員で不在

毎朝登校の際、生徒は校門手前で五～十名位で隊を組み、指揮者を決め、校門前に近づくと、指揮者から「歩調トレ！」の号令がかかる。歩幅は七十五㌢で行進し、校門前に立つ複数の週番生徒に「カシラァ右！」で首を四十度回転させて挙手の礼。バラバラ登校は禁止、遅刻は恐ろしい。一糸乱れぬ行動が要求され、週番生徒は隊列を確認、挙手をし登校を許可する。少しでも隊列行動が不揃いの場合は、門の外に戻し、揃うまで何回でもやり直しさせるのがきまりであった。動員され、家庭→勤労現場直行の上級生は、月ばなの一日が解放登校日らしく、授業はなく連絡をしに登校。その時、二年生週

番の行動を意地悪な何人かの上級生が物陰から監視し難癖をつけしごく。二年生週番が隊列不揃登校グループを甘く見逃したと、真面目に規則通り対応していても難癖をつけ、週番を全員連帯責任と称し、放課後教室に集め、隊列登校監督手抜きであると、ビンタと正座。手を前に中腰屈伸等の様々な苦痛忍耐体罰を長時間やらされる。終わったと一息すると、また別の関係ない数人の上級生が出てきて、同じ事を態度が悪い等屁理屈を並べ、繰返し大声で怒鳴りながらの長時間体罰を遊び感覚か、楽しんでやられているようで怖かった。

学院は、徒歩通学推奨で、近距離通学生徒は通学証明発行中止。品川等からバス通学は禁止で、新入学当時は、バス停に上級生が立ち、違反者を監視摘発しており、利用する生徒はいなかった。

戦時中の中学生はバスや電車等乗り物内で席につく事は禁じられ、たとえ空席でも立つ。これは非常に良く守られて、近頃の車内風景とは大違いで、戦局が次第に厳しくなり、平行して礼儀作法も自然に生徒として恥じない行動意識が醸成された。

四月　十三日　B29百六十機、二三時過より豊島、荒川、王子、小石川、淀橋、四谷、牛込、麹町、空襲。

四月　十五日　B29二百機、二三時過より京浜地区空襲。大森、蒲田の城南地帯と川崎市、横浜市、鶴見地区の広範囲に波状攻撃をした。

四月十三日、四月十五日の両爆撃で、都内で約二十二万戸が全焼。死者は三千三百名（警視庁資料）、飛来B29機数、投下爆弾は三月十日の下町空襲の規模とそんなに変わらないのに人的被害が少ないのは、警視庁が三月十日の大被害の教訓で、「防空体制」を変更し、もう駄目だと判断したら敏速に風上に「まず逃げろ」と指導したからだと言われる。

五月　七日　ドイツ降伏

五月二十四日　B29二百五十機、未明に都内西部方面に侵入。約二時間、大森、品川、目黒、渋谷、世田谷、杉並に、焼夷弾七万六千五百十八個投下の無差別爆撃。死者七百六十二名、負傷者四千百三十名。

五月二十五日　B29二百五十機、約二時間半の夜間爆撃。いまだに被害の出ていない残存地域に油脂、黄燐、エレクトロン各焼夷弾十二万二千七百二十五個投下。被害は山の手を中心にして南、北多摩までおよび、ほとんど東京全域に波及した。

六月二十三日　沖縄の日本軍守備隊全滅

B29による空襲が激化し、学院内にも「特設防護団」が組織され、徒歩圏内の生徒は空襲時に参集し、教職員と協力して校舎・体育館類焼を防止した。道路・市電側の建物に火の粉を被ったときも「火たたき」で消火に努めるなど、防護団・応援生徒の献身的な活動により、施設・校舎を空襲の被害より守ったため、幸い学院は焼け残った。

ある朝登校したとき朝礼台のそば等の校内に、不発大型焼夷弾が四発落下しているのが見つかったが、大事に至らなかった。また空襲後に校庭で不発の一トン爆弾が半分埋まった状態で見つかり、目撃した生徒の話も聞かされた。

空襲の度に教職員住宅も戦災消失が続出して、第二学年生徒は焼跡整理や救援活動に、その都度出動した。宅地内に落ちた不発焼夷弾も処理するなど、危険も顧みず作業し、幸い事故もなく、罹災された各先生・職員の方々に感謝された。不発焼夷弾は、被災救援活動奉仕中、その他のいたるところで見付かったが、二年生は結構器用に中身を取り出し、処理に手慣れていた。

（焼夷弾は、隣組の防空演習などで、形式や性能について教えられていた。それらは黄燐・油脂・エレクトロンの三種類だが、米軍の投下した焼夷弾はアルミテッド、黄燐、油脂の三種類で、アルミテッドはアルミ粉末と酸化鉄の混合物、油脂は油脂・重油・ガソリンの混合物、黄燐は重油・タール・固形油脂を混合した物で、二年生達が処理した焼夷弾はナパーム性油脂焼夷弾が主であった。気付かず、後で知り危険な事をした。本能的に黄燐やアルミテッド等の高性能焼夷弾には手を出さなかったのが、大事故を起こさずに済んだ理由ではないかと思われる。）

三月制令で中学以上授業一年停止決定

昭和二十年、二学年の新学期授業が始まり出したが、間もなく中学以上授業一年停止決定が実施され、学院の生徒不在の中学部校舎は、中央通信講習所に転用された。校門

左手、専門学校校舎の一部は陸軍旭部隊、石田隊兵舎となり、右手運動場は、軍の防空壕が多数掘られた。疎開できない残留生徒達は、授業放棄させられての動員となり、動員先が京橋区役所に決まる。

京橋区役所（現中央区役所）管内は、銀座、築地、京橋、月島地区。銀座への初空襲は昭和二十年一月二十七日約七十機が爆弾・焼夷弾を混投し、有楽町駅、地下鉄銀座駅では多数の死者が出た。

私は空爆後、銀座を通りかかり、銀座四丁目交差点（現在のサッポロ銀座ビルの中央通り新橋寄り歩道）に爆弾で大穴が開き、覗くと地下鉄銀座線の線路が丸見えだった。駅は立ち入り禁止で、構内が大惨事であった事は後で知った。その後、銀座は、三月九日～三月十日、五月二十四日～五月二十五日にも空襲された。東銀座から築地にかけては特に被害がひどく、一面焼け野原であった。銀座四丁目交差点角も三越銀座店は焼け、服部時計店（現和光）が焼け残りで目立つ以外はいたる所が焼けて、歌舞伎座と東劇も焼け、見渡すと焼けビルだけが所々残る状態。

その区内にある焼けビルを清掃するのが動員目的であった。教職員一名同行で、連日警戒警報、空襲警報、発令、退避、解除の繰り返しで危険な中を、整然として勤労作業に従事した。作業は毎日九時に区役所集合。四時に区役所に戻り解散。モッコとスコップを持たされ、数班に別れ、戦災ビル内の瓦礫排除清掃に、埃と汗まみれの重労働。報酬は三角定規位の薄い大豆いり雑穀製餅風の小さな代用食一日二枚。それも四時に作業

が終わると、当番役が区役所より大八車を引き、歌舞伎座前、銀座四丁目交差点、数寄屋橋、日比谷交差点経由で、日比谷公会堂にある防衛司令部へ人数分引き取りに行く。しかし、陽気が暑く、区役所に一晩保管し翌日に支給されたので、臭く糸を引く代物。だが、当時は食糧は全て少量の配給制。お米もほんのわずか。それも玄米ばかりで、三合ばかりを一升瓶に入れ、はたきの棒で突いて精米した。カボチャの蔓、芋の蔓なども食糧にし、飢えを凌いでおり、動員で渡された代用餅は、それでも貴重な部類だった。

八月　六日　広島原爆投下

原爆投下翌々日、京橋交差点そばにある「京二ビル」で作業中に空襲警報。全員外に出て見上げると、京橋の明治屋上空にB29が一機飛行中。丁度パーッと一つ落下傘を投下するのが見えた。新型爆弾は、広島では落下傘で投下され、大被害の情報だけであり、同じ新型爆弾と思い、持ち物を放り出し、神田駅まで何人も走り逃げた。広島の新型爆弾は後に原爆と知るが、その時は情報がなく、危ないと夢中で全員バラバラの方向に逃げたが、翌日になり、皆は新型爆弾と思ったと話していたが違っていて良かった。広島投下爆弾が原爆であると参謀本部は知りながら隠し、白い物を着るか物影に隠れれば被害を少なくすると発表していた。

八月　八日　ソ連宣戦布告参戦

八月　九日　長崎原爆投下

八月　十四日　ポッダム宣言受諾

八月　十五日　終戦玉音放送は、全員午前中で作業を中止し、三十二、三度の暑さのなか、「正午に重大放送がある」との事で、銀座四丁目の服部時計店（現和光）前に集合し聴いた。ビル入口上部に設置された雑音の多い、性能の悪い小型スピーカーより流れる「君が代」のあとに、玉音放送。聞き難かったが、放送終了後に引率学院職員より概要解説があり、敗戦を知った。

八月　十六日　玉音放送がなされた翌日の朝、区役所前に何時ものように集合していると、様々な機種の何十機もの日本陸海軍戦闘機が、操縦士の顔が見える位迄に超低空で飛来し、徹底抗戦の檄ビラを銀座地区中心に撒きながら乱舞した。日本軍の戦闘機は昼間一万㍍高空を飛ぶB29相手に攻撃するとき、散発的に時々キラキラと光る位しか東京上空では見ていなく、二月からのB29と艦載機の戦爆連合の空襲になってからは、日本軍機の姿は夜間迎撃でも見ていなく、「何処にこんなにいたのか」と、その時は、一瞬初めて見る、精悍な、形式も新しい戦闘機の威圧的な轟音と迷彩等に圧倒され、まだ敗戦感はなく、変な気分で居合わせた全員が一様に驚き見ていた。動員作業は続行されたが、区役所よりの焼けビル清掃を打ち切り、数日後に連合軍進駐受入れ準備のため、勝鬨橋際にある海軍経理学校を連合軍兵舎に模様替えすべく、労働派遣された。まだ海軍経理学校は通常通り戦時体制で軍事訓練続行中であり、十四才の子供が進駐軍受入準備作業に動員されて来たのに、海軍経理学校側から驚かれた。校内を探索すると、軍の酒保があり、手に入らなくなっていた文房具類とノートも販売されていた。動員生も購買可と言われて感

激。藁半紙を切り、ノートの代わりにしていた学院生は、手持ちの小遣で本格錨印ノートを数冊宛購入した。最高の収穫であり、戦後の最初の授業に助かった。海軍経理学校動員を最後に、中学部二年生の勤労動員は全て解除になった。

八月　二十日　灯火管制解除

九月　八日　米第一騎兵師団、焼野原の銀座に進駐。廃墟の中、焼け残りビルを次々接収。玉音放送を聞いた服部時計店前の銀座四丁目交差点角では、米軍ＭＰがスマートな動作で交通整理開始。

九月より授業は再開されたが、教科書も満足に無く、たとえば漢文の安藤先生の授業の時間は、先生が黒板に書かれた漢文が教科書だった。数学の時間も教科書が間に合わず、教師が黒板に数字と方程式をどんどん書き出す。黒板一杯に書き終わると消し、またどんどん書き出す。授業終了の鐘が鳴っても生徒はノートに書き写すのが精一杯であった。音楽の時間も先生はラジオで盛んに流れていた「浜辺のうた」などを教材にされたりして苦労されていた。

記憶にある我々の班の動員作業場所

京橋……日進閣ビル　　日劇並び……トウ電気館ビル

京橋……京二ビル　　銀座……香蘭社ビル

銀座…実業の日本ビル　　その他

中学部入学以来、六十二年の年月が経過しました。毎年開催される同期会で、断片的にですが、必ず戦時中及び動員の頃を思い出し、話題となりますが、残念ながら何も記録がありません。昨年十月から本年十月までに、七名もの同期生が永眠されました。歴史の証人・語り部も年々少なくなると思い、我々同期生の戦時中における学院生活などを、ほんの一部ではありますがメモしました。

平成十八年十月

戦後の明治学院事情座談会（二〇〇七年十月三十一日開催）

久山　それでは今日の戦後の明治学院事情についての座談会を始めさせていただきたいと思います。私は明治学院歴史資料館の館長をさせていただいております、文学部英文学科の久山でございます。

今日は天気も非常に良く、学園祭の準備で華やぎ賑う中をここにお集まりいただき、誠にありがとうございます。明治学院の歴史資料館は、ただ今、『明治学院百五十年史』の準備をしております。今年は百四十四年目ということになります。六年まだあると申しながらも、最後の一年間は出版にかけての最終段階でございますので、実質的にはあと五年ということでございます。お集まりいただいた皆様方には先般お知らせいたしましたとおり、歴史資料館は様々な活動をしております。今日は色々なことについても歴史資料館をお帰りの際にのぞいていただきたいのですが、「『明治学院九十年史』のための回想録」を編纂いたしましたときに、『明治学院百年史』のあと、まだ抜けている部分があるのではないかという思いが残りました。そして『明治学院百五十年史』においてその「抜け」を補い、そして、その当時の方々が本当に経験した様々な声を、特に戦中・戦後にかけましてまだ記録として残していないということがわかりましたものですから、今回は皆様方が直接体験されたことを本学の歴史の中にとどめたいと思い、今回のような座談会を企画しました。

昨年は、とりわけ戦中に関して、座談会をいたしました。明治学院が『心に刻む』という冊子において学院の歴史の検証をしていることはご存知の通りでございます。それが社会から高い評価を受けていることも事実でございます。他の学校はそういうことをあまりいたしません。ですから、明治学院が大きな戦争の中でどういうことをしたのか。また、戦争に向かう中で、ご存知の通り「訓令十二号」など様々な文部省からの、国からの抑圧といいますか、弾圧に堪えてまいりました。しかし、その反省もさることながら、その中で先生方、そして生徒達はどういう想いで毎日を過ごしたのか、ということを知りたく思い、昨年は戦中を中心といたしまして、その中でご苦労をされました先生方の思い出や、また、皆様方の本音を座談会として残すことに成功しました。それは今年度末に『明治学院歴史資料館資料集』第五集として刊行される予定でございます。そのなかには優れた様々な資料、在籍されていた当時の日記であるとか、本当に私たちが思いもかけなかったような資料がございました。

その結果、運営委員会で話し合いまして、ただ単に戦中だけではなくて、これまで手薄であった戦後も含めて、先輩の方々にお願いして、様々な資料の収集を兼ねて生の声を残そうという事に決まりました。本日は皆様方にお集まりいただきまして、戦中から戦後、特に戦後の混乱期のなかで本当に苦しい時代、これは学院にとってもそうでしたし、人々全てにとってもそうだったわけですが、実際の学生生活はどうであったのかということを…抽象的な話ではなくて皆様方の日常で見聞きし、体験を通して感じられたこと、これを残すことが一番大切であると私たちは考えました。本日は、そのような点から、私たちの明治学院の戦中・戦後、特に戦後の在り方について皆様方に証人として発言していただきたいと、そして忌憚のないご意見を、様々起ったこと、感じられたことを率直に述べていただきたいと思っている次第でござ

います。

そのような考えでございますので、食事の後、座談会が始まりましたら、記録用にテープを回させていただいて、録音させていただきたいと思います。そしてその記録を、今年度末に刊行される昨年度の座談会と同様に、皆様方にテープ起こしをした原稿にしてお渡しして、もう一度修正したり、言い足りなかったことを書いていただいて、そしてそれも、同じ資料集として出版したいと考えています。また、皆様方が本日お持ち下さった様々な貴重な資料も資料として、載せたいと考えております。昨年度の座談会は、現在、校正段階に入っておりますけれども、『明治学院百五十年史』への貴重な基礎資料となります。『百五十年史』編集委員会の先生方がそれを使って、今まで手薄だった戦中・戦後の部分を『百五十年史』で埋めていって欲しいというのが、今回の資料館としての立場でございます。

本当にお忙しい中、わざわざお集まりくださり、また、貴重な資料などを持ち寄っていただきましたことに深く感謝いたします。それらを適切に善用し活用して、これからも起こりうる様々な事態に、明治学院としてはどのように対処していくべきかということを、次の世代に伝えていくために活かしたいと存じます。今日皆様方に集まっていただき、当時、苦しかったこと、厳しかったこと、しかし明治学院らしい雰囲気があった時代のことを、心おきなく話していただくことが、これからの明治学院の学生諸君にとり、今、外で学園祭を一生懸命準備をしている学生たち、そして彼等の子供たちの世代にも、非常に重要だと思います。そのようなお願い、私たちの図々しいお願いでございますけれども、先輩の皆様方にお願いし、そしてなんとか『百五十年史』できちんとした形で、残しておきたいと考えています。

明治学院の歴史については、先ほどお話ししました『心に刻む』など公にしておりますものを、お手元

に先んじてお配りさせていただいてございます。また、これからの明治学院を創るためのものとして、一つここに「明治学院歴史資料館案内」というパンフレットを作成いたしました。このパンフレットを開けていただくとわかるように、歴史資料館、この資料館が載っておりまして、中には展示室の様子も写真でわかるようになっております。ここにヘボン、井深も含めて、フルベッキやブラウンなど諸先生方の肖像画を初めて使わせていただいております。

ここにありますように、只今、資料館は大学史編纂の動きにあわせて資料の形態変換を進めております。要するに、資料を今までとは違った形で残していかなければならなくなりました。文書も、今までしたらマイクロフィルムとかございましたが、今はもうＤＶＤにしてデジタル化して残さないといけない。しかし、そうしておきますと、例えば、写真資料の様々な、例えば恵比寿の東京都写真美術館等、色々なところから問い合わせが来た時にでも対応できるようになっていきます。

さらに、新しいメディアへの対応も漸次しておりますので、少し御覧になっていただければと思います。ホームページにもこのパンフレットと同じことが出ております。また思いもよらぬことですけれども、学内の先生方でもこのパンフレットを見られて、「いやぁ、うちの祖父がフルベッキと関わりがあった」とかおっしゃられて、九州地方の祖父様の日記など持ってきて下さったりします。それから、これを見て、実はこの間も、所蔵資料リストの一番下にあります沖野岩三郎先生のご遺族の方やお孫さんが、残っていた資料を持って来てくださったということもございます。ですから、明治学院歴史資料館が取り組んでおります新しいことが、このパンフレットやホームページを通して色々わかってきます。

ところで最近わかったことを一つ御紹介させていただきます。「日本のシンドラー」と呼ばれておりま

す杉原千畝が、リトアニアでユダヤ人にビザを発行したということはよく知られております。しかしそのユダヤ人たちは、日本に来まして、神戸で足止めを食らってしまうのです。神戸の役人が彼らをアメリカに出さないんです。その時、大活躍いたしましたのが小辻節三という、実は明治学院の神学部を出た牧師さんなのです。彼は後にユダヤ教徒になるのですが、彼はヘブライ語が非常に得意で、ユダヤ人たちを助けるのです。親戚から借金をしまくって、三日三晩のその役人たちを接待漬けにして、そして最後に全員を通過させる。そんなことは、まだ日本では知られていませんけれども、私たちが調べ出すと、本当に明治学院の卒業生が色々なところで、世界的にではあるが目に見えない努力をしていたということがわかりました。そして、そういうことを学生たちに伝えますと、「あぁ、そういう気骨のある人物を輩出した学校であったのか」ということがわかり、身をもって明治学院が何たるかを知り、誇りをもって卒業していくということでございます。

実際このパンフレットも、広報の方も非常に活用していますし、それから、地方の高校生が修学旅行に来て、「キャンパス・ツアー」というのをしております。つまり、「東京に来たら自分の受けたい大学を見て廻ろう」というようなことを、昔のようにバスで回るのではなくて、グループに分かれて見学しております。その時に、このキャンパス・ガイドは非常に役立って、若い人達は「明治学院は素敵なキャンパスだ」と、そして「こんなに歴史が、ヘボン式ローマ字とか全部ここに起源があったのか」などというようなことにも気がついてくれます。

話が多岐にわたってしまい恐縮です。要は、資料館としては多くの新しい試み、努力などをしておりますが、その一つとして、「日本で一番古いミッション・スクールとしての明治学院が、どのように戦中・

戦後を生き抜いたか」という「生の声」を留めたいということでございまして、色々な事をアピールしております。もし皆様方、また同期の方に「こんな資料残ってるんだけど」という品がありましたら、その当時の、本当に小さな卒業証書であっても、本学には貴重な記録でございます。様々なパンフ、それから先生方とのお写真などございましたら、本当に私たちは資料に飢えておりますので、「こんなものでも」とは思わずに、お声をかけていただけたらと思います。

以上、アピールを含めまして、様々な事を申し上げましたけれども、どうぞ今日は皆様方が体験したこと、この明治学院で起ったこと、良い事も悪い事も含めまして私たちの歴史だと思っておりますので、それを受け止めて、伝えるのも私たちの仕事だと思いますので、どうぞ忌憚のないその当時の在り様、そして皆様方の想いをお伝えくださるように切にお願いする次第でございます。繰り返しが多くなり申し訳ありませんでした。また予算が限られており、ささやかなお弁当ぐらいしかご用意できませんでした。申し訳ないことですが、どうぞ重ね重ね申し述べましたような私たちの想いを汲んでいただき、この午後を過ごしていただきますよう切にお願いする次第です。私は、所用がありまして、このあと直ぐに出かけなければなりません。皆様とご一緒する時間がなくて申し訳ございません。歴史資料館スタッフの原さんと野田さん、また後から遅れてくる『明治学院百五十年史』編集委員会のメンバーの中にも座談会を聞きたいという方がいらっしゃいます。どうか宜しくお願いいたします。長々とお時間をとりまして恐縮でしたが、開会にあたり、挨拶とさせていただきます。

原　さっそく午後の座談会を始めさせていただきます。私は昭和三十四年に明治学院中学校に入学、四十

年に明治学院高校、そして昭和四十四年に大学文学部フランス文学科卒業の一回生でございます。原豊と申します。今日、司会をさせていただくのですが、マイクをそれぞれお喋りになる時、引き寄せて、喋っていただければと思います。

最初に、自己紹介ではないのですが、それぞれお顔とお名前、ご存知だと思いますけれども、一応このリストの上から、後藤進先生でございます。藤本美彦さんでございます。副島秀夫さんでございます。望月克仁さんですね。それから石田豪司さん。国見博さん。中村弘さん。よろしくお願いいたします。それでは、本日の会のやり方なのですが、まず、上から順番に、後藤先生から十五分ずつぐらい。先生の場合ですと、戦前の昭和十七年中学部卒、その後、今の新潟大学工学部に行ってらっしゃいまして、昭和十七年くらいまでの明治学院の思い出を、できれば戦後、明治学院高校の教員としての思い出を一緒にお話ししていただけるとありがたいのですが。よろしいですか？それでは後藤先生から、十五分スピーチでも。十五分スピーチと言っても喋り出すと、中には三十分になる方も出てきますが、その辺は適宜調節をお願いしたいと思います。

後藤　後藤でございますが、今一時二十分ですから、三十五分までね。ちょっとオーバーするかもございませんけれども、あんまりインパクトのない話をしますので眠くなってしまうかもしれませんが、勘弁していただくということと、自分のことを中心に話したいと思いますので、皆さんのようにレジュメにはなっていませんので、ズラズラっと喋らせていただきたいと思います。自分中心で、あまり学院に関係ないこともあるので、その点も勘弁していただきたいと思います。

私の中学部時代の思い出、あと、二、三の先生方のお噂くらいをお話させていただきます。今、原さんのおっしゃった所まで行かないかもしれませんけれども、私は「明学で勉強し、卒業できたことが良かった」と今、本当にしみじみ思っているのです。皆さんもご承知の通り、明学は聖書の教えに基づいて、この学校が教育をされているということを、御承知だと思いますけれども「自分を愛するように隣人を愛せよ」と聖書にあります。明学は「特に試験のための勉強だけではなくて、他人を思い遣ったり、他人のことを考え、心を養う教育によって人格形成がなされていた」という学校でございます。そういう教育の下で、私は少なくとも学生生活をのんびり過ごすことができまして、「明学は本当に良い学校だった」と私は思っております。

それで、先ほどの雑談のところで、藤本さんにも話したのですけれども、私が明学を選んだ理由としては、何しろ明学の事は何にも知りませんし、周りにクリスチャンもいませんでしたから。だけれども、親がなぜか明学を勧めてくれたのです。そういう一つの動機としては、私は西小山の駅の近くに住んでいましたから、「通学に便利である」ということが一つと、それから専門部、今の大学でございますか、「大学があるから、中学と高校を卒業した後、入りやすいのではないか」というようなことがあったから選んだのではないかと思います。ただ、入ってみて、先ほど申しました通り、「本当に明学で良かったな」と思っているのです。

入試のことなんですが、私は中学一年の時の印象がものすごく強いのですよ。中学一年に入るために入試があるのですが、その入試では募集人員が二百名。それで受験者数が二百五十名くらいだったと思うの

ですが、今とは大分人数が違うと思います。最近は三倍とか五倍とかいうような倍率でございますから。ですから、先ほども申しました通り、今だったら合格できなかっただろうと思っているのです。『明治学院百年史』を見ますと、大正七年から十五年の古い倍率を見ますと、三倍とかいうようになっていますから、「そうとう昔は難しかったのだな」と思っています。

私が一年で入学試験を受けたときのことを話します。学科試験の後、面接試験があるのですが、その面接官の前に椅子があり、そこに座ると同時に、面接官が、「水の利用についてどうなのですか」と聞いてきたのですね。ところが私は先生からそういう質問が聞かれるのではなくて、家族のことを聞かれると思って用意してきたのです。そんなことを聞かれたので、どぎまぎして、しっかり答えられなかったのですね。その面接の先生は、後でわかったのですが、理科の稲川先生という明学の卒業生の先生だったのです。明学の経理部長をされていた稲川さんの本当のお兄さんで、ここにいらっしゃる卒業生の方も習ったのではないかと思うのですけれども、稲川先生は私が明学に入って初めてお目にかかった先生でした。と同時に、私が昭和二十三年に中学と高校の教員として就職したときに、先生がいらっしゃいました。また当時の明学には、その稲川先生を教えた先生がたくさんおられたというような状況であり、古い先生がたくさんおられました。

合格しますと、入学式を迎えるわけでございますけれども、皆さんは入学式を覚えてらっしゃるかわかりませんが、小学校卒業後、まだ月日の経ってない一年生の私が親と一緒に、そこにありますチャペルに入れられまして、不安な気持ちで着席して、古風で立派な講堂に目を見張っていたんですね。それで入学式がオルガンと共に始まるわけです。それがキリスト教礼拝方式で始まるんです。私にとって、これは驚

きでした。私が明学の教員になってからは、当たり前のことなので驚きませんけれど、その時は礼拝形式で入学式をやられ、本当に驚きました。それだけに強い印象が残りました。それで当時、院長はアメリカ人のウィリス・G・ホキエ神学博士ですね。ホキエ先生は学院長事務取扱でした。中学部長は、今で言う校長先生ですが、それが都留仙次先生でございます。祝辞はホキエ先生でございました。ホキエ先生は流暢な日本語で祝辞を述べられた。これも驚きでした。我々からいうとアメリカ人が日本語で祝辞を述べるなんて考えてもみなかったし、あまりそういう外国人と接していませんでしたから驚きでした。それで、先生がおっしゃるお話の中に、次のようなことがございました。昔、中学部の校舎の正門の入り口の三階のところに、皆様覚えてらっしゃるかわかりませんけれども、大きな電気時計があったのです。その電気時計は、「生徒が授業に遅れないように、生徒に時間を知らせるためだ」とおっしゃられました。また、その電気時計を例にされましてね「毎日毎日、一秒一秒を大切にして、この学院で、白金の丘で勉強して過ごすように」ということを話されたんです。今でも、その院長の話を思い出します。

私、一年の時の印象が非常に強いんです。毎朝、明学は礼拝がありまして、そんなもんですから、私たちは卒業後、クラス会があると、必ずと言ってもいいほどに、印象に残っている礼拝を話題にします。日米戦争が、大東亜戦争ですけれども、昭和十六年十二月八日、一九四一年、私が五年生の時です。戦争が始まっても、礼拝はずっと五年間続きました。私たちが十代の思春期で、感受性の強い中学生の大事な時期に受けた礼拝、あるいはキリスト教教育と言ってもいいでしょう。そういった経験は、人間形成の上で非常に影響が大きかったと私は考えているわけです。一年生ですから、あまり讃美歌を上手く歌えないのですけれども、チャペルで『明治学院用讃美歌』というのがあって、いま残っているかどうかわかりませ

んけれど、それが上級生の歌声に連れられて、歌えるようになってまいります。それでオルガニストでありますが、これは先生の話になりますが、オルガニストは安部正義先生なので、讃美歌を歌うテンポが、どうしても私たちの方が遅いのですね。そんなものですから、よく「もう少し早く歌え」なんて注意をされたことを思い出します。そのチャペルで、私は二年間音楽を習いました。皆さんご存知かと思いますが、安部先生は、「馬槽のなかにうぶごえあげ」という讃美歌百二十一番の作曲者で有名な方なのです。私どもはその讃美歌の四百六十一番を英語で習いました。「主われを愛す」というのを英語で歌うのです。それで、中学一年生なのに英語の歌が歌えるので、近所の友人から「明治学院はすごいな」なんてことを言われまして、ちょっと得意になったことを思い出します。音楽ではそういうものを習いました。それで先生の渾名は、『明治学院歴史資料館資料集』第二集に出ているので、言っても良いのでしょうけれど、「印度うぐいす」といった渾名がございましたが、先生は『明治学院歴史資料館資料集』第二集の「我が思い出」のところで、この渾名を喜んでおられました。

ここでチャペルの昔のオルガンについて言いますと、あのオルガンは吹子式オルガンで、小使[ママ]いさんが吹子の棒を左右に押してですね、空気を送って、オルガンを安部先生が弾くのです。確か大久保さんという方だと思うのですけれども、彼は学院の鐘を正確に打つことで有名な小使[ママ]いさんでいらっしゃった。

私は一年の時の事ばかり話す事になりますが、中学の授業はわかりやすくて面白かった。それで一年に入って中間試験があるんですけれど、初めての中間試験は一日、皆さんあまりこんなことを言っても時間の無駄になるかもしれませんが、二、三時間の試験だけで帰宅できるのです。これは一年生に入ってものすごい驚きです、これだけで良いのかということで。それから、明学に入って、井の中の蛙だった私が、

私の知らないことをたくさん知っている友人、それから読書家、親切な友人、そういう出会いがあり、教えられました。もうこれは小学校での友達同士の交わりにはなくて、さすが中学という実感を持っていました。世界観というか、中学に入って、一年生になって、ものすごく視野が大きく広がったことを感じました。

次に、二年生になりますと、クラス替えがあるのです。これは皆さんの時にもあったかわかりませんが、当時は全学年なのです。成績順で四クラスありましたけれども、平等に生徒が振り分けられるんです。成績の良い者は後へ座って、成績がだんだん順次悪くなってくると前へ詰めていくんです。今だったら差別のように見えるかもしれませんけれども、当時の我々はあまり気にしませんでした。クラス替えがあったおかげで、同期の人の名前はほとんどわかりました。だから同期会やなんかがあったりして集まりますと、久しぶりに会ったような連中でも、昨日会ったような話し方をするのは明学生の特徴だと私は思うのです。

それから、教科で言いますと、特殊な教科で、一言だけ言いますとね、軍事教練がございました。私の中学時代には、今の学校の教科には絶対無い、軍事教練という授業科目が週に一回ありました。私は昭和十二年四月から十七年三月まで中学生ですけれども、軍国主義日本においてですね、中学生といえども、兵隊となって「いかに敵と戦うか」の方法が教えられたと思うんですね。三八式歩兵銃というものがあるんですが、それだとか、機関銃・軽機関銃・擲弾筒という、皆さん見たことがあるかわかりませんが、その使い方や構造を学びました。小銃を持ったまま地上を這って前進したり、十人ぐらいの分隊が、展開して敵と戦う方法を習ったり、木銃といって木の銃の形をしたやつなのですけれど、木銃を使って人を突き殺す銃剣術の練習、あたかも一兵士となって戦争するかのような方法を学んでまいりました。いかに自分

の身の安全を守るか、敵をやっつけるかという訓練なのですね。恐ろしいことですけれども、それが当たり前になっていました。「鬼畜米英という敵と戦うのが聖戦」というように洗脳されていったわけですね。これも教育の恐ろしい力だと思うんです。戦いは聖戦ではありません。聖戦は聖書の「聖」ではありますけれど、人間を憎み、殺すことを良しとするようなことを徹底的に教えてきたのが、日本の教育なのだと思う。そういう酷い訓練授業も教科の中にありました。この教練の集大成に当たるものに、軍事査閲というのがあるのですね。軍から派遣された査閲官が明学の教練を評価するのです。そして軍関係者にその成果を発表するんですね。そういう様なこともありました。そういう中で、昭和十六年十二月八日、大東亜戦争、日米戦争は私が在学中に勃発したんです。ここから物資が足りなくなって、私たちの生活が不自由になり、苦しくなってまいります。また、学校時代に野外教練というものもございました。これも年間行事の一つでございました。私ども生徒は軽井沢の原野で紅白に分かれて、今では考えられないような模擬戦争を展開いたしました。

一年の時には、伊豆方面の二泊三日の旅行というのがありました。これは明学での非常に楽しい思い出で、これが修学旅行です。これも一年の印象が強いのですけれども、このときは六月一日から三日の二泊三日で、二泊三日は三年位まで続いたと思いますが、仲間作りをするためかひたすら歩かされました。強羅から箱根の仙石原を通って、箱根神社まで歩き、そこで集合して点呼を取ってから二子山温泉まで歩いて一泊します。そして翌日、弁当を持って三島神社まで歩く。途中、道を間違えたり、丘を乗り越えたり、険しい道を通ったりして、今思うと学院のやり方は無謀だなと思います。中学一年生と言っても小学六年生を卒業してから、わずか二ヶ月くらいしか経っていないわけですからね。しかも、生徒に地図も与えず

に歩かせたのですから。なんだか無謀だなと、今では思えるのですけれど、学院の旅行の仕方がそうなのだとも思いました。そのおかげで「自分でやるんだ」、「おのがじし道」ではありませんけれど、友人を作ったり、知らない道を歩んで苦労するというようなことを学びました。なにしろ苦労したということが印象に残っているのです。一年生の修学旅行は散々でありました。その後、五年生の修学旅行は、戦争が激しくなり、日米戦争が始まろうとしている十六年の五月、六月でございますから、「鍛錬旅行」と名も変わりました。服装も通学の時と違って、今では考えられないと思うんですけれど、ゲートルを巻いて、軍事教練のような服装でした。

私の周りを取り巻いておられました先生で、中学部長は都留先生なんですが、「都留先生は何も悪いことをしていない朝鮮半島の学生を、大正十二年の大震災の時にかばって、助け、保護した。」そのようなことを『百年史』で読んだ事があるんです。先生は「神様は人間をご自分の御姿に作られたという風に、どんな人間も神から与えられた一個の人格として尊重されるべきなんですよ」とおっしゃった。都留先生のそういう素晴らしいお人柄がうかがわれるんですが、その偉い先生に、私達は中学四年の時に聖書を習った。もの静かで、落ち着いた振る舞いで、その話し方といい、非常に素晴らしい講義でございましたけれども、軍人と激しい渡り合いをしたような、そんなようには思いませんでした。

そこで、ちょっとまた私事になるんですが、担任は、中学一年の時は渡辺勇助先生、二年の時は荒井惟俊先生、三年の時は宮崎栄先生、四年の時は由布保先生、五年の時は宮崎栄先生ということで、五年間で英数専門の先生が担任で、特に宮崎先生の影響が私の進路に関わったのではないかと思っております。私は理工科に行ってまいりましたから。宮崎先生は教え方が非常に素晴らしいのです。中学部で私の三年後

輩で、明学で一緒に教員をやっていました神田先生という方がおられるのですが、皆さん習ったかもしれませんけれども、その数学の神田先生が「教え方では宮崎先生が抜群である。敵わないよ」と言っていました。宮崎先生は担任でもございました。その先生は生徒指導にも優れていました。我々は服装に違反をしてよく怒られたんですけれど、先生は、激しく怒ったりはしないのです。「明日までに直してこいよ」といったようなことを優しく言ってくれるものですから、我々は先生に抵抗できなくて、すぐ直してしまうのです。それに先生はお化けの話が上手で、講義の切れ目に話をしてくれると試験範囲が縮まるのを期待しながら、あさましくも喜んでいたわけです。それから、授業の合間に雑談かもしれませんが、話をしてくれた先生の中で、高等学部の教授の先生ら二人ばかりに私は習いました。一人は後に学長になられる若林先生。私の中学三年の時、教科として西洋史が入ってまいりまして、西洋史の先生として若林先生が教えてくださいました。授業中、雨模様で教室内が暗く、教科書やノートの字が見えなくなっていたのです。電灯はありません。今でいったら「教育設備が悪い」といって文句が出るところなんですけれども。それで突然暗くなって見えないものですから、若林先生が「じゃあ話をしよう」ということで、雑談をしてくれるのです。当時、中学部の授業に高等学部の教授が講義に来られるのです。五年生の時、高等学部の小出正吾というきれいな字を板書される先生に僕は『伊勢物語』を習いました。英会話では、明学は宣教師が英会話をしてくださるので、その点では非常に特色があると思うんです。よその学校では、生の英語が聴けるというのはないわけですから。そういう意味では素晴らしいことです。英会話の先生では、何かの機会に写真が出てくるのだろうと思うのですけれど、ミス・ダロウという先生と、もうお一人はMrs. Oltmansという先生でございました。この先生は戦後来日され、高等学校で教員としてご一緒い

たしました。

クラブ活動は、私は水泳部に所属していました。水泳部というのは夏休みだけの活動なのです。千葉県館山の那古船形で、一週間から二週間、大和屋という旅館に合宿するだけの水泳部です。低学年の時代は二週間です。初めの頃は、一水流という流派の古風な泳ぎ方を教わります。これは一級から五級まで級別に練習します。一年に一級ずつ昇級するので、それが楽しみで毎年参加するのです。顧問は由布先生と永井先生。さきほど「ナガパン」と皆さんがおっしゃった先生です。あと、コーチの先生が来て教えてくれるのです。そこでは夏期の宿題がよく出ます。それも先輩がいるものですから、聞いてよく勉強しました。おもしろいことに、コーチの中に、後に映画俳優になる池部良さんがいらっしゃいました。私は彼から水泳を習いましたけれども、彼は私が中一の時、立教の予科の一年生か二年生だと思っていますけれども、その合宿の最終日の前日が遠泳をする日なのですね。それで、館山海岸から片道三時間半くらいかけて遠泳をするのです。それで、完泳したときは満足感があります。泳いだ者にしかわかりませんけれども。卒業アルバムの時には水泳部の写真を校歌碑の前で撮ったのですが、素晴らしいので皆さん校歌碑を後で見に行ってから帰って欲しいのです。校歌碑の前で撮った写真がこれですね。後で見ていただきたいと思うのですが、昭和十六年度の私達の卒業アルバムにあるのですけれども、校歌碑の前なのです。私も卒業後一年間コーチをさせて頂きました。

さて、私の進路なのですが、私は理数科系志望だったので、落武者というか、東京の学校に入れないで、今の新潟大学工学部、元は国立の長岡高等工業専門学校の応用化学科に入って卒業しました。卒業が昭和二十年九月、敗戦の年です。エンジニアとして就職したかったのですが、東京の会社や工場は戦災で破壊

されておりまして、新規採用は断られました。卒業免許と教員免許だけは持って、それこそ寂しく停電で真っ暗な東京に戻ってまいりました。

たまたま明学へ恩師に会いたくて、遊びも兼ねて行きました。宮崎先生から「明学に来ないかな」という風に言われたものですから、「教員になるなら母校で」という気になりまして、明学に就職しました。それが昭和二十三年四月、以来三十七年間も、明学にお世話になり、昭和六十一年（一九八六年）三月に定年退職して、講師として後四年残ったのです。そういう形で終わります。

戦後の教科書のことですが、藤本さん達のときには高等学校での教科書があまりなかったと思うのです。私が昭和二十三年に就職して二年目の、昭和二十四年度の高三の教科書でも揃っていない科目がありました。私の専門の化学がそうなのです。それで私は独自に、原子の構造を中心にしたテキストを自分で作って、原子や分子を取り上げて一年間講義をしました。この年には、これは望月さんの学年クラスだったと思うのですが、佐伯君が東大で、小泉君と赤池君が東京工大に二人入ったのです。教科書のない時代でも、割合理系の方へ行ったように思います。

以前高等学校でやっていた山中夏期学校についてお話しします。これは教育の一環としてやっておりますが、高等学校一年生の夏休みの三泊四日を使って山中夏期学校というものをやっているのです。ここでは、色々テーマを掲げ、命の尊厳とか、共に学ぶというようなことをやって、クラスの連帯、団結、友だちづくり、そういうことから山中夏期学校をやっております。ここで特徴的なのは自炊で、後でそれは変わりますけれども、私がいた頃はそうでした。生徒が自分達で献立を考えて、実際に料理を仕上げていく。今は男女共学ですけれども、当時は男子だけですから、なかなか大変だったようです。だけれども、彼等

は家に帰って来て「お母さんやお姉さんたちが家事をやっているのが本当に大変だな」とわかったのですね。そういうことを父母の方たちがおっしゃられまして、非常に喜ばれました。それだけに生徒は苦労が激しかったのだろうと思います。山中夏期学校を経験した生徒は本当に明学の高校生らしく、しっかりたくましく見えてきます。それだけに、山中夏期学校は高等学校の教育の一環としてやっていることに大きな意味があるのではないかと思います。今、山中夏期学校はどうなっているか、今年、この二、三年のところはわかりません。そんなところで、ちょっと長くなりましたが終わります。

原　ありがとうございます。

後藤　あまり山のない話ばかりでつまらなかっただろうと思うのですけれど、私は「明治学院に学んで、本当に良かった」という想いで。明学だからこそ、私を作ってくれたのではないかと思います。どうも長くなってすみません。

原　いえ、とんでもない。それで、今の後藤先生のお話に対してご質問はございませんでしょうか？ここでちょっとまとめて質問をしていただきたいと思います。私の思い出ですと、宮崎栄先生は高校の時の数学の先生で「ゾウさん」という渾名をつけられておりました。僕は数学ができなかったものだから、でも皆さんに聞くと、あんな立派な先生はいないという感じでした。僕が覚えているのは、大森駅前の坂を歩きながら、ステッキを突いて、パイプを燻らして、英国紳士風の方で、帽子をきちっとかぶられて、立派な先生だなというイメージがございました。

後藤　一言で言うと「優しい」です。怒ったところを見たことがないですし。中学校三年と中学校五年の担任だったのです。注意されたことはありますけれど、怒られたことはない。悪いことをして、言われた

ことはありますけれど。宮崎先生に対してはそんなところです。

原　ありがとうございます。それでは、他になければ、次の藤本さん、お願いできますか？

藤本　はい。今の後藤先生のお話に関連してですが、今日、この会に呼ばれている人は、新制度の切り替えの時の方ということで、教科書の話をされましたけれども、僕ら生徒は何がどう変わろうと、決められたところへ行って、授業さえ受けていれば良かった。確かに教科書もあったりなかったり、プリントだけというのもあったり、それから、古本屋を探し歩いた経験もあるし。つまり、新刊が出ていませんから。そういう風なことで、生徒と学校との関わりを言うと、ちょうど僕らは、学校制度が切り替わった、その時なので、例えば、中学部五年間と、一年プラスになって、僕らは中学部を卒業してそのまま高三になったんです。その教科内容が、当時、僕は学習指導要領も何も知りませんから、文部省がどういう通達を出していたのか知らないし、そういう教科の内容というか中味が入れ替わったその関係も知らなかったんですね。それから大学も同じですね。高三で卒業して、大学の一年になったら、専門学校の人たちがいきなり二年に入って来てね。だから、そういう専門学校からスライドしたのが大学一期生で、僕らは二期生になるんですね。そういうつながりと、また大学の先生方も同じことで、専門学校の英文科に教えたことと、僕ら大学の英文科に教えたこと、一般教養なんかも含めてね、単位制といっても形の上でなくて内容や教材の違い。というような具合で先生方は色々なご苦労があって、大学もまた、教科書はほとんどなくて、全部講義でメモしていくしかなかったけれど、僕らの後輩になったら本を買わさせられているのを

見て「僕らは良かった。得した。買わさせられないで済んだ」ということ。僕が聞いた内容がそのまま教科書になって、「明隣堂で買って来い」みたいになっていたから。そんな経験があるんだけれども、そういう、ちょうどその変わり目は専門学校と大学の内容の違い、どう何がどうなったのかとか、専門学校の一年生と高三との関係ですね。中学五年を卒業して、ここの専門学校に入っていて、翌年大学が開設されたから、今度また僕らと一緒になったり、あるいは専門学校を出てから大学に編入してきたりとかね。非常に混線しているんですよ。それから、もっと言えば、中学五年を卒業して他所の旧制高校へ一年だけ行って、明学の大学に入って来て、また一緒になったとかね。もう、僕らも実に様々なので、そういうのが『九十年史』を見ようと、『百年史』を見ようと、その時の先生方のご苦労やら、「学年がどうなっていったのか」とかね。わからないんですよ。同窓会名簿では、旧制中学卒は「中学」と、それから新制中学は「中校」と区別してくれてますし、昔の高等学部は「高学」で、僕らは「高校」とそういうところで区別するしかないと思うんですけれど。それで、僕らにしても、ただ「二十三年中学、二十四年高校卒」、を今の人たちはこれを見て「何だこれ？」と「高校に一年しか行ってないのか」という風に誤解する場合もあるしね。何かそういう説明を、今度『百五十年史』を作られるのならば、何かちょっと簡単で良いから触れておいたほうが後の人にもわかり易いし、同時に中学校の先生方、大学の先生方も、ほとんど我々の恩師はいらっしゃらないのでね。中学一年のときの担任の矢作先生はまだご存命でいらっしゃるけれども、僕らの会には出てくるのはご無理なようだし、大学のときの平林先生も何かこの前、新聞に金子みすゞとの関係でちょっと名前が出ていましたけれども、やはりご無理もあるんだろうし、そういう時代の色々な先生のご苦労やら、学年の色々なことやら、まぁ「後の人にもわかり易い物ができると良いな」と思って

まして。案外そういうことが抜けてるんです。ただ「新制高校ができた」とか、「中高が分かれた」とか、そういうことは書いてあるけれども。では「実際そのとき生徒はどうなったんだ」と、例えば「中学校五年間のつもりで明学に入ったのに、中高に分けられちゃった」と、現に僕の後輩なんかも明学の中学に来ながら、都立の他の高校へね、中三で出て行ったのもいれば、高橋源次校長時代だったので「なんだ君、うちの高校に来ないのか」と僕の後輩で言われてるのを聞いたことがありました。立派な人材が抜けていくと、校長さんとすれば寂しいですね。僕が高校卒業間近に「君はどこに行くんだね」と尋ねられ、「この大学に行きます」と答えると高橋源次先生は「あ、僕と一緒だ」と、非常に喜んでもらったことがあります。学校制度のごちゃごちゃした時代なので、後の人たちにもわかる形で、きちんと整理していただくと良いなとつくづく思います。

後藤先生のお話を聞きながら、色々と音楽の安部先生のことを思い出したりしましたけれども。安部先生の息子が僕と同期なのですよ。もちろん習いました。そして、さっきの「馬槽のなかに」が一九三〇年作曲なのですよ。安部君にいつか僕、「君の生まれたことを記念して先生が作曲したのではないか」と言うと、「さぁねぇ」なんて本人は言ってましたけれども、あるいは本人も知らない何かそのような動機もあったのかなと、安部正義先生のことはちょっとそんなことを思ったりもしました。安部先生のことで付け加えますと、昭和十八年に中学部に僕が入学した頃、安部先生から明治学院校歌や讃美歌などとともに「中学部歌」として「白金の丘の緑の地に深く　礎置きしその往昔（かみ）の　こころの響き今に聞く　歴史は古きわが母校　おゝ明治学院　明治学院　おゝ明治学院」というような歌を習った覚えがあります。たしか小出正吾先生作詞、安部正義先生作曲だったように思います。戦後歌った覚えはなく、今の高校にも歌い

継がれてはいないようですが、どのような経緯で作られ、また消えて行ったのか知りたくもあります。

軍事教練のことも、色々思い出すのですけれど、むしろ戦後のことというか、新制の変わり目のことが、今日の一番の話題なのかなと思うので、そちらに絞っておきます。考えているとやたら思い出すことばかりなので、結論的に言いますと、やはりさっきの学校の組織替えというか、中高大というそういう学校制度の変革に合わせて、もう一つは、戦後「平和国家だ。民主国家だ。文化国家だ」と盛んに言われるようになったその急変の中で、先生方は一番色々な意味でご苦労があって、逆に元気があったのは僕ら生徒かなって思うんです。後藤先生も僕が身勝手な、気ままなことをしていたのを、「困ったやつがいるなぁ」とご覧になっていたのではないかなと思うのですけれど。本当にしたい放題したいことをさせてもらっていました。クラブなんかも図書部員をやったり。さらに、中学五年から高三になると、五クラスから三クラスに減ったんです。それで人数が少なくなった分、僕らの仲間も減っていくから、文芸部長もいなくなり、僕は図書部長と文芸部長を兼ねて、『白金の丘』を編集したりとか、なんやかんや色々やっていました。その内容が乏しいように批判している人もいたのをちょっと読んで、「何だろう」と思ったのですけれども、僕らなりに自由にさせてもらっていました。そして、図書室そのものが、昔は玄関の横の合併教室みたいなところにあったのが、色々な関係で置き場がなくなったり、それから戦争中、専門学校の図書館も含め、中学のものも宣教師館などに移されていました。後で高三になった時に、昔の中学部の建物の屋根裏が空いていたので、先生方に交渉してそこに図書室を造らせてもらいました。予算も生徒会予算を、野球部などと分捕り合戦ですけれども、文芸部は「皆のための生徒会誌を作るのだから、金をよこしてもらわないと困る」とか、「図書室は皆のために本を買うのだから」と言って、当時は莫大な予算をもらい

ながら屋根裏を図書室にしていました。それで、もうなんやかんやさせてもらったんです。

十二月くらいだったか「ここに大学ができる。今の記念館が図書館になる。高校生のアルバイトが欲しい」ということを聞いて、すぐ手を上げて、ここの図書館整備のアルバイトを、高三の少なくとも正月以降始めました。当時の中学・高校はクラブとしての図書部で委員会制度ではなかったんです。そんなことで、中学・高校のつながりをそのまま大学図書館の整備のためにアルバイトとしてお手伝いしたり、そのころ村田院長先生は学院の近くに一時お住まいだったので、もっと蔵書数を増やすため、まず数を揃えるためにということもあって、院長先生のお宅から、あのとき、手だけでは持って歩けないから、リヤカーを借りたのかなんだか、運び出したり、図書室代わりになっていた宣教師館からこっちへ持ってきたり、また昔の中学部の図書は、高校の部屋に持って来たりだとか。そんな記憶があります。『賀川文庫』や『中山文庫』の整理を手伝ったのもその頃のことです。そして、僕の兄弟も多いし、経済的な面もあるから私立じゃない国公立のどこかに変わってもらいたいうちの父の意図も見えていたんですけれど、その縁もあって、「もう図書館で夜バイトするから、そのまま明学に行かせてくれ」ということで、ここの大学に行くことにしました。また大学の奨学金も受けました。成績もある程度必要なので、もっぱら単位は奨学金を貰うためだけにがんばった記憶があります。したがって、ここで夜アルバイトをしながら大学から奨学金を貰い、フルに明治学院を利用させてもらって出て来ました。図書館でアルバイトをしていると卒論を書く時間がないので、四年生の九月以降は、「アメリカに輸出する日本映画のあらすじを英語に翻訳してくれる学生募集」というのが学生課か教務課に出たので、今度はそのアルバイトに変えました。それで、英文科の卒論は英文タイプで打って出すことになっていて、もともと英文タイプは自分じゃ打てない。

持ってもいなかったんだけれども、ここの図書館でのアルバイト中、友達がタイピスト学院に行って習ってきたコピーを貰って、時間が空いている時、タイプの練習をしました。それで、最初は、館長の高谷先生から、ヘボンの高谷先生ですけれど、「タイプを打てない者が勝手に使っては困る。壊れては困る」と散々怒られたんですけれども、こっそりやりながら、やがて僕がタイプを打てることがわかったら、高谷先生は、今度は「洋書の分類もやれ」と。「勝手なこと言うなって」こっちは思っていたけれども、それはそれで自分の仕事を認められて出来ることになったので、タイプも打つ仕事もするようになったんです。いま言った卒論の時期には、翻訳する会社に行って、そこの会社のタイプを借りて卒論を打たせてもらいました。そういうやり方で、結局もう最大限、明治学院では色々なことを利用しながらやって来たなぁと思っています。大学図書館でのアルバイトのおかげで、自分が授業を受けていない先生方とも接し、礼拝や授業の時とはまた違った人間性にも触れました。事務の人たちとも仲良くさせてもらいました。

僕のことでちょっと付け加えたいのが、後藤先生も書かれておりますが、実は高校の校長もされた原田先生の亡くなったときに、ご遺族から原稿を依頼されて、それに書いたことを簡単に言いますと、「月旦事件」というのがありました。つまり、そのころ明学全体の新聞が高校、中学、特集みたいな形でも配られていて、それには僕は『明治学院時報』と書いたけど、『明治学院新聞』だったのかもしれません。昔、中学部に入ったら『時報』が出ていて、それが頭にこびり付いていたんですが、後で調べてみると、『明治学院時報』というのはもっと戦争中までの話だったかなと思います。ちょうど中学校、高等学校と揃ったところで、中高特集号みたいな形で、原田先生から「ちょっと先生たちの『月旦』を書いてくれないか」と言われました。「月旦」なんて言葉知らなかったんですけれど、中国の言葉で、何か人物批評を書くも

のらしいですね。だけれど僕一人で先生方全員のことを書くことは出来ないので、文芸部やら図書部やら、つまり子分たちを集めて、「先生たちのそれぞれ横顔を描いてくれ」とか「喋ってくれ」とか言って、それをまとめて原田先生に提出したら「良くやってくれた」と誉められました。それをまた、原田先生自身の筆できちんと、僕らのいい加減な言葉ではなく、きちんとした言葉に直して印刷されて、「おい、出来たよ」と配られたのを見て、「あぁ、文章も何もかも立派になったな」と思って喜んでいたら、どうも職員室の雰囲気がおかしいんですね、かなり険悪。「月旦」のことが大問題になったらしいんです。いわゆる僕らのずっとあとの全学連の闘争の時みたいな、大学の封鎖時期みたいな、高校もあちらこちら吹き荒れた時代もありましたけれども、あんなやり方は僕らはしてないんですが。やはりまだまだ先生たちも権威があって、たとえば僕らの時代は、戦後とはいえ職員室に入る時、学年組氏名と用件を入口で唱えて、「よし、入れ」と言われて初めて入室できる。つまり戦中の名残りがまだありました。変なことで僕ら首になっちゃ困るというのがあったので、そんなめちゃくちゃに悪口を書いたつもりや品位を穢すようなことを書いたつもりはないのだけれども。まぁやはり職員室は、今なら笑って過ごせるような問題でも、まだまだうまく行かなかったと思うんですね。結局廃刊になりました。僕らはもらった物を全部没収されて、もう手元にもどこにも残っていないのですけれど、そういう事件がありました。そして、職員室ではおそらく原田先生が全部「自分の責任で」ということで、誰が書いたかもすべて不問に付されて、僕らは他の先生から変な目で見られることもなく過ごしました。と同時に、後々ですね、高校を卒業して、大学を卒業して、学校教員になり、ずっと世田谷だけで公立教員を続けてきたんですが、高校の入試説明会その他にもしょっちゅう顔を出しては、原田校長時代もあれば、他の校長時代もあったんですけれども、原田先

生と何回かお会いしても、「あの時あんなことあったっけな」なんて一切おっしゃらないし、こちらも話をせずにいたんです。原田先生がお亡くなりになって、何か原稿をと頼まれて、一番先に思い出したのはそういうことがあったということでした。ですから、箍が外れちゃいなかったとは思うのだけれど、のびのび自由にさせていただきながら、しかし、「先生たちにはちょっと刺激が強かった時代だったのかなぁ」というようなことも今にして思っています。僕も教員を定年まで続け、さらに五年間嘱託として学校現場にいたものですから、さきほど言いました、文部省が何かの勢いで指導要領を変えたり、そのたびに僕らは苦労して、「何をどうすれば良いんだ」ということが色々ありました。そういう経験もあって、やっぱりこの学校で、僕らは生徒や学生の時には、先生たちもご苦労だっただろうなと思うのです。それで、大学のときもやはり色々変わったのではないでしょうかね。僕ら四十九年度生ですけれど、掲示版を見ると「五十年度生はこうなる」とか、「五十一年度生からこうだ」とか。単位の取り方が毎年変わっていたような気がするのですね。それぞれに先生方は対応なされていたのではないのかなと思います。戦争中、勤労動員などの空白もあったり、知的にもとても飢えていたので、授業は必修であろうとなかろうと興味をもった科目は目一杯、夏期学期なども含めて受けていました。ただし、どうにも手に負えそうにない科目は途中で放棄。つまり悪い成績が残らないように、授業も趣味・娯楽の一部のようなものでした。

それから高橋源次先生。渾名は「源ちゃん」、敬称は「源ちゃん先生」または「高橋源ちゃん先生」で、高校から来た僕らが使っていたので大学でも広まっていた。ちょっとこわくても親しみをもって接していました。先生には非常にお世話になったんですが、さっき言ったように、学校長でありながら、少なくとも高三の時には校長自身の英語の授業もありましたし、そして、卒業のときに「君はどこに行くのだ？こ

この大学なら僕と一緒だね」と言って喜んでくださって、英文学科主任になられたのですけれど、やはり「英文学概論」の授業は、高橋先生からすると、僕らの顔を見ると、高校生の時と同じなのですね。授業の始め、いい加減にだらだらしていると「しゃんしゃんと姿勢を正せ」と大学生に向かって言われるので、学生たちも苦笑いしながら姿勢を正して挨拶をしたという覚えがあります。もう後、なんやかんやとお世話になりました。それから、僕らみんな貧しくもあったから、先生方も気を遣ってくださっていたんだと思うんですけれど、高橋源次先生の場合も、同志社に出す博士論文だったのか、ロンドン大学にまた行かれる時に出すレポートだったのか、僕を捕まえて「ちょっとタイプ打ってくれんか」ということで、論文をタイプで打って差し上げたことがあります。それから、加藤先生。加藤七郎先生には、実は高校生になったときに第二外国語を取れることになり、ここでもドイツ語を習い、大学に行ってからもドイツ語を習ったりもしましたが、学生部長をされていた時に、全国の学生部長の会とか何とかにプリントを用意する。でも今みたいにパソコンとかはありませんから、結局ガリ版印刷ですね。それを「これを切ってくれんか」ということで、早速仲間を集めて、これは大学生の仲間なのですけれど、何人か集めて、皆で分担してガリを切ってあげたことがあります。それぞれアルバイト代はいただきながらやったことは間違いないのですけれど、「そんなこともあったな」と。

「『明治学院九十年史』のための回想録」に書いてある人のも読んでいまして、体育の単位のことが書いてありました。体育の実技ではなく講義の方は、久保先生に習っていて、当時の公衆衛生院に迎えに行ったり、また西脇順三郎先生がごく短い期間、八芳園の向かい辺りに住んでおられたことがあって、先生を迎えにのこのこ二、三人で迎えに行ったり、何か当時は幼稚園の子供みたいな感情だったんでしょうかね。

「幼い感覚で先生に接していたな」と今にして思えば。言い換えればそういう風な感情を、大学の先生も持っておられたなというようなことを思います。話がそれました。体育実技は、近い所のハイキングなどやサイクリング（といっても実用の自転車）など色々しましたが、一回だけは、昔の中学の校庭ですね、今、大学の建物がある、そこで夏休みにソフトボールをしました。実技は三時間で一時間相当。四十五時間で一単位でした。学生課か教務課か、僕が代表して交渉に行って、夏休みにとにかく僕が責任を持ってソフトボールをすると。これも自分が道具を持っているのではなく、大学の物を借りて、バットとボールとグローブなど、なにもかも全部借り、「夏休み中に四十五時間、責任を持って出席を取って出すから、単位と認めてくれ」って。それは今ではこんなこと通用しませんね。それで、夏の暑い盛りに、今みたいに紫外線がどうのこうのという時代ではなかったので、校庭でさかんに四十五時間やって、四十五日やったわけではないので、一日何時間か、何日かかけてやって、その出欠をもって単位交渉に行ったら、何人いたか、三十人くらいいたか、認めてもらえたことを思い出します。要するに、「勝手気ままなことをしていた」と思うんです。講義の空いている時は空いている教室を探しては仲間と駄弁っていました。僕ら貧乏学生たちは、校外で飲み食いすることはなかったですね。

もう一つ、僕だけの経験としては、戦争中、一回疎開して戻ってきた場所が、溝の口の東部六十二部隊兵舎の跡だったんですが、うちの父親の仕事と住居を探していて、たまたまその丘の上に疎開していた、川崎市立の商業と工業とか、私立の大西学園とかそんなのが来てまして、そして空いている建物を教員宿舎のようにしていて、「宿舎と仕事が両方ある」と言うので、引き揚げてきて、そこに住んでいました。その同じ丘の上に善隣専門学校、それが日本商科大学になり、その様子を見ていたら、ある時、いきなり

明治学院に合併するというので、こっちはびっくりして、学生大会ではきっと反対したはずだと思うのですけれど、そんなことがあり、合併された後は、一時期中学の職業科実習場になったりということもあったりして、案外縁が深いんだなと。英文科仲間にも後で聞いたら、溝の口の寮に入っていたという仲間もいて、在学中は全然知らずにいたんですけれどね。大学が今と比べても小さく、出来立ての頃でしたから、クラブ・サークル・同好会と思いつくまま作っては、中途半端で終わってしまったりでした。もちろん顧問はそれぞれ先生方にお願いはしていたのですが、あまりにもいい加減だったためか、ある日、竹中先生に「もっと何事にも腰を落ち着けてきちんとやり遂げること。気が多くて移り気ではだめだ」と御忠告を受けたことがあります。そのおかげかどうか、卒業後の学校教員としての仕事は無事続けられました。定年退職そして嘱託も終わったその都度、平林先生からは、高橋先生の「近江路は若狭につづき若狭路は加賀路につづくひとすじの路」という歌を引用して「貴君も一途天職に奉じましたね」と労っていただきました。ただ退職後はすっかり燃え尽き症候群的になってしまいました。

もう一つ思い出すと切りがないんですが、在学中でしたか、高橋源次先生は『百年史』等にも色々出てくると思うんですが、高等学校の英語研究会の会長をやられたり、全英連、全国英語教育研究団体連合会の会長をされたりして、おそらく在学中だったか、明学を会場にして、何か会があって、僕ら受付か案内かをやった覚えがあります。同時に竹中先生が語学研究所の会をされて、やはりそういう明学会場であったことが一回ぐらいあったかなと思ったりして。いい意味では競い合い、別の面じゃ何か「少しちぐはぐもあるのかな」なんて思ったりしながらいました。

あともう一つ。卒業して高橋先生に怒られた話を一つしておきます。卒業のとき、なかなか仕事が見つ

からなくて、先生にお願いして川崎市の試験を受けたり、神奈川県の試験を受けたり、東京都は一番後だったものですからね。そうしたらね。明学のＯＢが校長をしていらっしゃる学校に決まったのですけれど、直ぐその後で東京都が決まったものですから、お断りをしたら、途端にそこから高橋先生のところへ連絡があったらしいのです。こちらはそのころ電話も何もないので、電報で「直ぐ来い」と。高橋先生はまだ学院の構内に住んでいたのですけれど、こっちはしょうがない、慌てました。色々可愛がっていただきながら、意に背いたことになるので、一生懸命に頭を下げて帰ってきました。その後は、明学で何か会があっても高橋先生を避けていたのですけれど、そうしたらある時、平林先生だったか竹中先生だったか、「高橋先生が君のこと色々心配していたよ」と言われました。「色々御迷惑や御心配をかけた」と思っていましたが、ちょっとしたお会いする機会があって、もうすっかり高橋先生に許していただきました。それから何年かして、「同窓生の教員の会を作るから」なんてことを言われて、出て行ったりもしたんですけれど、しかし、それはこちらも忙しくて、とても人の面倒を見るどころではなく、そのまま消えてしまいました。高橋源次先生はＥＬＥＣ（日本英語教育委員会、のちの英語教育協議会）の委員もされたので、現職英語教員のための研修会にも参加させてもらいました。明治学院同窓会評議員とか理事として、何年か名前を連ねたこともありました。高橋先生の学長時代、同窓会のあと、先生のお宅が世田谷の船橋、こちらは砧だったので、何度か学長車に、家の途中まで乗せていただいたこともありました。同窓会は、会議にだけ出る時間をやっと作って、後藤先生とお会いしたこともあったりしました。まだまだ先生方がお元気な時には、お会いするのを楽しみに、同窓会のホーム・カミングも含めて、先生方にお会いできればと思って、また自分たちの仲間もいると思って出来るだけ来ていたのですが、もう仲間もほとんど来ず、先

生方もいらっしゃらなくなってしまい、ご無沙汰しています。そんなことで、何やかんやあって、先生方には随分お世話になったりしたことがあります。僕、まだ長くなりそうで申し訳ない。言い出すと、止めどなくて申し訳ない。終わらせていただきます。

原　ありがとうございます。今の藤本さんのお話に、何か質問はございますか？南さん、よろしいですか？

南　私ですか？ありません。

原　よくご存知なのですね？ではいいですね。その次に移らせていただきます。副島さんですが、副島さんには、すでに資料をご用意いただいていまして、これを読み上げると大分時間が足りなくなるので、逆にここに書いていないようなことで何か補記したいこととか、何か特に印象的なことがありましたら、よろしくお願いします。

副島　私が明学の中学に入ったのは、ちょうど戦争の最も華々しかった時期ですね。勉強が苦手で、おかげでもう勉強どころの時代ではなかったので、勉強はあんまりしないで済んだというか、これが僕としては非常に嬉しかったですね。元々勉強が嫌いでしたから。小学校はこの隣にある白金小学校というところだったんです。それで白金小学校は公立なんですけれど、越境入学が多くてね、ほとんど昔で言う一中、一高、東大というか、そういうコースを目指した連中が大勢来ていまして、僕は勉強が、さっき言ったように苦手だったから、明学に入らせていただいたから、ちょっと肩身の狭い思いをしていたんです。その時、一緒に何人か同級生が入ってきたんですけれど、さきほど都留先生の話がありましたね。その中

に、都留先生の息子で、都留信夫という、後に明学の先生をやったと思うんですけれど、彼が同じ白金小学校から明学に入ったのですね。それで、話が長くなるといけないので、掻い摘んで言いますと、その時、戦争は華やかだったのだけれど、礼拝はありました。それで、先生が交代で礼拝をしたのです。そのとき、お祈りするわけです。「日本が勝ちますように、お願いします」とお祈りするのです。でも、僕ら生徒達は悪ざかりのチンピラでしたから、陰でこそこそ話したりしたのです。「アメリカでも同じようにお祈りして居るだろうから、神様もおそらく困っているね」なんてね。まぁそういうような思いもありました。

それからやはり当時のことですから、教練をやりました。まぁ当然、軍人が来て訓練をやるのですけれど、明学の校風に合わせて、軍人らしき人もあまりうるさいことは言わなかったですね。我々生徒はずっこけた人が多かったので、つい笑ったりしてね。そんなこともありましたし、それから丁度、この建物の隣かな?テニスコートがあったんですよ。ご存知ですね。そこで、僕が二年になった時、一年で入って来た新入生が、そのテニスコートから国道沿いの崖下に転落したのです。それを見ていた若い教練の将校がもう突っ走るようにして飛び降りて行って、直ぐ抱き上げて連れてきたんです。だけど、頭を打ったのでしょう、もうそのまま死んでしまって、この隣に古い建物があったんですけれど、そこに、しばらく寝かせていましたよ、もう死んでしまったのに。窓から姿が見えるんです。そのときはやはりショックでした。そういうこともありましたし、やはり激動の時代ですから、中学二年の途中から勤労動員で僕は羽田にある工場に行きまして、そこで働かされたのですけれど、その時にすごくお世話してくれた延原先生が、僕ら生徒は勉強しなくてはいけないからと、上級生に「面倒見ろ」と言われて、「何時何時に集まれ」という命令が下ったんです。みんな僕と同じ、戦争をいいことにして「勉強しなくてありがたいなぁ」なんて

思っていた連中だったから、ほとんどの者がサボったんですね。ボイコットしたのですよ。そうしたら、延原先生が全員集めて一人一人呼び出して、往復ビンタしたのですね。かなり強くやったから痛かったですよ。今でも覚えています。だけれども、今だったら暴力先生ということでマスコミで騒がれたでしょう。でも今でも「ああいう風に僕らのことを考えてくれたのだな」というか、やはりありがたい気持ちのほうが多く、今でもそう思っています。そういうことがあったり、それから、この資料の中にも書いたのですけれど、勉強よりも貴重な経験としてね、荏原製作所（動員先）が、空襲が激しくなったので「工場が疎開するからお前等も一緒に来い」ということだったのです。学校としてもやはり「そこまでは行かせられない」というので、荏原製作所（動員先）をやめて、日本橋にある日本銀行の本店に行ったのです。それで、何をやったかというと、ご承知のように、日本銀行の旧館は今でもありますが、その建物は、上はせいぜい二階か三階程度なのですけれど、地下は四階ぐらいあるんです。それで、地下には金庫があるのです。その四階くらいまで金庫の中に金庫があって、そのまた中に金庫があったのです。それで、その当時はもう空襲が激しくて、全く東京が瓦礫化しているから、我々がその瓦礫を集めてエレベーターに運ぶ。要するに建物が爆撃されたらエレベーターは爆風で全部やられてしまうので、エレベーターを埋めるんです。一階まで埋めるのですよ。それだけでは足らないので、地下金庫なんかにも入りまして、そこに古い国債が収まっているのですよ。それを持ち出して、またエレベーターの中に放り込むのです。それを放り込んで、「あぁやれやれ終わったな」と思った途端に終戦。そのとき思ったのは、「これをまた出せ」と言われたらかなわないだろうなと思っていましたところ、そこで学校に引き上げてしまいましたから助かりました。でも、あれを後から出すのは大変だったろうなと思いました。埋め込んだ途端に終戦でしたから。

それで、中学三年ですから学校へ戻って、それから中学五年になる時、新制高校の切り替えで二年に編入となり、二年、三年と高校ですね。それで、その時、やっぱりアメリカのミッションから派遣された若い宣教師の人が結構来ていたのです。だけど、全然戦勝国の顔なんてしませんでした。とっても良い兄貴分という感じで、僕らに接してくれました。「やはりアメリカ人っていうのは寛大なのだな」というのを感じましたし、それから古くからいらした宣教師だったご夫妻なんかもまた戻ってきて、校内のお住まいに住まわれていました。その当時、「遊びに来ないか」とその宣教師、ハナフォードご夫妻だったのですけれど、ちょうどこの端のところに大きな宣教師館があったんですが、そこに行った覚えがあるんです。それで、僕ら、そのころの日本では暖房設備がよく行き届いていないから、そこへ行ったらもうストーブがあって暖かいのですよ。「こんな暖かいところで暮らしたいな」なんてね、そういう思い出もあります。

それで、高校を卒業して、今度は新制大学になって、そのころ駅弁大学といわれてね。あちこち大学ができたのですけれど、明学は特別な試験もなく書類選考だけでした。だから他を受験せずに、僕はあまり英語が得意じゃなかったから経済科の方に行ったのです。その当時は、学生も少なかったですから、英文科、社会科、経済科の三つですよ。非常に仲間意識があって専攻が違っても交流がありまして、皆と仲良く出来ましたし、そういう意味では、今みたいにこんなに人数が多くなると、本当の意味の大学生活はエンジョイできるのかなと、ちょっと疑問になんか感じたりします。どっちかというと、今では享楽的に走るというか、そういう風潮があるかと思うのですが、そのころはゆったりした気持ちで大学生活を味わえたかなぁと思えたし、もちろん設備などは、食堂もありませんし、まるきり劣悪な環境で勉強したのですけれども、気持ちの上ではかなりエンジョイできたのではないかなと思っております。今は、女子学生の

ほうが多いですよね。だから今に女子大になるのではないかと心配しているのです。私どもが居た時には、女子学生が少しずつ入り始めたのです。それで、部活動は女子学生が割りと多いからということなのかもしれませんが、ＳＣＡってご存知かわかりませんけれども、ステューデント・クリスチャン・アソシエイションという部に入りました。その時に、一緒の部活で、英文科だったのですけれども、飯田君というのがいまして、その飯田君というのがご存知の方もいるかと思うのですけれど、アメリカの……

原　コーネリアス飯田ですね。

副島　えぇ、そうです。アメリカの大統領付きの通訳ですね。確かフォード大統領でしたかな？

原　カーター、レーガン元大統領の米側通訳官だったと伺っていますけれど。

副島　それで、彼の思い出としては、その当時から敬虔なクリスチャンで、真面目な学生だったなという印象がいまだに残っております。僕なんか足下にも及ばなかったですけれど。以上で、大体掻い摘んだ話はその程度で、あと詳しいことはここ（資料）に書いてありますから、よろしくお願いします。

原　ありがとうございます。今の副島さんのお話について何か質問はございませんか？はい、南さん。

南　新制高校二年って言いましたけれど、三年生ではないですか？

副島　二年です。

南　昭和二十四年に高校を卒業していますから。高校ができたのが昭和二十三年で、新制高校ができていますから。

藤本　高校三年ですね。

副島　三年生ですかね？二年くらいいたつもりでいたけれど。

藤本　僕らは高二というのはないんだ。僕らは中五からいきなり高三になったんだ。

南　昭和十八年に入っていますから、旧制中学校だから昭和二十三年に卒業して、そして昭和二十三年は新制高校ができていますから、昭和二十三年には三年生ですね。昭和二十四年に卒業していますから、だから三年生に編入したことになります。

藤本　旧制中学のままだよ、五年を卒業してから三年になったんだよ。

南　三年ですね。高等学校二年生ではないですよね。

副島　昔は五年制でしょ。旧制中学四年になったら、その四年が五年になる時、新制高校二年に編入？

南　昭和十八年だから十九、二十、二十一、二十二、二十三年に卒業してね。旧制中学校。

副島　六・六制でしょ、そうすると……

南　新制とか関係ありませんから。旧制中学を卒業して、昭和二十三年に新制高校ができましたから、昭和二十三年に三年生になって、新制高校を昭和二十四年に卒業とこうなるわけですか？

副島　あぁ、そうでしたかね？あれ、そうかな？

藤本　一緒に卒業しているから間違いないんだよ。

副島　どっちかがボケてるのかな。

南　藤本さんと一緒ですね。

副島　一緒です。

藤本　いや、僕はね、昔の事は難しくてね。これは九十年の同窓会名簿（年度別）でね。九十五年の名簿があるんですけれど、それでは年度別の分はないので、九十年の名簿を捨てるとき、この部分だけ取って、

残っていて、九十五年が最後で、それ以来同窓会名簿ができていないのだけれど。これに何年度が誰と誰という我々の大々先輩のことまで出ているものだから、藤村をはじめ色々な人の名が出ているから、同窓生の話があるとき、ひょいと見るんです。旧制中学は副島君も僕も一緒で昭和二十三年卒。今覚えてはいないが、名簿では新制中学も同じ昭和二十三年に卒業式があったようで、新制高校は昭和二十四年が最初の卒業式、同時に中学の第二回卒業式もあったようだ。なお旧制中学部は昭和二十四年に最後の卒業式をやったようで、学校側も大変だったと思う。

副島　四修卒業を認めたんじゃないかな？

藤本　えぇ、認めていました。だから、昔ある先生が何かに、「学院を退学してどうのこうの」と中学を四修で出た人のこと、ちょっと悪く書かれた文章があってね。でもそうじゃないんです。四修が公然と認められて、四修で一高に行ったりね。四修五卒と。だからもっと言えば、僕らの仲間は四修で出たり、五卒になったり、高三にスライドアップしたり、もう種々様々のものがあったんです。たまたま昔の同窓会報を見ていましたら、僕らが同期だったものを同窓会員として認めてくれというような願いが出て、評議員会か理事会だかで認めたという記事を見つけて、「あぁ、そうだったんだ。あいつは四修だったんだ」というようなことをちょっと思いました。だから四修みたいなのは同窓会名簿には載ってないんですよ。学校や同窓会では卒業年次で卒業生をくくるけれど、僕ら昭和十八年中学部入学者は、副島君も一緒だけれど、「白金十八会」というのを作っていて、四修や五卒も高三も、さらに病気で遅れた者も含めて会員にしています。大学も「四十九年度英文科生」ということで、途中編入も、二部から来た人たちも、遅れて卒業した者も、同じように扱っています。

石田　四年生で入って来たんです。四年生で一年だけいて、四年でよその学校の予科へ入ったんですよ。当時は普通の人から比べたら、そういうことができたんだよね。

藤本　昔はよく、そういう良い意味か悪い意味か、飛び級みたいなのがあってね。

後藤　少なくとも副島さんと藤本さんは同じ学年だということでいいんですね。

原　はい。ありがとうございます。それでは次に望月さん、よろしくお願いします。

望月　一九四三年（昭和十八年）に中学部入学、一九五四年（昭和二十九年）に大学卒業の望月であります。まず、この『明治学院歴史資料館資料集』第二集をお送りいただきありがとうございました。拝見しましたところが、恩師、先輩ばかりでありまして、おそらくこれを先に頂いていたらお断りしたのではないかと、今日はえらいところに来たと思っております。思いつきますまま、五つほど申し上げてみたいと思います。

私は中学部二年生のときが敗戦でございました。中学部に入りました時に、宗教部と申しまして、ちょっと御覧頂くと、こちらの正面の方に三角の屋根が三つ付いた建物がありまして、その真ん中の三角屋根の屋根裏が部室でありました。どんなことをやっていたかと申しますと、一年生が入ると、校歌などの由来を、先輩方がとくとくと議論をなさる。議論なされながら説いてくださる。それで、いわゆる校歌の一番終わりにあります「雄々しかれ、眼さめよ、起てよ、畏る、なかれ」という言葉ですけれども、これがイザヤ書の三十五章の三節が定説であるのですけれども、そうではなくて、ヨシュア記の一章の九節ではないかとか、それから、さらにはイザヤ書の四十五章の「私はあなたと共にいる」

という聖句を胸に刻みつつ、藤村はこの言葉を選んだのではないだろうか、というようなことを延々と議論をしておりました。やがてこれは私が後に聖書を読むときの、黙想に導かれた非常に貴重な体験であったというふうに覚えております。現在私は日本基督教団の常議員でありますし、出版局の常任理事であったり、神奈川教区の常置委員で財務委員長を務めたり、鎌倉雪ノ下教会の書記・長老、そして東神大の神奈川の後援会、これは学院と非常にご縁が深い、高谷道男先生が会長を務めておりました後を受けまして、今会長を務めさせていただいておりますが、そういう意味ではキリスト教にどっぷり浸かりこんでおりますが、今の信仰は、この時代にやはり培われたのだろうと思って大変感謝しております。

武道の必修ですが、これは剣道を選択いたしました。で、高段者の段の上の四年生、五年生のなかに佐伯、高橋（高橋賢一先生は後にこの明治学院で体育科の教授になられた先生であります）という先輩がおられ、この四年生、五年生と一年生は、やはり大人と子供なのですよ。本当にすごいものだという風に拝見したことを覚えております。

先生のニックネームについてちょっとお話ししておきたいと思いますが、これは決して私共が創作したものではございません。先輩たちから受け継いだものであります。先ほど来お話が出ております「印度うぐいす」が安部正義先生。これは安部先生が『明治学院歴史資料館資料集』第二集の中でこのニックネームについて容認されているように記してありました。ピーチクというのは覚えていらっしゃいますか？斎藤国治先生のことでございます。ボケナス、ラッキョウ、ビンボウエビス、先ほど写真がありました大西先生です。ダルマというのが銃剣術、銃剣というのは銃剣で突っつくほうですね。これの教練の教官だった人をダルマと呼んでいました。どれもこれも見事で枚挙にいとまがないのですけれど、さすがに矢野貫

城院長、村田四郎先生の威厳の前には、先輩方もニックネームをつけづらかったようでありまして、私はこの二人のニックネームは聞いておりません。中学部長の漆山先生は、これは確か鉄仮面と呼ばれていたと思いますが、どうぞ皆様で後ほどこれを補っていただければ幸いであります。お名前が出たついでに一つだけ村田先生の教訓をお話しますと、教室でおっしゃった事ではなくて、極めて個人的におっしゃった事ですが、「教師は教室で教えるな。校庭を歩く後姿で教えられるようになりなさい。」こういうようなことを、きちんと背筋を伸ばしておっしゃられた先生であったことを覚えています。

さらに、戦時下と敗戦後の礼拝について。これについては後藤先生が先ほど触れてくださいましたけれど、配属将校というのが赴任しており、これが椅子に座って膝をぱっと開いて真中に軍刀を立てるわけです。そしてその軍刀の上に手を置いてぐっと背筋を伸ばして、確か三浦少尉という風に記憶しておりますが、それからもう一人教練の教官で、立派な髯を蓄えたダルマと呼ばれた軍人でありますが、これのほうは、髯と顎を一緒に軍刀の上に乗っけましてね、よく眠そうな顔をしていたのを覚えています。こういう配属将校の監督下で礼拝が行なわれた。当時の様子を付け加えますと、いわゆる聖書に忠実に正統な説教をした、そういう牧師は国賊だと呼ばれる。国賊だと呼ばれるだけではなくて、これが特高に捕まって、獄にぶち込まれる。獄に放り込まれたというのがしばしば起ったわけでありますが、こういう中でとにかく戦中・戦後を通して礼拝が一日も欠けることなく捧げられた。これはもう奇跡としか言いようがないことだと私は思っております。当時の先生方のご苦労に感謝すると同時に、また聖霊の加護に深く感謝したいと思います。

戸塚キャンパス、横浜校舎のことでありますが、ある日こういうことがあったのです。電話で「長洲君

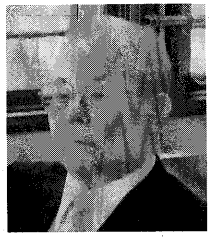
（神奈川県知事）、国鉄で品川駅から一時間以内で五万坪から十万坪の土地が神奈川県にないかね？」日本生産性本部の会長室に当時学院理事だった私は呼びつけられて、当時、郷司浩平さんが学院の理事長でした。これはおそらく郷司浩平先生のハッタリか思い違いだと思ったのですが、その当時はこういう質問をされていたのです。「野球場一つ作るのに何坪いるんだい」と、それで「三千坪必要です」とそのとき答えていたのですけれど、「野球場十個あったら良い学校になるな」ですと。三万坪ですからね。五万坪とか十万坪というのは明らかに郷司先生のハッタリか、さもなければ、ハッタリと言う言葉が良くなければ郷司先生の過剰なアプローチか思い違いだったと思います。そういう電話をなさった。それからしばらくして横浜の海岸の埋立地のところに「三十五万円の土地がありますよ」という連絡が入ってきたのですよね。相模原だと十万円になるという。それから二、三ヶ月かかりました。しばらく途切れてですね、「市街化地域でお墓の隣の土地があるよ」という連絡があったのです。これが今の戸塚のキャンパスですね。約六万円ちょっとであります。それで、ちょうどそのころ学院の担当の理事をしていましたので、郷司浩平さんのご指示で、よくそんな風に動いた記憶があります。ほとんど一人の人のアクションがああいう大きい買物に繋がったのだな、たいへん明治学院にとって幸いなことであったという風に思います。

あと三分ほどありますので、三分でまとめたいと思います。恩師と家族について少し申し上げます。その私事に及ぶことでありますけれど、私が洗礼を授かりましたのも、この『明治学院歴史資料館資料集』第二集の回想録にあります松尾造酒蔵牧師であります。一九六一年のことでありますが、結婚式の司式は村田四郎先生であります。お願いに参りましたら、村田四郎先生の白楽のお宅ですが、机の前で分厚いヘブライ語の聖書を開いていらっしゃる。振り向きざまに「おっ、来たか。教会生活しないのだったら結婚

しなくて良いよ」といきなり言われてびっくりしましたが、これは村田先生の先手必勝法でありましょうか。返す言葉がありませんでした。家族四人、それから連れ合いの兄弟全員が明治学院の同窓生であります。特に義兄、家内の兄に当ります、これは、私の一年後輩で文連会の議長をやっておりました。その予算の取りっこをする相手なのです。犬猿の仲でありましたが、なぜかそれが今や親戚ということになっていますが、そういうような背景があります。

学生時代、野球部の先生が加藤七郎先生でありました。加藤先生には消防自動車というニックネームがついていましたが、鐘がなるとパッと教室へ飛び込んでくるというのでそういうニックネームがついたようであります。それから松本亨先生は影で野球部を支えてくださいました。こういう話をいたしますと長くなりますので、野球のことは国見君が出席していますので彼に譲ることにして、ここまでといたします。

原　ありがとうございました。



石田　私は石田でございます。終戦の年に小学校六年生で、終戦直後の第一期生に中学校に入ったのが私達なのです。それで、ご存知の通り、戦争中よりも戦後の一年間位の、あの時ほど、食糧事情の悪い時はなかったわけです。それで、戦争中はまだ配給があって良かったわけですけれども、戦後の一年というのはほとんど配給がなくて、進駐軍の放出物資みたいなものも後から出てきますけれども。食糧事情が非常に悪かった時ですね。それで、私が中学一年に入った時に、今でも覚えていますけれども、先生が、

ほとんど住宅、食糧をゲットするのに駆け回っているかどうかわかりませんけれど、ほとんど学校へ来ないことが多いのです。ですから、年中繰上授業だとか、合併授業だとか、そういうことの連続だったのです。おかげさまでこちらは常に早く終わるから映画を見に行ったりとか、そういうことを年中やって喜んでいました。「坊やの家に芋があるか」とか、「部屋空いているか」とおっしゃる先生もいらっしゃいましたね。そういう時代で、もう殺伐としていました。大人も子供も。したがって教科書も先ほど仰ってましたけれど、ガリ版みたいに大きく印刷してあって、自分たちで切って、それを綴じて作るというような、昭和二十一年の時はそんな状態でした。だから、まして小学校六年の時も疎開していましたし、教科書がないわけです。五年生の時、学童疎開し、六年生の時には六年生の教科書がないわけです。そういうような状態が続いて入ってきたときですから、中学校から高校へ行って新制適性検査（大学進学する者が受けた）というのが当時あったのですけれど、「学年平均で戦後一番レベルの低い学年だ」という報道が出ました。そういう時代でした。したがって、食べるものも、お宅の親御さんが心配して、今考えれば闇米か何か買ってやりくりしていたんでしょう。みなさん持ってくる弁当が、どうにかお米の弁当持ってくる人が多かったですけれど、そういう時代でした。

それと、中学二年の時に箱根へ遠足に行ったのです。先ほど後藤先生がおっしゃっていましたけれど、小田原から箱根湯本まで歩かされるわけです。それで芦ノ湖で、私達は芦ノ湖ホテルというのに当時泊まったのですけれど、食糧がない、食事がないわけです。何を食べたか覚えていませんけれど、ただ「バヤリースのオレンジだけは飲み放題で良いよ」と。オレンジばかりだといけないんで、「お前何か持っていないか？」と聞くと、出す奴出す奴みんなコッペパンしか出さないんですよ。とても真っ黒けな粉のコッペパ

ンです。それで、次の日は何かというと、芦ノ湖から熱海まで歩かされるわけです。いやその距離というのは大変なもので、中学生だから歩いたのですけれど。それで今でも覚えているのが、我々仲の良いもの同士が、なんて言うんですか、くだらない話をしながらみんなより遅れて最後の方を歩いていると、先生が「あいつ達、悪いことしてタバコでも吸うんではないか」と思ったのかどうか知らないですが、体操の先生が一番後ろの我々まで付いて来て、それで、こっちはまだ中学二年生だからそんな悪い事は出来ませんよね。そういうような思い出もありますね。ともかく食糧がなかったこと。

それと、今でも覚えているのが、中学生になって、私はたまたま、日本人が入れないＯＳＳ（現在の㈱明治屋。オーバーシューズ・サプライ・ストアーの略。連合国の民間人とその家族・関係者のみ入店可能なので日本人は入店および買物は出来ない所）という店に知り合いがいたものですから、色々な物を買ってきたのです。いま覚えているのはジョニーウォーカーの赤ですね。でも持ってきた時に、みんなジョニ赤を知らないわけです。それで知っているのが二人いまして、私の友達の一人は医者になっていますけれど、もう一人は一級上に小林一三さんの甥子さんという方がいらっしゃるのですが、その方しか知らなかったのです。それで「これジョニーウォーカーではないか」って。そういうのを持ってきたり、ビーチナットというガムを持ってきて売ったり、学校というところは色々な人がいて、色々な階級の人がいて、色々な子供がいるわけです。そうすると、例えば、ここにいる国見君のように野球ばっかりやっている人もいれば、そっちの方にかけてる人間もいるのですね。銀座へ行って宝くじを売っているのもいるし、色々な人間がいるのです。そこで商いになってしまうわけですね、我々の時代は。そうするとよい商いだと思うから、学校の勉強より商いの方を優先してしまうわけです。そうすると学校に学校の道具を持って来ない

で、その商いの道具だけ持ってきて通うといったようなことにまでなってしまうのです。そういう時代に中学を過ごしましたね。それで、先ほどおっしゃいましたけれど、宮崎栄先生の家に「お前勉強を習いに来い」と、「出来ないから習いに来い」と呼ばれるわけです。それで行ったのですが、不良とか、こういう出来ない奴がみんな習いに行かされるのかと思ったら、結構真面目な連中も習いに来ているんです。先生はアルバイトでやっているのではなくて、悪い奴には特に良くさせようと、出来ない奴にはよく解らせようと教えてくれるのですが、そういうところに行ったら色々な連中に会うんです。だけれども、一番面白かったのは宮崎先生が猫を十匹以上飼っていらっしゃって、昔から有名で。それでノンちゃんという渾名がついたみたいですけれど。そこでね、一番ボスの猫がメスなんです。「先生、大きい猫ですね」「それ女のボスでね、名前はオルトマンスっていう猫だって」と言っておられましたね。それで、猫用の餌が、当時我々が食べるより良いような肉だとか魚を買って先生が帰って来られるんです。「いや、すごい暮らしをしているな」と思ったことがありました。そういう時代でしたね。

それで今度、新制になって高校へ行ったら、二年の時、高校で初めて、今度は石炭で使うストーブが付いたのです。一年の時にストーブなんてなかったんです。高校へ行って初めて石炭のストーブが出てきた。そういう時代を過ごしたものですから、特に校長先生や偉い先生とお話しした思い出は無いんですが、毎朝チャペルに行きましたね。私は毎朝少しずつ遅れて行くんですね。それで、ある日、大川校長だと思うんですけれど、校長に捕まって、「ちょっと校長室で待ってなさい」と。校長室で待っていて、怒られるのかと思ったんですけれど、校長室はそのころばんばんストーブを焚いているんです。石炭をばんばん勝手に燃していてね。待っていて怒られると思ったら「いや、君たち今度注意してくれよ」とそれでおしま

いになったことを覚えていましたね。殴られたり、そういうことは一切しませんでした。それで今でも感謝しているのですが、私は決して良い学生ではなかったけれど、先生に殴られたということは一回もなかったです。怒られたことはあったけれど、殴られたことは一回もない。それで、こんな風に、色々な話を聞いてみると、私達が過ごした時、この明治学院ほど自由な学校はなかったです。本当に自由奔放で。それでいわゆる不良と称される人達と級長というような人達とみんな仲良かったですものね。和気藹々としていたというのですか。あんまり苛めたりね、そういうことは絶対無かったですね。そういう非常に自由な学校でのびのびと過ごして来て、ここでお話しすればきりが無いくらい、色々な面白い話がありました。ただ一つ面白かったのは山本彌一郎先生、「ボケさん」という先生がいましたね。あの先生が言ったことですが、ちょうどあのころダレスさんが日本に、講和条約の発効する前に、頻繁に見えていたでしょ。ダレスさんは国務長官ですよね。それで「ダレスの奴」って言ったんですね。そうしたらみんな笑ったんですよ。そうしたらね、山本先生は向こうに留学に行っていたときダレスさんのお父さんと親しかったらしいですね。それで、一緒に写真を撮ったりしているんです。それで「ダレスの奴、また来てるのか」なんて言って、みんな噴出してしまったことがあるんですよ。それとね、あの先生は、英語を縦に書いてしまうというのはご存知でしょうけれど、野球のことをね、望月さんと国見君がいるけれど、野球があのころ盛んだったです。その時に「あんなすりこぎダンス、アホじゃないか」と「大の男が十八人もしてすりこぎの中でボール一つを追っかけていて」というような表現をされまして、非常にユーモアのある面白い先生でした。そうですね、学校の思い出というと、そんな様なところですね。中学、高校と言えば、いくらも出てきてきりがないんですけれど、ちょっと今は言えないような話が私の場合は多いものですから、そ

れくらいにしておきますけれども。

それから大学に入った時、一番驚いたのは明治学院は男子校ですよね。それが今度はいきなり女性が入ってきているわけですよ。それで一番戸惑ったのが、高校の時までは先生が「明日は父兄会だよとか、今度何があるよ」というプリントをくれますよね。親に見せたことないから、この中に入れたきりだったんですけれど、大学に行ったら途端に掲示板を見なきゃいけないわけですよ。それがこちらの感覚で行きますから、下から行ったもんですから、掲示板見ないで今までの都合でいると、履修指導とかいうのを危うく逃してしまうところだったんですね。その辺の戸惑いがありましたね。「大学というのはこういうところか」と、自己責任でやらなきゃいけないなというのがありましたね。そういうような戸惑いと、それから女性がいたということ。それで、今でも思い出すのが、フレッシュマン・イングリッシュの時に習った教授が、英語の時間にみんな出来ないわけですよ。そうしたら「先生、白紙で出していいですか？」と聞いたら、「いや、何か書いてくれ」と、「歌でもラブレターでも何でも良いから書いてくれ」と言うんです。先生が「恋人いないのか」と言うと、誰も「いない」って言うんですね。「じゃあ、ここの校歌書いてくれ」と先生が言ったら、よそから来た学生も多かったですから「校歌知りません」と言う。「しょうがないなぁ」と言って、「じゃあ、私の家に暑中見舞いを書いてくれ。何にも書いてくれないと点のあげようがない」と。それで暑中見舞いを書いてくれと「名前の横っちょにＡＢＣＤＥから書いておきなさい」と、それで、私は歌を書いたんですね。もう一人の奴も歌を書いた。みんなそれぞれ書いて、中には「Ａ」と書けば良いものを「Ｃ」なんて謙虚に書いた者もいるんですが。それで後で見たら、そのまま受かっているんですよ。ところが、夏休みが終わって出て来たら、その先生が自殺されているんですね。中桐という

先生でした。安部先生と仲が良かったらしいんですが、そういうようなことが非常に強烈に思い出として残っていますね。

それで、今度は大学の三年の時、先ほどおっしゃってましたけれど、体操実技をやらせられるんですね。それで「実技何だ？」と聞いたら、目黒の杉野のドレメの方に行ってスクエア・ダンスだとかね。そんなことやらせられるんですよ。野球部の応援に行けば良いとかね。すると、馬鹿馬鹿しくてやっていられないわけで、「体操の実技なんて、大学入ってまでやりたくないよ」と言って、「自動車部を作ろう」となって、村田先生に言って、当時は建築委員長だった松本亨さんに許していただいて、初めて一台買ったんですよ。それでスタートしたわけです。それで、その時に色々な下級生に運転させて、銀座の方へ食事に行って、みんな乗せなかったとか、そういうこともありましたけれども、それで山中湖に合宿に行ったとかね。そしたらまた、地元の不良に喧嘩売られて、困って、それで帰ってきて賀川豊彦さんの夏期講習に行ったら、その街の不良仲間にいた我々の一級上の人が「俺、あの仲間にいたんだよ」って人がいましたしね。そういうようなことで、非常に我々の時はなんというか、めちゃくちゃと言えばめちゃくちゃだったですけれどね。非常に自由でね。そうかと思って今の人たちみたいにすぐ人を殺しちゃったり、刺したり、そういうことは無かったですね。だから今でもあそこに守衛所がありますけれど、僕なんか自動車部の人間は、あそこの守衛所に木下というご夫婦がいたんですよね。あそこへ行って「おじさん飯食わせて」と言って食わしてもらったり、そういうことをして、それであの人達にも「お前等は可愛げがあって良いよ」と、よく言われましたよ。

そういうようなことで、非常に楽しく、中学から大学まで過ごさせていただけたというのが明治学院で

した。だから今でも、その明治学院というと、中には「学問的には程度が低いよ」と言うのもいるし、私が通産関係のとこへちょっと勤めに行った時、事務員のところに履歴書を届けに行ったら、「明治学院か、すごいな」と言われた。だから何をもってすごいのかというのはわかりませんけれども。だけど、私は私なりに明治学院を出たというプライドを持っていますから。どこに行くんでも、学問的にはプライドは無いですけれど、それでもって世の中を渡っていますから別にね。カルチャー・コンプレックスなんていうのもありませんから。中にはいくら頭が良くても、一般常識と言うんですか、社会常識が全く無いようなおかしな人が世の中にいっぱいいますからね。頭の良い馬鹿と言うんですかね。そういうのがいっぱいいる世の中ですから、決して明治学院がレベルが低いなんて思う必要は全くないと思うんですよ。だから自信を持って、プライドを持っていけると思いますよ。だから、私はその点では学校に感謝していますし、友達なんかが非常に良いですね。中学、高校時代の友達が一番。だから今でも彼等、国見君は一生懸命苦労して同期会をやってくれていますけれど、欠かさず出ていますね。大学のほうは出たり出なかったりですけれど。そういうのが私の明治学院の思い出です。大体以上でございます。

原　ありがとうございます。社会学科卒業ということで、若林龍夫先生の思い出とかありませんか？

石田　そうか。僕が一年の時、若林先生が社会学科主任教授だったですね。それで、お嬢さんが私と同じ同級生なんですよ。それで、私、若林先生とはちょっと個人的にも親しくさせていただいているので、お宅にも何回もお邪魔したことがあるのですが、真面目な先生で、大学三年生の時かな、調布嶺町に住んでいて、外書講読なんてものをやらせられたんですけれど。何か東大の哲学科か何か出ていらっしゃるんですよね？

原　えぇ、東大の哲学科出身で。

石田　で、どうしようもないですね。この間も大学の同窓会でお嬢さんに会って「怒ったとき先生どうされます」と聞いたら、「口きかなくなっちゃう」と言うんですよ。そういう先生でした。だから、思い出と言ってもこれという思い出はないですよ。あの先生は、ただ真面目でおとなしい。だから、私もあの先生のゼミを取ったんです。それでゼミに間に合わないで、卒論を締め切りのギリギリの日に若林先生の自宅に持っていったんです。それでどうにか単位を取らせてもらった。それで卒業してから行ったら、賀川豊彦さんと仲が良くて、国連に日本が加盟する前に、オブザーバーみたいな恰好で代表団の一員で国連に行ってるんですよ。それで、その時に色々相談があって、何か物を買ったり、靴を買ったり、洋服を買ったりするのも、たまたま私の兄が明治屋の方にいたもんですから、そこで揃えて差し上げたりということがありましてね。それで、卒業してから若林先生のところへ行ったときに、「君たちこれから色々海外へ行くだろうけど、一番最初に行くのはスウェーデンとデンマークへ行ってらっしゃい」と、そういうアドバイスがありましたね。お目にかかったのはそれが最後でしたね。

副島　若林さんのお嬢さん、同期で一緒だったんですね。

石田　そうですよ。

副島　僕が四年の時、一年で入って来られたんですよ。それで、ここに提供した写真に写っています。

石田　載ってますね。

原　こちらの写真に載ってますね。

石田　えぇ。

副島　それで、若林さんの、先生のお嬢さんの友達の東洋英和から来た青柳さんという人がいますね。

石田　います。いまでも同窓会に出てきますよ。

副島　青柳さんという方がおられて、卒論の清書をね、その青柳さんにしてもらったんですよ。

石田　そうですか。

副島　それで卒論を清書してもらって、出来上がったのが提出期日の最終日だったんですよ。それで、提出に行ったら、経済学部の齊藤茂夫先生が待っていらっしゃってね。最終日だったものですから心配してね。「どうしたんだよ」なんてね、言われたことがあります。

原　はい。ありがとうございます。

石田　他に何かあれば

望月　ちょっと

原　はい。どうぞ。

望月　ボケさんこと山本先生ですか。あの山本先生というのは体の小さな先生で、運動部の体のでっかい奴で勉強のできない奴に、チョークを持って、おでこのところに「ボケナス」ってホントにおやりになるんですね。ここをチョークでピュッとやられる。そういう先生でした。礼拝の時、山本先生が司式なさる時には、讃美歌は「母ぎみにまさる」いつもこれが定番。さきほど後藤先生が話してくださった『明治学院用讃美歌』ね。ああいう物が着々と積みあがったのは、今のような地盤があったんですよ。「山本先生は『母ぎみ』だよ」みたいな。先生によって定番でお歌いになる讃美歌。そういうものはだんだん集大成してきて一つの物になる支えにもなったのかなと私は感じております。

原　ありがとうございます。

副島　最初に外国へ行くならスウェーデンかデンマークというのは？

原　社会福祉が進んだ国だから……

石田　いや、それもそうですし、くっついている国だけど、ガラッと変わるのだそうです。ところが今、私が聞いた話ですと、北欧に行くと、非常に生活のレベルが高くてお金がかかるそうですね、あそこは。スウェーデン、デンマークに長く居ると。だからみんなあんまり居たくないんですよ。生活レベルが高いから。

副島　社会保障が充実……

石田　だからその分のんびりして暮らしやすいんじゃないですかねぇ。

原　ありがとうございます。三時半に近くなってまいりましたけれども、予定だとここで終わらなければならないのですが、延長でよろしゅうございますか？

後藤　まだ話していない人がいるからね。

原　では、次に国見さん、よろしゅうございますか？

国見　はい、国見です。昭和二十一年に中学へ入りまして、昭和三十一年に大学を卒業しました。それでその後一年半ばかり体育科で体育の助手をしていました。この話を頂いたときに、まずやってみたいなと思ったのは先生方の記憶です。そこでメモと鉛筆を持ちまして、当時の先生の名前をどのくらい覚えているか書いてみましたね。ここにちょっと書いてみました。三十六人ほどわかったんですが、まだ忘れてい

る先生がいらっしゃると思います。その先生には誠に申し訳ないけれども、この席で謝りたいと思います。そして、先ほども出ましたけれども、なんといっても思い出が深いのは渾名のついた先生ですね。先ほどは山本先生が「ボケさん」だとかね、関根先生というのは「ケロさん」だとかね、色々ありましたね。そういう先生が一番思い入れが深いんです。それで、私は今、品川区の中延でここにあるように中延機械という機械工場のおっさんをしていますんで、年に何回かしか出る機会がありません。ですからネクタイは持っているけれど、あまりしたことがないので、今日は皆さんには失礼しますけれども、ノーネクタイで参りました。ご了承いただきたいと思います。それで、まずこの座談会の質問事項ですが、食堂事情というのは「食堂事情」なんですか？「食糧事情」の間違い？

石田　食糧でしょう。ミスプリントでしょう。

国見　食糧だと思いますが、あえて食堂事情をお話ししますと、学食というのがあったんです。それで大学になってから大分出入りしたし、その二階が野球部の更衣室だったものですから、毎日出入りしていたのです。それで、そこで食べるカツライスは肉がまるっきりハムみたいでしたよ。それでも美味しかったです。本当に美味しかったですよ。それと体が甘い物を欲しがるものですから、ドーナツですね。非常に美味しかった覚えがあります。それで、ここにある先生の印象というのは皆さんのおっしゃったことと同じですから、割愛します。私は中学から大学まで野球しか知らない男でした。勉強はできないし、その代わり野球のことは一生懸命やったんです。その時の思い出なんかはたくさんありますけれども、言えばきりがないんです。その後の大学になってからの首都リーグね。今で言う首都リーグになってからの、もし

機会があれば次回に長くやりたいと思います。今回は僕が野球小僧だったということと、彼が悪い人間なら、僕は良い人間だということをね、是非この席で言ってみようかなと思ったわけです。もし機会がありましたら、またの機会がありましたらお話ししたいと思います。ありがとうございました。

石田　それからね、もう一つ言っておきますけれど、賀川先生の講義を受講した時に、ちょっと驚いたことがあるんだけれど、トルーマン大統領のことを「トルーマン君」と言ったんですね。そしたらみんなびっくりしたんです。それで、お聞きしたら、フーバーさんが大統領時代にアメリカへ行って、今日のいわゆるアメリカの協同組合の基礎作りみたいなことでアドバイスをしたという話をされていましたね。だから、明治学院に入って驚いたのは、賀川さんの「トルーマン君」とボケさんの「ダレス」には驚きましたね、この二つには。とっても驚いたのを覚えています。

原　ありがとうございます。それでは最後になりましたが、中村さんにマイクを。中村さんは、明治学院大学の中村仁一総務部長のお兄様にあたります。お父様は鵜の木の農場の管理人をやられた方で。

藤本　あのお父さんが。よく覚えています。

原　はい。それで戦時中に焼夷弾が農場管理棟に落ちた時に消し止めて、矢野学院長から感謝状を戴いたという。

石田　いや、僕だって農場の話をしようと思っていたんです。長くなってしまうのでやめました。戦後、農場によく行かされたんですよね。

藤本　そういえば中学の時、鵜の木の農場に行かされたことあるよ。

石田　あるでしょ。それで……

原　芋を栽培する。

石田　そう。それであそこの帰りに、巨人軍の合宿所があるもんですから。

原　戦後の食糧難の時に芋を栽培して、皆さん助かったのではないですか？

石田　あの息子さんとお父さんと二人で…おじいちゃんなんだ。じゃあおじいさんと息子さん。おじいさんって中村さんのお父さんかな？その二人に指導されたことがある。

中村　それでは中村です。よろしくお願いします。もう、諸先輩方が話された明学との思い出話、それに尽きるんですけれども、私、原さんの方からご紹介いただきました、鵜の木の農場を預からせていただいた、あのときの中村の息子でございます。兄仁一も明治学院にずっと最後まで勤めさせていただいて、最後は総務部で終わりまして、二年前に八十二歳で天に召されました。それは個人的なことで、申し訳ございません。

ところで、私は、諸先輩の最後の学年ということになりますが、昭和二十二年に明治学院の中学部に入りました。まだあのころは、中学校と言わずに中学部と言っていたようですね。そこで面接試験だけだったんです。それで小学校六年の三学期でしたかね。二月頃でしたか、面接試験がありまして、そのときに、質問がたった一問だけだったんです。後でわかったんですが、その質問をされた先生が矢作弥寿久先生でした。それで、「今、もし紙が無くなったらどうする？」という、これだけだったんですね。そのとき、私も、どなたかおっしゃったように、家族構成とか色々そのこと聞かれるんではないかと思っていたんですけれども、後藤先生でしたか。全然違ったことでしたので、とっさにその答え

が出てこない状況だったんですね。ですが、「勉強ができなくなります」と、いきなりそう言ってしまったんですね。その後に「大好きな絵が書けなくなります」と、それだけ答えたんですが、それがどうしたのかわかりませんが、合格発表と言いますか、入学を許可されて明治学院に入ってきたわけです。

それで、最初のチャペルでの入学式の時に、全校の先輩を含めて讃美歌ですね。それから校歌。それを聞きまして、びっくりしましてね。「こんないい歌があるんだ」と。それまでは歌というと、小学校の時は、軍歌しか歌わなかったですね。出征兵士を送る歌とかですね、そんな歌しか覚えていないものですから、こんなにいい歌があるんだということを初めて知りましてね。びっくりしたことを覚えております。

ちょうどそのころ、教育制度が、昭和二十二年でしたか昭和二十一年ですかね。昭和二十二年ですね。ちょうど私が入った年に改革されて、六・三・三・四制が施行されたわけですよ。ですから、旧制の五年生と新制の生徒とがこの学校にも混在していて、すぐにそれがまた先ほどおっしゃっていたように、学年編成を変えて高三になられたとか高二になられたとかいうことになったようです。その時に榎本健一の息子の榎本鎌一さんが入っておられました。

私がこの学校で英語を好きになった話を一つさせていただきます。当時、一年生の時使っていた教科書が *Let's Learn English* という非常に紙質の悪いざら紙の教科書でした。辞書というものがありません。戦中は敵性外国語ということで、持っていてはいけないとかだったのですけれど、どういうわけか私の兄が三省堂の『コンサイス』の辞書を持っていました。表紙が取れかけている、しかも旧漢字、旧かなの辞書なんですが、それ一冊だけ兄からもらいまして、それを授業に使いました。渋谷先生が、その時リーダーの担当でしたけれども、「おぉ、君珍しい辞書を持っているね」とおっしゃっていました。それから英会

話の授業は、卵のような顔をした顔の丸いBruns先生で、若い宣教師の先生でした。その先生との出会いが、私を英語好きにさせてくれたと思います。というのは、一年生の夏休みに、何かの用事で学校に来ました。午前中だったのですけれども。それで、グラウンドを突っ切って校舎に向う途中に、たまたまそのBruns先生と出会いましてね、一学期のときのBruns先生の授業は苦痛だったんですね。もう指されるのが怖くて、もうしどろもどろだったんですけれども。そんな状態で出来の悪い私がたまたまそのBruns先生と一対一で出会うことになったんですね。それでもう汗ダクダクで、夏ですけれども心臓が弾けそうな状態で、授業でいつも言ってるオウム返しになるんですけども、“Good, morning, sir, Mr. Bruns”と言ったんですよ。もうしどろもどろになって。そうしましたら、Bruns先生もにっこり微笑みながら、“Good morning, Mr. Nakamura”と言ってくれたんです。この“Mr. Nakamura”の一言が私を英語好きにしてくれたんです、実は。あれだけ多い生徒の中で、しかもばったり出会った生徒の名前まで言ってくれたんですよ。これが明学の宣教師の方々の力だなと。それから、二学期以降の英語の授業がとっても好きになりました。これはもう私を好きにさせてくれたBruns先生に感謝です。それが英語好きになった一つのエピソードとして“Mr. Nakamura”この一言が今日の私にしてくれたのではないかなと思っております。

それから、明学のチャペルです。このチャペルは本当に東京都でも記念の建物ですか、保存の建物の一つにしておりますよね。それで、そのチャペルが大好きで、自分でもスケッチはするんですが、今使っておりますパソコンにも、十年来パソコンの壁紙にしております。誰が来ても「変わらないね」と言われるくらいチャペルの壁紙をスクリーンにしております。

それから、英語の授業で教わった先生方。先ほど国見先輩が仰っていたように、何を思い出せるかなということなんですけれど、渋谷一之助先生が中三の時の担任でした。リーダーをお持ちでした。あの先生は物静かなジェントルマンで、小柄な先生ですけれども、ちょっと髯を蓄えておられまして、それで板書に書く文字は活字体で筆記された先生でした。それから渡辺勇助先生、渾名を「ペリカン」とおっしゃるんですか？中一の時の担任。英作文を担当していただいたものです。それで、英作の授業なんですけれども、せっかく苦労して先生から与えられたテーマを英作して黒板に書くんですが、書くそばから消していくんです。「これ英語じゃないよー」なんて言いながら消して行かれた。そんな思い出が渡辺先生の授業にはあります。それから高橋源次先生からも英語を教えていただきました。校長先生でしたけど、英語の授業も担当されて、あの先生は体格の良い方ですけれども、イギリス訛と言うんですか、ロンドン訛の発音なんですね。それでガレージとガラージの違いを「発音が違う」と生徒が言ったら、頑として「私はイギリス式なんだから」と直さなかったですね。アメリカ式の発音はしませんでした。高橋先生には色々お世話になりました。それから、斎藤国治先生、「ピーチク」という渾名だったと思うのですけれども、あの先生はテクストをほとんど使わないんですね。丸善とか紀伊国屋から取り寄せた洋書を使ってWashington Irving の *Sketchbook* を講読しました。それで、あの先生は、私が大学卒業の時に、「お前の嫁さんは俺に任せろ」なんて言われたんですが、それだけは丁寧にご辞退申し上げました。その後、卒業後もクラス会などで斎藤先生をお呼びして昔話を色々させていただきました。それから小池正二先生。渾名はちょっと不明なんですけれども、高一の時の担任です。あの先生は、眼鏡の奥から生徒をジッと見る時の、あの気持ちが何かくすぐったい感じの先生でした。ちょっとルーズな部分がありまして、級友たちはそのルー

ズさが好きという人もいたようです。要するにサボれるということだったと思うんですけれど。それから山本先生。「ボケ」という渾名です。あの先生、先ほどおっしゃっていたんですけれども、間違えますと「ボケナス！」と言うのが口癖だったんです。ですから「ボケ」とか「ボケナス」といった渾名だったのではないかと思います。それから松本亨先生。大先輩でもありますし、卒業後宣教師と一緒にアメリカへついて行っちゃったという話を聞いたことがありますが、あの先生には、「しょっぱい思い出」があるんです。苦い思い出ではなくて、しょっぱい思い出。というのはあの先生の英語演説を取っていたんですけれども、私がLとRの発音を間違えたんですね。そしたら“Come up here”と言われましてね、“Open your mouth”って言うんですね。口を開けましたら無理矢理三本指突っ込みまして“L is here. R is here”って言って、いきなり指を突っ込まれたんですよ。そういうことで、その指の味がしましてね。しょっぱいという感じがしたんですけれどね。そしたら、私だけでないんですね、そういう経験をしたのは。何人かいたらしいです。そんなことがありまして松本先生にはESSでも散々お世話になりました。それで「英文法は後からついて来るよ」と言うのが口癖で、英文法の担当の先生には悪いんですけれども、随分私は「目から鱗」という感じがしました。英語の教師になっても英文法が苦手で、授業中に生徒から、英文法の質問を受けて立ち往生してしまったことがあるんですね。“that”という接続詞だか関係詞だか代名詞だか指示代名詞だかって色々質問されたんですね。それでえらく立ち往生したことがあるんですけれどね。それから英文法は必要だってことで生徒に教わる、つまり教え子に教わるっていうんですか、やっぱり教師は子に教わるんだなということを実感しましたね。ですから教師は生徒に育てられるんだという感じを持ちました。それから、由布先生ですか。渾名を苗字をもじって“if”なんて言っていたんですけ

れどね。この先生はチョークを投げつけるんですか？

原　出来ないと、たまに教科書で頭を叩く。

中村　それもあるんですよね。少し乱暴なところのある先生であったと記憶しております。それから岡野先生は左手で文字を書かれるんですね。そんなもんですから裏文字を書くんですよ。度肝を抜かれたのを覚えています。それから平林先生はピューリタン文学でジョン・ミルトンが専門でいらっしゃったんですね。で、*Samson Agonistes* ですか。サムソンとデリラの物語ですね。あれを講読しました。それから三神先生はシェークスピアが担当で、色々な戯曲を翻訳なさったりして。ですけど単位落しましてね、翌年、再受講したんですけれど、でもシェークスピアの作品、三神先生のおかげで色々と読ませていただきました。それから竹中治郎先生は「オタケさん」という渾名がつけられていたと思うんですけれど、個人的にも一番お付き合いさせていただいた先生で、ちょうどお住まいが目蒲線の鵜の木って駅の近所にあったんですね。たまたま、私の家が多摩川の農場の管理所にあったものですから、近いんです。歩いても一〇分くらいのところなんですね。ですからよく先生のお宅にお邪魔したんですけれども、それは小学生の頃からなんですね。ですから、竹中治郎先生には色々お世話になったんですが、大学では音声学を取らしていただきまして、卒論も音声学でやらせていただいたんです。その当時、その年度、卒論を音声学で取ったのは私だけだったものですから「お前一人だけが音声学の論文だよ。誰とも比較できないから」と言って、お情けで、なんとか論文を通していただきました。ただ高校二年、三年でしたか、後藤先生はひょっとしたらご存知かもしれませんが、グルー・ファンディション（グルー基金）というのがありまして、日本の高校生をアメリカで勉強させようという留学制度があって、それに明学からも応募しました。その中の一

人に、私も応募しましたのですけれど、もう一人K君という二人が応募したんですね。ところが、たまたま親父がその年の十一月に病院に入院して、大学附属病院なんですけれど、そこで手術中に亡くなりました。あの頃は、まだ占領下の日本でしたから、留学生の選定基準の条件の一つに経済的な裏づけが必要だったのでしょうか、「両親が健在であること」という項目があったのです。で、十一月に父が亡くなったものですから、せっかく竹中先生に留学先を予定していた大学への推薦書を書いていただいたのですけれど、それがその時ボツになってしまいまして、非常に悔しい思いをしたことを覚えております。父を亡くした寂しさというか、それと同時に留学がダメになったという悔しさがあったんですけれど、それでも竹中先生に「明治学院の大学を出てからでも留学は遅くないよ」と慰められまして、それで明学の英文科に行こうかなと気になったわけです。ですから、そういうことでご助言いただいたので、後藤先生はじめ恩師は有難いなと思います。

それから外国人の先生方ですけれども、先ほどOltmans先生のお話が出てきましたよね。Mrs. Oltmans先生は非常に厳格な先生でして、あの先生の思い出といいますと、高二の時だと思いますけれども、英会話で上級クラスの英会話を担当されていたんですね。その仲間に入れさせていただきましてね、あるとき、私の友人がOltmans先生との応答の中で、最後にうっかり“Mr. Oltmans”と言ってしまったんですね。普通でしたら“Mrs. Oltmans”と言うところを、答えを言った後につける敬語があるわけですね。その時“Mr. Oltmans”と言ってしまったものですからOltmans先生の顔が急に変わりまして、当時、日下先生が校長だったと思うんです。いきなりOltmans先生が教室を出て行かれまして、校長先生を連れてきて、「この生徒、私に無礼しました」と言って、それを英語で言わないで日本語で言うんですよ。日本

語の堪能な先生でしたよ。Oltmans 先生は、中国で宣教師を長いことやっておられたらしいんですね。ですから漢字が書けるんですよ。「亀」という字を旧漢字で黒板に書かれたときは度肝を抜かれました。

石田　いわゆる隠語みたいなのを使わないと、わかっちゃうんですよ。

中村　そうなんですよ。そういうことで、Oltmans 先生はケンタッキー生まれのケンタッキー魂の強い先生で、Oltmans 先生のことでもう一つの思い出は、占領下の日本でしたから、駐留軍の兵士達がジープで走ってくるわけですね。その時にちょうど明学の校門の脇の塀にぶつけたわけですよ。そのぶつけた時に学院の生徒が巻き込まれて、人身事故になってしまったわけです。

石田　僕らの同級生ね。

中村　そうですか。その時に Oltmans 先生が出てきて、MPに食ってかかってるんです。あのすごいバイタリティっていうんですか、剣幕っていうんですか、いまだに印象に残っていますね。それが Oltmans 先生の思い出でしょうか。それから VAN WYK 先生という体格の良い先生でね。その先生がアメリカ史を担当したんですけれど、これもペーパーバックの分厚いアメリカ史のテクストをアメリカから取り寄せて、それで試験というとこれの三分の一から半分くらいが出るんですよ。アメリカ式のテストなんですね。非常に往生したことを覚えています。それで VAN WYK 先生の奥様が非常に綺麗でしてね。毎週火曜になりますと English Service というチャペルで英語での礼拝があるんですね。VAN WYK 先生の奥様が担当の時にはチャペルが一杯になってしまうんです。そんなエピソードもありました。

石田　VAN WYK 先生には、そのころ、小さいお嬢さんがいましたよね？

中村　そうです。そうです。いましたよね。はい。

石田　あの子に言われたことがあるんですよ。「タクシーじゃないよ taxi だよ」と言われて。

中村　そうですね。そういうこともあったかもしれませんね。そんなことで、外国人の先生にはＥＳＳで色々お世話になりました。

石田　Oltmans さんの弟さんにも習いましたよ。

中村　そうですか。Mr. Forman 先生には、大学のときに、ＥＳＳの英語劇でご指導を受けました。ＥＳＳの会長をしていた四年次のときです。中学と高校での、英語以外の恩師についてですが、聖書の大川先生は中学校長で、日下先生が高校の校長でした。国語では、安藤徳夫先生（渾名は「安南カバ」）には、中一のときに「この世にて、始めてわれを見たる人、そは母、その日の清き面影を、曇り荒らすな、母のため」が最初の授業で先生に教えられた文章でした。ワケあって教員室に幼い乳飲み子を連れて来ていたので、保健室の先生や事務室の女性職員が面倒を見ていました。大西貞治先生は、『ペン字対照手紙大辞典』の著者でした。斎藤先生（渾名は「アンパン」）は、老年の優しい先生で、どんな答案を書いても合格点でした。斎藤先生（若先生）は、色白で、縁なしメガネをかけたモダンな先生でした。海老原先生（渾名は「エビンチョ」）は、実家が五反田の靴屋さんで、授業では落語家のような口調の先生でした。木村真太郎先生（幽玄）は、漢文と書道を担当されていました。社会では、原田昂先生（渾名は「ギャング」）は世界史を担当され、生活指導も担当されていて、生徒からまきあげた物は絶対返さないことで有名でした。高井貞橘先生は日本史でしたか？高橋泰郎先生は世界史をご担当（フランス語も担当されていた）。佐藤泰正先生は地理をご担当でした。細田弥彦先生はいつもリーゼント・スタイルの整髪で、授業で「教科書のはしがきに書いてある内容を記せ」が最初の試験問題で、しっかり書けたのはＹ・Ｊ君ただ一人で

した。数学では、佐田信行先生が老先生で、御手製のプリント教材（有料）をよく配布していました。

その他では、延原弘一郎先生の板書の端正な文字や数字が印象に残っています。延原弘一郎先生は物理のご担当でした。宮崎栄先生（渾名「ゾウさん」）は、生徒から挨拶を受けると、丁寧に返礼してくれる優しい先生でした。理科では、化学の後藤進先生（渾名は「消防自動車」）は、とにかく卒業したてで赴任されてこられたバイタリティーに溢れた先生で、私は化学の化学記号式が苦手でした。いつまでもお年を取らない先生に、私もあやかりたいと思っております。矢作弥寿久先生の化学では、実験が面白かったのですが、テストではいつも四苦八苦でした。生物の吉原幸二先生（畏れ多くも昭和天皇にそっくりなので渾名は「テンノウ」）は、英語にもご堪能で、自宅で数学と英語の塾をされていました。吉岡立滋先生は技術と家庭科のご担当。また、生物の関根正治先生（渾名は「ケロ」）は、多摩川の実習農場のご担当もされていました。この先生からビンタを食らいました。いまだにどうしてビンタを食らったかが分かりません。体育では、藤井信之助先生が俳優の佐田啓二そっくりの先生で、その教え子が私の元勤務校の英語担当教員でした。他に、古坂三男先生、恵良照義先生がおられました。芸術では、音楽の小泉洽先生がおられました。また、同じく音楽ご担当の上田公子先生には、「汽笛一斉新橋を（鉄道唱歌）」のメロディーで、聖書の各書の名称を暗記させられて、「マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ伝、使徒、ロマ、コリント、ガラテヤ書、エペソ、ピリ、コロ、テサロニケ、テモテとピレモン、ヘブライ書…」という風に今でもしっかり覚えています。あと、美術では大堀俊次先生がいらっしゃいました。

それから、事務局とキャンパスについてですが、授業の開始と終了は、校舎の中央のグラウンド側にある鐘を、背骨の曲がった小柄な男の用務員の井上さんが鳴らして知らせていました。また、礼拝以外の集

会は、晴天時には校庭で、雨天時には礼拝堂で行われていました。体育祭は中高合同で行っていました。高三の時の体育祭のアトラクションで、仮装行列に「大久保彦左衛門　盥の登城」で参加し入賞。高二の時は「ジャンヌ・ダルク」の鎧姿に扮装して参加しましたが、残念ながら落選でした。

多摩川河川敷の農業実習場についてですが、戦中・戦後しばらくは、食糧生産のために河川敷がいくつかの学校に東京市から貸与され、農業実習が実施されて、明治学院からも生徒たちが東急目蒲線の鵜の木駅から十分ほどのところにある実習農場まで通って来て、慣れない手つきで農具を扱い、農場担当者の私の父がその指導に当っていました。終戦までは、連日連夜の東京空襲で、付近の軍事工場（三菱重工業）が被災しており、近隣の民家も焼夷弾で焼け野原となりました。戦後も、いち早く農業実習が再開されて、夏休みには当番制で農場の作業を行なうこともありました。多摩川が氾濫すると、農場は冠水して、農作物は全滅状態になりました。砂地なので、さつま芋、ジャガイモ、大根、ゴボウなど、根菜類がよく出来て、収穫したものは生徒や教職員に配給されて、大変喜ばれました。戦後の日本の経済回復と共に、農業実習は縮小され、借用していた農場はグランドに整備され、体育の授業や、運動部の練習場として利用されるようになりました。当時、川崎市の溝の口に大学の学生寮が開寮し、それとともに実験農業場として鵜の木からこの地に移りました。

後藤　今、中村君が言った海軍墓地の入り口の、そのそばに理科室があって、僕が昭和二十三年四月に就職した時に、自分は理科の教員なものですから、理科室でそこが職員室になったんです。それは私にも関係があるんですが、新サンダム館ですね。これは昔、旧ヘボン館の隣に出来たんですけれども、明治二十年にサンダム夫人の寄付によって建てられて、それが大正三年に火災消失するんですね。その跡地に、現

在の礼拝堂が大正五年三月に建ちます。それはご存知だと思いますけれど。それで、その後、大正五年五月に新サンダム館が現在のヘボン館のところに建設されるんです。それを私達は理科室として使用します。一階が化学の実験室で、二階が物理の実験室。それで生物も物理と共有します。その下を美術室にして。私たち中学一年生でその特別教室へ実験のために行った。そこで理科の講義があるんですが、その時に私ども一年生は教室が変わるものですから、三々五々、列をなしながら集まってきて、非常にフレッシュな思いで理科室に行った経験があるんです。その新サンダム館はもちろん海軍墓地の境でございますから、それを大学が現ヘボン館を建築するために撤去し、なくなってしまうわけですけれどね。

石田　海軍墓地の隣の理科室ですか？

後藤　そうそう。

石田　我々の頃あそこに医務室もあった。それで、緒方という先生がいたではないですか。

後藤　そうね。

石田　緒方先生の奥さんになった人。

後藤　そうね。医務室が横に新しく出来たんですよ。僕が中学部の時は無かった。

石田　無かったでしょ。

後藤　うん。そうそう、それはね、僕が教員になってから出来た。理科室は、教員になってからも使いましたけれどね。日当たりが悪くてね、中学部のころはね、そういうところで、「そこにいる教員は長生きしないよ」とよく言われたんですよ。私は今、八十二歳ですけれど、まぁどうにか生きているんですけれど。そんなジンクスがあるんですよ。以上、新サンダム館のことを補足しました。

石田　体操の時間に気持が悪いって仮病を使って医務室に行ったんですよ。そうしたら緒方先生の奥さんになる人、その人が先生のところに用があるから留守になるんですよ。そうしたら、葡萄酒は当時、中学生ぐらいだから葡萄酒は赤玉ポートワインしか知らないんです、甘い葡萄酒しか。そうしたら生葡萄酒が置いてあったんですね。これを飲んだら「甘くないじゃないか」と、そういうことがありましたね。

原　新サンダム館で、僕ら中学生が理科室で矢作弥寿久先生に化学を習って、建物の渾名が「発電所」で、その建物の窓の鉄枠が錆びてしまっていて、ひどかったですね。高校の時は、小泉洽先生に音楽を理科室のところで習って。それで小泉先生というのは、とにかく「君たちはベートーベンって発音するな。ベートーフェンと呼びたまえ」と言ってね。サンタクロースみたいなおじいさんでしたけれど。卒業してわかったのは、あの先生が『新版音楽辞典』を東京堂から出版していて、後で「偉い先生だったんだな」と思いました。

石田　僕は知らなかった。

原　あと、中学に入って驚いたのは、上田公子先生という音楽の女の先生がいて。

石田　おばあちゃんね。

原　女の先生がいて、もうおばあさんでね。

石田　そう、おばあさん。

原　それが怖い先生で、入りたての我々少年をよく叱るし、音楽といっても、ピアノを少し乱暴に「バン、バン、バン」って弾くわけですよ。あまりリズミカルじゃないんですよ。それで「私は上野の音楽学校を一番で出たの」とか何とか言ってね、でもあの先生も、実は私は卒業した後で偉い方だと分かりました。

僕らが覚えているのは、聖書の旧約から新約の書名を「創、出、レビ、民、申命記…」とか「マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ伝…」と鉄道唱歌のふしに合わせて覚えさせ、試験にその問題を出されたことがあります。

中村　鉄道唱歌ですね？

原　それをテストで、鉄道唱歌に合わせて書かされました。

中村　牧師先生ですよね？

原　上田先生の旦那さんは牧師先生で、自分も牧師の資格を取って、刑務所の教誨師をやっていたんです。そして「生涯に旦那さんと三つ教会を建てたい」と言って、一つ目は旦那さんが存命中に成功して駒込教会を建てて、その後、旦那さんが若くして亡くなった後、明治学院中学校の音楽教師をやりながら貯めたお金で、自ら練馬区の中村町教会を二つ目として建てた。三つ目まではいかなかったんですけれど。教会を建てられた偉い方だと後でわかりました。

副島　こういうことがあったんですよ。日本人の先生は、授業時間になっても遅れてくる先生が多いですよね。それで時間をオーバーし、休み時間までオーバーランして、さらに悪い時は次の時間までちょっと入ってしまうことがよくあったんです。そうするとOltmans先生は、もう自分の担当時間の遅くとも五分前には教室の前で待っているんです。それでね、じっと終わるのを待っているんです。それで授業が始まると、まず開口一番「日本人の先生は時間にルーズだから私は嫌いです」と言われたことがあります。そういう言葉を聞いて、強烈に印象が残っていて、もう未だに、何かこういう会議があっても、時間に遅れるっていうことが絶対に嫌いになったんですよ。

藤本　そうですよね。理由が全然わからないんですよ。高三の時に、なぜか突然Mrs. Oltmansが怒り出してね。生徒は何て返事していいのか。大体何で怒られているのかもわからないし、先生も何を言っているのかもわからなくて、誰かが最初に教室を出て行ったんです。そしてまた怒鳴っているから結局みんな廊下に出て行って校舎の裏へ回ったり、校庭に出たり。そうしているうちに、当時の教頭だった渡辺勇助先生が出てこられて、「どうしたんだ」ということで、結局Mrs. Oltmansと渡辺先生で話して、何か僕らお咎めあるかなと思ったら、「もう良いから、教室に戻れ」でね。何もなしに終わったことがあるんですけれど。原因は未だに分からず。なぜ怒られたのかわからず。なぜ収まったのかもわからず。ただ怒られて、こちらは何て説明すればいいのか、謝ればいいのかも何にも分からずに、ただおたおた高三の生徒がぐるぐる校内を逃げ回っていたのを覚えています。

後藤　中学部の時、僕が三年生の時に、Mrs. Oltmansが英会話の先生だったんですけれどね。戦前です。その時には、授業中に私語をしていると閻魔帳に印を付けるんですよ。それを減点の対象にしているんですね。そして僕が昭和二十三年に明学に教員として入ってきた時に、Mrs. Oltmans先生が、今度は英会話の先生・宣教師として来られるんですね。それで、その時、僕は教務に配属されたものですから、そうすると、Mrs. Oltmansが教員室にいますと、生徒達が「先生がいなかった・繰上げでいない」と、騒ぐんですよね。静かにしてくださいと言うと。そうするとMrs. Oltmansが怒るんですよね。「あのクラスうるさい」と言ってね。そうすると、僕がしょうがないから、代りに「君たち静かにしなさい」と静めに行くんですよ。僕が何回行ったことかわからないんですけれどね。そういう僕はMrs. Oltmansとの関わりを持っているんですけれどね。教務で、教員の時に教務部にいた時です。

藤本　そういうことだったのか、なんだか知らないけれど。

後藤　だから日下先生を呼びに行ったとかね。

藤本　だけど、こちらは言葉が不自由だし、さっきの話だったら日本語で言えばよかったのかもしれないのにね。

石田　我々の時には、終戦直後だったでしょ。だから尋常高等小学校があったんです。中学に行かないで高等科というところに行った人がいるんです。それが我々が中学に入ってきた時に高等科一年、二年なんです。高等科って、あの時、一年で中学に入ってくる人、あるいは二年で終わってまた中学一年に入ってくる人が一緒くたなんです。だから、我々よりもひどい時は、二つ年が上なんです。あの頃、年が二つ違うと、体も何も全て全然違うんですよ、小学校六年生と中学四年生くらいだと。それが一緒くただったということを今でもよく覚えています。だから、今でも僕より一つ上の年は友人が随分多いよね。昭和七年生まれとか。だから、もしかしたら、望月先輩と同じくらいの人が、我々と同じ友達という場合もあるわけですね。だからあの頃はそういう現象が多かった。それに、「学童疎開で勉強しなかったから一年下がって来たんだよ」という人が多かった。空襲でやられてしまって学校に行かなかったとか、そういう人がみんな我々と一緒になってしまうんですね。そういう現象がありましたね。で、大学に入ったら入ったで、まだあの頃、旧陸軍軍曹だったとかいう人が、頭がハゲてる人とかが来ていましたよ。そういうのが当時社会的現象としてありましたよ。

後藤　僕の同級生で小笠原君というのが、復学してこっちの大学へ来ていましたよ。後に歯医者になりました。

南　僕は新制中学校になって、初めて教師になったんですよ。六十年前のことを思い出しているのですが、十二歳の少年を初めて教えたわけなんですけれど、実際、新制中学ができたのは法的には昭和二十二年四月一日となっていますが、間に合わないものだから、昭和二十二年の五月三日に新憲法施行日に発足したんですね。開校当時、明治学院中学校では教科書はちゃんと生徒に手渡されましたか？その時までに間に合いましたか？僕の記憶では、公立の中学校は、学校は発足したけれど、教科書がないんですよ。教科書が間に合わない。それで、先生用だけにわら半紙に教科書の始めだけを印刷したものが届いた。それで生徒には、随分遅れてから教科書が届いたんです。新制中学校の時、明治学院の方はどうでしたか？

石田　やはり教科書はなかったですよ。

南　こっちもそうですか。

石田　先ほども申し上げましたけれどね。わら半紙を自分たちで切って繋いでね、それで一冊にするんですよ。一枚のところにべたべたっと印刷してありますからね。それを自分たちで切って、本にして一頁、二頁とやって……

後藤　新聞紙のように畳んであってね、僕もその時期に教員でしたから、その時こういうのがあって、テキストにするんです。

南　随分遅れて、教科書が生徒に手渡されたことが記憶に残っています。開校当時は困惑しましたよ。教科書がありませんからね。

後藤　中村君たちはまだ良いんですよ。

中村　戦後の英語の教科書の *Let's learn English* のことを思い出しましたけれど……

後藤　僕は昭和二十年卒業なんですが、帝京商業という学校で昭和二十年十二月から教えていたんですけれど、その時にテキストはそんなような状態で、わら半紙に印刷されているのを切って、本に作って、そして授業をやる。だけれど、もちろんテキストの体裁はほとんどないですね。中身も貧弱というか、自分でテキストを作らなければ教えられないというようなね。私はもう自分でテキストを作って教えましたけれどもね。昭和二十二年というのはそういう時代でしたね。明学は昭和二十三年からですが、その帝京商業時代では、私はそういう風にして教えました。

原　それでは時間も予定を過ぎましたので、一応これでお開きにさせていただきたいと思います。本日はみなさん、本当にありがとうございました。

資料

（戦後の明治学院事情）

戦中戦後を通じた激動の生徒・学生としての明治学院生活

副島秀夫

一九四三（昭和十八年）　明治学院中学部一年入学

◇戦争最盛期の割にはノンビリした校風だった。

◇毎朝礼拝があり、教師が交代で礼拝堂で祈りを捧げた。祈りの中で此の戦争で日本が勝つ様にお願いしていたが、我々生徒達は「アメリカでもアメリカが勝利するように祈って居るんだろうね。神様はどっちを応援すればいいか困ってるよね」とコソコソと話し合ったものだ。

◇教科に「教練」という軍事教育があり、教官という軍人らしき人物（派遣将校）が担当したが、比較的優しかった。生徒達の仕草を見て吹き出す事もしばしばだった。

◇或る日、一年後輩の新入生が礼拝堂の筋向いに在った国道沿いのテニスコートの脇の五メートル

以上の高さの所から転落し、それを見た若い軍服姿の教官が、その崖の上から飛び降りて、その生徒を抱き上げて連れ戻したが、生徒はそのまま死んで仕舞った。

◇喜劇王のエノケン（榎本健一）氏の一人息子の榎本鍈一君が同期生で、父親のエノケンさんが燕尾服とシルクハットの出立ちでステッキを持ち、先生への挨拶の為に校門から坂を上って校庭を横切りながら闊歩する姿を、偶然拝見した事を思い出す。

◇第二学年後半より、学徒動員で羽田の荏原製作所(同級生の松浪君の親父が当時専務取締役だった関係)の工場勤務となり、勉強嫌いだったので喜んでいたところ、当時の数学・物理の担任だった延原先生が勉強の遅れを心配して、上級生の指導で勉強の時間を設けたのに、殆んどの生徒がサボったのに腹を立て、全員を集め一人一人が立たされて往復びんたを食わされた。しかし、今でも愛の鞭に感謝している。現代だったら暴力先生だとＰＴＡやマスコミが大騒ぎするだろう。

◇工場は今の羽田空港の所にあったので、暇をみて友人達と空港の中に忍び込み、置かれて野晒しにされていた中型の爆撃機に這うようにして乗り込んだりした。

◇中学三年になってから、勤務先が日本橋の日本銀行本店に変わり、空襲の焼け跡から瓦礫を大八車に一杯掻き集めて、地下四階ぐらいのエレベーターホールに投げ込み、一階まで埋め込んだところで終戦となる。お陰で普通では絶対入れない地下大金庫とその中の又その中の金庫まで入り、その中に納められていた古い国債証券を持ち出して、エレベーターホールに投げ込んだ。勉強より貴重な経験だった。

一九四五（昭和二十年）　明治学院中学部三年在学中八月終戦

◇当時、東京は焼け野原の状態で、日銀へ通うのに、渋谷駅から地下鉄銀座線に乗り換えたが、渋谷の駅前も瓦礫と化していた。その瓦礫の影（今のバスターミナル）で用を足した覚えがある。その直後に終戦（敗戦）となった。

◇それまで影の薄かった十字架バッジが表舞台に登場し、洋服の胸やら衿に誇らしげに光り始めた。しかし、学業の方はあまり冴えなかった。

◇終戦直後、空襲に備えて掘った防空壕の中を掘り起した際、何故かアメリカかイギリスの国旗が収まっていたのを見た。

◇戦中・戦後の激動時に院長を務めた矢野学院長先生は、終始優しく接してくださった。

一九四八（昭和二十三年）　明治学院新制高等学校第三学年へ編入

◇六・三・三制導入に伴い、新制高校三年生となる、激動の学生時代だった。

◇学院長は村田先生、校長は高橋先生、英語は山本先生（渾名は「ボケ先生」）、国語と漢文は関根（文）先生、佐藤先生、歴史は原田先生、数学・物理・化学は延原先生、西垣先生、生物は関根（正）先生、音楽は安部先生達だった。また、宣教師でアメリカのミッション・ボードから派遣された若い先生はヴィリエルモ先生、バルカー先生、フラハティ先生、ペニングス先生だったと思う。彼等は戦勝国の顔など全く見せず、良き兄貴達だった。また年配の女性宣教師で、オルトマンス夫人だったと思うが、厳しい方だった。

◇未だ敗戦直後だったので、我々日本人は暖房も不十分な家庭生活を送っていたので、時々校内にある宣教師宅（ハナフォードご夫妻）に招かれた時、素敵な暖かいストーブに感激したものだ。

◇その頃、戦中に陸軍幼年学校や海軍飛行予科練習生（予科練）に憧れ、入隊していた連中も戻って来た。

◇校庭での草野球も盛んになり、校内大会で優勝した事もあった。思い出として、校庭の端から大飛球を打ち上げて、チャペルにまで当てた事が思い浮かぶ。

◇中高を通して校長だった高橋校長先生（中学部入学時は漆山先生）は体格が良く、何しろ元気者だった。

◇同級生はその頃からボンボンが多かった。その為か、明学の卒業生には、社会人としては出世頭が少ないのかもしれない。

一九四九（昭和二十四年）　明治学院大学経済学科一年入学

◇英語が苦手なので経済学科に進学したのだが、当然必修科目の「会計学」が難しくて、何が何だか解らないまま、同級生のノートを見せて貰って単位だけ取得した覚えがある。しかし、卒業後の就職先が経理部だったので、先輩女子社員の作業を盗み見しながら、また過去の経理資料の成り立ちを確認しながら、実務をこなして行くうちに学校で習った事柄がだんだん解ってきたものだ。何とか体面だけは保った。

◇アメリカの日系人で既に有名だった松本亨先生が帰国し、ＮＨＫの英会話講師になり、また明学

で教鞭を執る事となった。最初の受講生となり、発音の良さとThinking in Englishという事を教えて戴き、不得手ながら、比較的発音には自信が持て、他所で褒められた事もあった。

◇その当時は女子学生が少なく、特に経済学科では人数も非常に少なく、可愛い子も見当たらなかったが、英文学科と社会学科には、それなりに新入生には女子が目立ち始め、仲良くする事も出来、下心も無く楽しくお付き合いさせて戴き、卒論の清書をして貰ったり、誕生日に招かれたりした覚えがある。卒業後、就職先の会社まで訪ねて来られた女子学生も居られた。当時希少価値だった女子学生も、今では校内を歩けば女子学生に当たる。

◇学内部活動はSCA（Student Christian Association）で、女子学生が多かったから入部したのかもしれない、新入生の中には社会学科主任教授・若林先生の娘さんも居られ、親しくお話しさせて戴いた。

また当時の仲間で、後に渡米し大統領府付き通訳（実際に米国大統領が来日された際、通訳として雑誌にも紹介された）をされたコーネリアス飯田君も居られた。

◇選択したゼミナールは、服部文四郎先生の「銀行論」だった。服部先生は高齢だったが、著書も有り、著名な先生でもあった。卒業論文の小生の課題は「国際世界中央銀行構想」という身分不相応なものだった。

◇その当時、明学等の大学は新制大学（別称、駅弁大学）と言われ、本格的な大学としての体裁を整えていなかった。狭い校舎と貧弱な設備での勉強だった。だが現在はどこの大学も立派な建物を擁しているが、肝心の学生は勉強よりも享楽を楽しむために大学生になっているみたいな感じ

がする。「犬も歩けば大学生に当たる」、「衣食足りて礼節を失う」では困ったものだ。

一九五三（昭和二十八年）　明治学院大学経済学科四年卒業、日本出版販売㈱経理部入社

◇卒業論文を社会学科一年の女子学生に清書して貰い、最終期日に提出した時、経済学科主任教授の齊藤茂夫先生が心配して待って居られたことを申し訳なかったと思っている。

◇その齊藤先生のお嬢さん（その当時としては珍しかった女子東大生）が、勤務先の会社まで書籍の事で相談に来られたのにはビックリした。会社は書籍雑誌の大手取次ぎ会社だったので、全ての物が集まって来た。数年後に父親が急逝した為、父が経営していた会社へ転職。

◇日本出版販売㈱へ入社して間もなく、社長（戦前の大蔵大臣・濱口幸雄の娘婿で、元日銀理事）の女性秘書が飛び込んで来て、秘書受付に「外国人が来たので急いで来て頂戴ね」と言われた時には、ドキドキしながら英語もどきで恥も晒さずに済んだ事があり、明学卒の株を上げる事が出来たと勝手に解釈した。

後記感想

◇明学の特性として感じるのは、タレント養成所的な所がなく良いのだが、お人好し過ぎて、良い意味でのハッタリや社会へのアピールが貧相なので、学校経営としても、文武両道で社会に存在感の有る方針を強力に進めて欲しい。

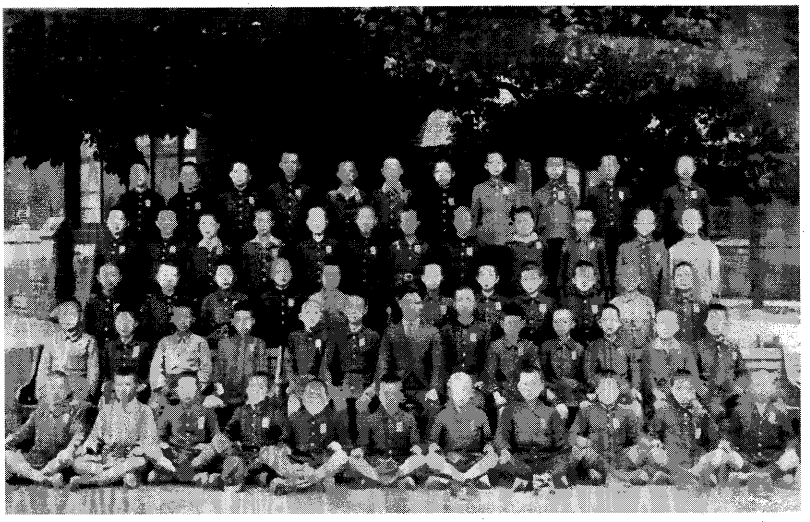
◇せめて、「ミッション・スクールと言えば明学」と言いたいのだが、自認はしていても「明学＝

ミッション・スクールの代表」としては、社会では無条件では認知されていない。昔もそうだったが、今でも明治大学の陰の部分になっているのも残念だ。最近の地区同窓会に招かれた「落語研究会」の現役学生の演技内での話題でもそのような内容が出て、「今でもか？このままだと女系大学としての存在感だけが高くなってしまうのではないか」と心配になった。

◇例えば、同じ学院でも、山梨学院と中央学院は「駅伝」、関東学院は「ラグビー」、青山学院は「オールラウンド」で世に認知されている。何か一つでも、突出した顕在化した存在感が明治学院にあっても良いのでは……。

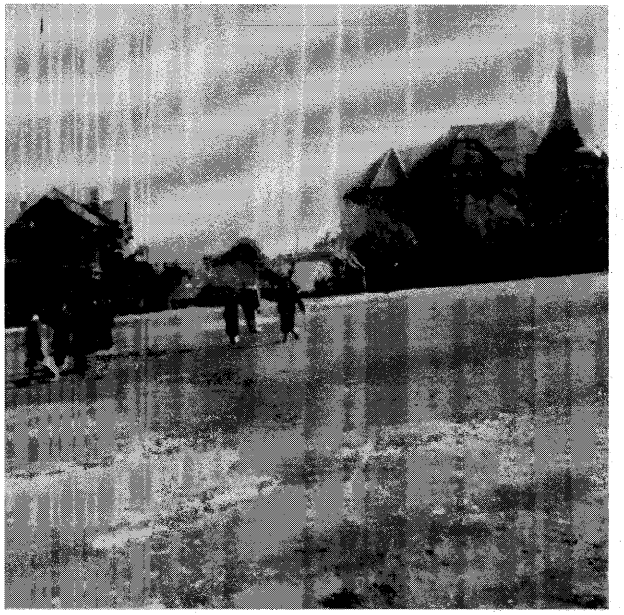
中学５年時

高校３年卒業時



中学１学年Ｅ組（担任）関根正治先生
（戦時中でも、Ａ組からＥ組だった）

高校３年時、バレーボール部
（部費が乏しくユニフォームはレギュラーのみ、最高成績は東京都高校バレー大会で都内全参加高校中第10位）



高校時代の校庭風景

明治学院大学　SCA
（中央齊藤茂夫経済学科主任教授　最後列右から５人目が、後の米国大統領府付通訳コーネリアス飯田国裕君）

1953年頃　明治学院大学　SCA

1953年　明治学院大学　SCA
（前列右から２人目は社会学科主任教授・若林龍夫先生のお嬢さん、２列目右から４人目は小生 副島秀夫）

戦後野球部史

―明治学院大学野球部―　昭和二十一年―昭和二十八年

望月克仁

経緯　学院創立百周年に際し、学院がその事業として、百年史を編纂する事に相成り、主筆の工藤先生より、野球部の戦後史がぼやけているので整理する様御依頼が有りました。

終戦直後の野球連盟がすでにない事、学院新聞のバックナンバーを追い切れない事も有って、古いOBにお集まり頂き、口づてに情報を集める事に致しました。

昭和五十二年二月四日六時～九時三十分　於小石川、イタリアンレストラン、トレッカ。

出席者　昭和二十二年専卒松木良夫、二十四年専卒寺田礼之、水本新平、青木真津男、二十五年専卒美濃部明、大沼肇、二十六年大卒山本睦男、山田峰一、二十九年大卒望月克仁、時田乃武、高山達一郎、川添種興、三十一年大卒国見博、三十二年大卒木々津俊次　以上十四名。

注記　人の名前がよく出て参りますが、全て敬称を略させて頂きます。

尚、確認の意味で、前記二月四日の会合の記録を二月五日全員に配布し、追加訂正をして頂き、二月十五日付にて下記の通り纏めました。

昭和二十一年秋
野球部の復活
（道具も無く、手弁当で）

終戦一年を経過した或る日、校内の掲示板に関係官庁からの通達が掲示された。「国民体育大会の野球試合参加の呼掛」であった。

当時の在校生は、或る者は復員して復学し、或る者は勤労働員から解放されて、食糧難の中にも、幾らかの落着を取り戻しつつあった。

戦時中の野球活動は、敵国競技として練習すら認められなかったので、戦前の野球部はもちろん解散されたままであった。

野球が出来ないままに、ラグビーをやっていた松木、久田等が、この掲示を見つけたところから、明治学院の戦後野球部史が始まる。

早速、掲示で在校生へ呼び掛けたところ、やっと九名を集めることが出来た。キャッチボールも碌々出来ない連中が数名、無理矢理引張り込まれた事は是非記録に残したい。

初めての試合
（団体予選）
豊島園球場

東日本代表決定戦に敗れた日は、丁度試験の前日であった。

集まった仲間には故人になった久田他数名、かつて野球をやっていた者がいたので、大将格の松木が得意なポジションを皆から聞いたところ、奥津、山県の両名がキャッチャーでぶつかってしまった。ところが身体の小さい山県の球がすごく速いのを見込んだ松木が、山県を強引に投手になるよう口説いてしまった。

かくして、国体京都大会の東日本代表予選は松木、久田、山県、長島、奥津、菊池、森本、田中、薮原、崎尾等のメンバーで構成する即席チームが、これも即席山県投手の

剛球の前に空振りを繰り返す相手を尻目に、何時の間にか決勝まで進出してしまった。

決勝戦の相手は早大であった。当時六大学リーグも再開されておらず、使用球は準硬式球であった。

前半は一対〇でリードした学院は、後半追いつかれ、延長戦に入って山県投手が連投に疲れ、四球連発で一対二、「押し出しで負け」となるが、チームとしては予期せぬ成果に意気盛んであった。

決勝戦に勝てば明日の学期試験へ出なくて済むと思っていたメンバーが、翌日に試験の答案を書いている顔を想像してやって頂きたい。昭和二十一年秋の事である。

昭和二十二年春 高専リーグの誕生とインターハイ

高千穂高商、芝浦工専、青山学院、久我山工専、東京外語、武蔵工専、日体専、本学院等が集まって、「リーグ戦をやるか」と言い出したのが昭和二十二年春。打合せの会に、当時のマネージャー青木が嶺岸先生を引っ張り出して参加したところ、他校は学生ばかり。「おれも若返ったよ」と先生に言われて冷汗をかいたと云うエピソードが有る程、確たる連盟組織が発足した訳でもなく、交代で当番校を持回り、リーグ戦が始まった。学生の手作りによるリーグは、各校の校庭がその舞台であった。

これとは別に、毎年一回、インターハイが開催されていた。

胸のマーク

戦後初代のナインがユニホームの胸につけたマークは、学生帽（丸帽）の徽章と同じ

MGマークであった。

マークの選定は、奥津が中心となり部員の合議で決まる。色は、誰かがビリヤードのラシャを探して来たので、緑色であった。無い物ずくめの時代の象徴である。

その後、昭和二十五年に筆記体の藍色マークに改まり（明大に似ていた）、首都大学リーグ入りしてから現在のマークに変わっている。

練習グラウンド

昭和二十一年代は練習の場所が無かった。翌年、三鷹の横河電機グラウンドを借りて練習し出したのは、最上級生の長島が横河のコーチをしていたコネからである。以来、転々とグラウンドを借りて歩く渡鳥練習の歴史が延々と続く。

隅田公園、錦糸町、多摩川読売、グリンパーク、鵜の木等々、溝の口の善隣グラウンドを経て、現在の東村山グラウンドが出来る迄、これが続き、白金の校内脇で猫の額程のグラウンドは、市電（都電）側のテニスコートに気を遣い乍ら、ピッチングやトスバッティング、バント、スライディングの練習場所であった。白金の中央校庭は、中高が独占していたからである。

昭和二十三年十一月八日 青山学院との定期戦の復活

本学の創立七十周年を記念して青山学院との定期戦が再開され、五対二で本学が勝っている。当番校を買って出た学院の第一難関はグラウンド探しであった。ハナフォード先生の打って下さった英文タイプの紹介状を持って、当時の青木マネージャーは青学と

神宮野球場

同道してＧＨＱへ飛び、横浜の駐留軍レジャー統括センターのあるキャンプを訪ね、当時は占領軍のフットボール場と化していた神宮野球場の借用に成功し、開催にこぎつけた。駐留軍施設の利用はその後の大沼マネージャーに引き継がれ、神宮球場、横浜ゲーリック球場へと拡大してゆく。戦後の神宮野球場の学生野球試合、いや日本人の野球試合第一号でもあった。

神田の共立講堂で文化祭が開かれ、その翌日、専門学校ＯＢ、専門学校、中学校の現役が各々対抗し、定期戦が再開された。

昭和二十五年
十二月四日
ヘボン博士渡日
九十周年記念

明治学院村田四郎院長・学長が好球式をしている。

定期戦について、下記の記事が残っている。

『ミッションの早慶戦として永い間都民に親しまれて来た青学・明学定期戦も、初の大学青学明学戦を行う事になりました。戦時中のブランクにより、往年の水準には及ばぬとは申せ、両軍とも此の一戦にたゆまぬ精進を続けて居り、学生野球の模範として、死力を尽くしての激闘が期待されています。

毎年秋のシーズンを飾るこの青学・明学戦は、毎年両学院創立記念祝賀行事として決行され、今年も又関係各位の御厚志により秋空高く神宮の森で盛大に行われます事は我々の最も喜びとし、且つ深く感謝している所であります。そして来年も再来年も永く永く此の青学・明学戦が健やかに成長し、親しまれる事を希望します。

御参考に現在迄の全戦成績は、明治学院が昨年九対二で勝ち、三勝一敗と青山学院をリードしております。』

添付のコピーには、応援団高島愈団長以下、興津、加藤、朝比奈、鉛川等の名前も記録されている。

高専リーグ、新制大学リーグへ

専門学校の卒業生は、昭和二十七年が最後であったと思う。

従って、昭和二十四年に新制大学発足以来の三年間は、専門学校、大学の在校生が一緒にプレーしている。

専門学校三年から新制大学四年へ進んだメンバーは、学院で云う四十八年度生で、昭和二十七年（西暦一九五二年）三月に卒業している。

昭和二十二年に発足した高専リーグは、新制大学発足後の昭和二十五年に、東京経済大学他数校を加えて新制大学リーグへ改まり、高専リーグは発展的に解消した。

高専随一の名ショート黒崎真三（昭和四十七年大卒）が居たことを記録しておく。

準硬式球から硬式球へ

昭和二十一年（一九四六年）の国体予選は、前述の通り準硬式球であったが、二十一年秋の昭和医専との対抗試合で初めて硬式球を使用し、以後は全て硬式球となった。

昭和二十六年春

東都大学野球リーグが三部を編成するに際し、本学への呼び掛けがあった。

首都大学リーグ三部入り

日大・専修・中央・駒沢・農大・国学院の東都リーグは、この時すでに新制大学リーグから東都入りしていた芝浦・青学・学習院・一橋・東工大・成蹊が二部リーグを構成し最後に加盟した本学を含め、東洋・大正・上智・教育・武蔵工大等で三部リーグが編成されており、巨大化して行く。

入れ替え戦は日大グラウンドで行なわれ、その対戦相手は仲間の高千穂大（旧高商）。これに勝って二部入りする。高山がスライダーを駆使してよく投げた。

昭和二十八年春 初の外人との試合

当時の野球部長松本亨先生（総主事）が設定し、米軍日吉キャンプとのオープン戦が挙行された。ブルックリン・ドジャースのエースというのが投げて、恐ろしく速い球にびっくりしたり、レフト・フライでホームも突いた選手が三本間の真ん中でつかまってしまう程の強肩にど肝を抜かれたりで、惨敗したが、試合後に食事をご馳走になったり、重いバットを持って帰った楽しい思い出が残っている。

このあとのリーグ戦で二部入りするが、その足掛かりになった試合かも知れない。

その後、昭和三十年頃、塩見監督（読売巨人軍の塩見選手の父親）が設営し、米軍多摩キャンプとの試合も行われた。

昭和二十八年春

三部、春のリーグ戦は佐々木、木々津の投手が交互に投げ、時田がリーディング・ヒッター、クリンナップもよく打って、十戦全勝の完全優勝であった。入替戦は二部の最下

位一橋と対戦する事になり、中大グラウンドで一回戦を先勝し、二回戦に敗れ、三回戦は学習院グラウンドで挙行されることになった。当時の野球部長松本亨先生（総主事）は、校内で早めの昼食をご馳走して下さり、その時のメニューは、「是非勝つ様に」とカツライスであった。

体育科は実技の時間を応援に充て、大勢の学生を応援に出して下さった。

学生食堂のオバサンはもし勝ったら「腹一杯券」を贈ると約束した。

試合は中盤までゼロ行進、勿論、両校共緊張の極、終盤、望月の大三塁打とスクイズで一点を先行、動揺した相手投手が国見の頭へ死球を当て、遂に力尽きて本学の勝ちとなった。その秋以降、国学院・青学・芝浦・東工大・成蹊と共に二部リーグを組んだ。

首都大学リーグ入り

以下後輩にゆずる。

歴代の部長先生

嶺岸（嶺忠）、加藤七郎、松本亨、猪熊文炳の諸先生方。

歴代の監督

松木良夫、荻原栄人、望月克仁、塩見、国見博、鈴木、吉田、枯木憲二。

トピックス

一、プロに進んだ卒業生

首都大学リーグの本塁打王森山が実は第一号。

昭和二十三年、後の巨人軍内藤二塁手は、水本の誘いで学院を受験し、見事合格。農

大か学院かと迷っている矢先に、巨人軍のテストに合格。遂に甲府中学から巨人へ進む事になってしまった。

昭和三十年、佐々木清が東映のテストを受け、「二、三ヶ月は二軍にいろ」と言われたが、止めている。山崎先輩が当時米川投手と懇意で駒沢のグラウンドへ、安井監督の率いる東映の投手としてテストを受けに行った。付添は山崎と望月の二人。佐々木は前夜来下痢をしてフラフラ、しかもピッチングの途中からあの土井垣捕手（阪神から移籍してすぐの事、クボミ目の恐い顔）が捕球を買って出てくれ、佐々木はタジタジ、気の弱かった佐々木にしてみれば、若しあの恐い土井垣の顔が無かりせば、もっとうまくいって、プロ入り第一号になったかも知れなかった。

二、夢の海外遠征

松本亨先生が副部長の頃、海外遠征の話が出て、ずい分期待したが、遂にブルックリン・ドジャースの本拠地への遠征は実を結ぶことが無かった。

三、女子応援団

青山学院との定期戦で、相手校には女子応援団があったが、当方には女気なし。うらやましかった。

四、青学定期戦

昭和二十五年十二月、入場券三十円をフェリス、双葉、香蘭、ドレメ等へ売り歩いた。

五、雑

一、昭和二十四～二十五年頃、学生会館が出来て、初めて部室をもらう。当時の花形は野球とラグビー。この二つの部が上下に分かれて大きい部屋を占領した。野球部室は二階であった。

二、ボールは、授業中に、外皮を裏返して自分達で縫った。

三、三鷹のコロッケ　練習の帰り道、唯一の楽しみはコロッケを買い食いする事であった。前記大沼あたりが、よく買いに行っている。

四、昭和二十六年頃、青山学院が当番校で、定期戦を後楽園で開催している。

五、三学院定期戦で、青山学院、関東学院との試合をしている。

六、ステート・サイド・パークは現神宮球場であり、ゲーリック球場は現在の横浜スタジアムである。

以上

戦後野球部史

―明治学院大学野球部― 昭和二十九年以降

国見　博

日本における野球の歴史を語る時、一部の書物や『白金通信』等にある通り、明治学院が草分けであることは周知の通りです。

私は、昭和二十一年～二十七年までは中高の硬式野球部に所属し、甲子園出場を夢見て毎日練習に励みました。バットの手入れ、ボールの縫い直し等、授業中にやったりもしました。

日の暮れるまで練習をし、ヘトヘトになり、帰りの電車の中で床にへたったこともありました。電車を降り、やっとの思いで駅近くの小さな店で、冬は餅入りの汁粉、夏は氷あずき、そして駅前の八百屋でリンゴを一個買い、食べながら帰りついたことを思い出します。青春を野球と共に過ごした六年間でした。

これからお話することが本題です。昭和二十七年～三十一年は大学硬式野球部です。正直言って高校野球に比べると大人の野球です。野球そのものも然りですが、周囲の環境や社会とのつながりが高校とは異なり、複雑です。

この間は正に明治学院大学野球部史にとって、過渡期であり激動期の始まりです。東都大学野球連盟三部リーグ（時には二部リーグ）で主に、鳴かず飛ばずの四年間でした。昭和三十一年卒業と同時に、当時の体育科の助手として就職しました。当時の体育科は高橋賢一先生はじめ、科全体が、当然のことながら

運動部を強くしようとする雰囲気が感じられました。私が助手として学生に野球を教え、それを単位取得の手段としてくれたのはその表れで、多分前代未聞の出来事だろうと思います。野球部に対する期待が高まる中、昭和三十年に大学は、都下東村山町にグラウンド用の土地を購入してくれました。野球場、総合グランド、ラグビー、サッカー、体育館、合宿所等に使用するためです。本当に待ちに待った出来事でした。しかし、その土地は全くの野原で、茅（と思います）が生い茂っていて、もちろん野球場にはなりません。私の一年、二年、三年後輩（だったと思います）が、連日茅を刈り整地をしたのです。このことは野球部史の新たな貴重な一ページでしょう。最終的には、専門家が素晴らしい野球場にしてくれました。合宿所も既存の建物を利用しました。食事も大口さんという方が気を配ってくれました。私は昭和三十一年から約二年程監督をし、合宿所にも寝泊りし、選手と一緒に生活をしました。野球場で公式戦も行うことが出来たのです。

その頃、水面下で、東都野球連盟を脱退して新リーグを結成し、大学野球のメッカである神宮の森第二球場で公式戦をやらせたいという、当時の東海大学総長松前重義氏の構想が実現に向かっていました。東都連盟三部の大学が五校賛同し、あと一校として明治学院大学野球部に強く要望がありました。「歴史があり、ネームバリューのある当大学に是非」ということでした。その要望を受け、当時の部長・猪熊文炳先生とＯＢ会長である私とが松前総長に面会し、最終的に参画することになりました。そのリーグ名も「首都大学リーグ」と決まり、昭和三十九年に発足し、リーグ戦が開始したのです。学校当局も理解を示し、又部長の積極的かつ熱意溢れる援助により専任の監督を枯木憲二氏にお願いし、枯木氏を慕って来る地方名門校の選手を二部推薦入学で受け入れ、部を強化し、名実共に内外にアピールしたのです。

待望すること久しい昭和四十五年そして四十九年の二度、現在のＯＢ会長平野明治氏、監督の森山正義氏二人のスーパースター・コンビを擁して、明治学院大学野球部は優勝したのです。学内は騒然。前述の体育科は、その観戦のために大型バスを用意し、球場まで学生を動員したのです。この事から学校当局、監督、選手が三位一体となり、ＯＢ会が支援することで部は優勝できるのだと強く思いました。

その後長い間、一部で活躍していた本学にとって、残念な出来事が降って湧いたのです。それは、「二部推薦入学制度を悪用した」と本学を名指しで、昭和五十六年四月九日の読売新聞朝刊に非難記事が載ったことでした。それ以後、推薦入学が出来なくなり、選手が集まらなくなったのが原因したのか、長い低迷時代の末、二部に降格したのです。誠に残念な出来事でした。

時は移り本大学が二部優勝し、一部との入替戦で見事勝利。一部昇格を果たし、平成十九年十二月十五日にはその祝勝会がパレットゾーンで盛大に行われました。学校当局のプロジェクト支援、平野ＯＢ会長と森山監督の黄金コンビに選手が応えた結果の宿願一部昇格です。

平野ＯＢ会長、森山監督の黄金コンビを擁して、これから一部優勝を念願して止みません。

二〇〇八年三月二十五日　印刷
二〇〇八年三月二十五日　発行

明治学院歴史資料館資料集【第五集】
―戦前・戦中・戦後の明治学院―

東京都港区白金台一ノ二ノ三七
編集代表　久山道彦

東京都港区白金台一ノ二ノ三七
発行者　久世了

東京都港区白金台一ノ二ノ三七
発行所　明治学院歴史資料館
電話　〇三（五四二一）五一七〇

東京都豊島区東池袋五ノ四九ノ六
印刷所　株式会社　白峰社
電話　〇三（三九八三）二三一一

『明治学院歴史資料館資料集』第5集正誤表

	誤	正
11頁15行目	風呂敷包みに包んで	背嚢に入れて
22頁3行目	南	大河原
26頁13行目	学徒出陣	学徒動員
37頁2行目	九月末	10月
38頁8行目	ないもない	もない
63頁15行目	神戸高商	彦根高商
65頁16行目	経営科	経済科
98頁2行目	今井　洋	今井　洋一
152頁2、11行目	院長	院長事務取扱
196頁11行目	お兄様	弟さん